# 神秘学ポエジー 風遊戯 mediopos 116

【神秘学ポエジー〜風遊戯 第 237集】media-poesieヴァージョン

mediopos 2876-2900

2022.10.2〜 2022.10.26

神秘学遊戯団

☆mediopos-2876　　2022.10.2

「人形と人間のあいだ」というテーマで
本日10月2日からＮＨＫラジオ（第２放送）
「こころをよむ」の放送がはじまる
（１２月まで全１３回）

人形をメインテーマとしたこうした放送は
珍しいのでとりあげてみることに

人形といえば
いちばん古い記憶では（小学校に入った頃）
くまのぬいぐるみ抱いて寝ていたことがある
ライナスの毛布のようなものだ

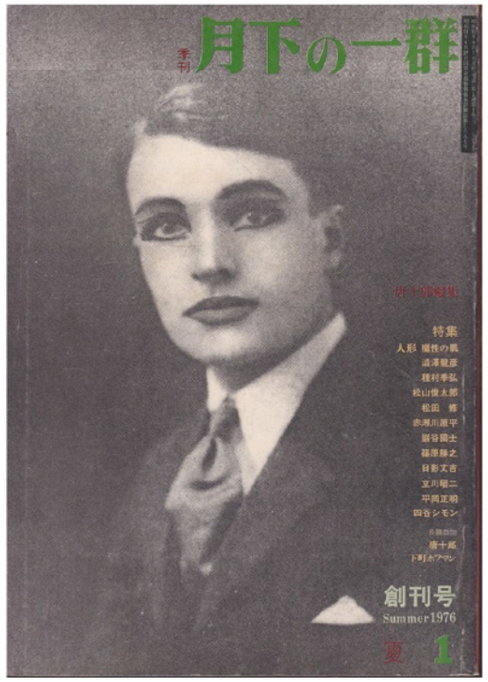
ライナスはチャーリー・ブラウンのでてくる
「ピーナッツ」という漫画に登場する男の子で
いつもお気に入りの毛布を引きずって歩いている
いわゆる「安心毛布」だ

ひとは多かれ少なかれ
また子どもか大人かを問わず
じぶんを投影させたなにかを
じぶんの外にもっている

極論をいえば「じぶん」というのは
じぶんの外にある世界のことでもあるから
その外にある世界に
じぶんの分身を置こうとして
それが「人形」というかたちをとる

その「人形」はさまざまなかたちをとるが
人形は漢字で「ひとがた」と書くように
日本における人形は
病気や天災を祓うための儀式・お祭りに使う
紙などで出来た「ひとがた」が最初のようだ

そのようにじぶんの願いなどの思いを
じぶんの外に分身として投影させて
それにさまざまな役割をさせようとする
そしてそれに愛情を注ぐこともあれば
そうしいぇ投影したものを恐れたりもする



■菊地浩平『人形と人間のあいだ』
（NHKテキスト　こころをよむ　NHK出版 2022/9）
■四谷シモン『人形作家』
（講談社現代新書　講談社 2002/11）
■唐十郎編集『季刊 月下の一群 創刊号 特集:人形 魔性の肌』
（海潮社 1976/5）

「人形と人間のあいだ」というテーマで
本日10月2日からＮＨＫラジオ（第２放送）
「こころをよむ」の放送がはじまる
（１２月まで全１３回）

人形をメインテーマとしたこうした放送は
珍しいのでとりあげてみることに

人形といえば
いちばん古い記憶では（小学校に入った頃）
くまのぬいぐるみ抱いて寝ていたことがある
ライナスの毛布のようなものだ

ライナスはチャーリー・ブラウンのでてくる
「ピーナッツ」という漫画に登場する男の子で
いつもお気に入りの毛布を引きずって歩いている
いわゆる「安心毛布」だ

ひとは多かれ少なかれ
また子どもか大人かを問わず
じぶんを投影させたなにかを
じぶんの外にもっている

極論をいえば「じぶん」というのは
じぶんの外にある世界のことでもあるから
その外にある世界に
じぶんの分身を置こうとして
それが「人形」というかたちをとる

その「人形」はさまざまなかたちをとるが
人形は漢字で「ひとがた」と書くように
日本における人形は
病気や天災を祓うための儀式・お祭りに使う
紙などで出来た「ひとがた」が最初のようだ

そのようにじぶんの願いなどの思いを
じぶんの外に分身として投影させて
それにさまざまな役割をさせようとする
そしてそれに愛情を注ぐこともあれば
そうしいぇ投影したものを恐れたりもする

（菊地浩平『人形と人間のあいだ』〜「はじめに」より）

「わたしは今現在、大学で人形文化の研究をしています。ここでいう人形文化とは、人形が登場する儀式やお祭り、人形劇、着ぐるみ、ぬいぐるみ、着せ替え人形からデジタル化された画面の向こうの「人形もどき」までを含む、広義の人形たちが織り成す文化的営みを指します。」
「本書では可能なかぎりいろいろなタイプの人形に触れていきます。呪いのわら人形や人形劇、ぬいぐるみといったよく知られたものから、もしかしたら皆さんにはあまり耳なじみのないような最新テクノロジーと強く結び付いた「人形もどき」まで、扱う対象は非常に幅広いです。もしかしたら、そんなものも人形文化の範疇に入るのかと思われる方もいるかもしれません。しかしそれは人形文化の可能性を知っていただくための、なるべくたくさんの方に興味を持っていただくための、わたしなりの工夫ですので、ぜひこの機会に新たな世界の扉を開いていただければ幸いです。」

（菊地浩平『人形と人間のあいだ』〜「第1回 人形とは何だろうか」より）

「人形は漢字で、「ひとのかたち」と書きます。病気や天災を祓うための儀式や、お祭りに使う紙などで出来たものは「ひとがた」と呼ばれることもあり、今でも各地で使われています。これが日本における人形のご先祖様といって良いと思います。
　一方で、テクノロジーが発達したことによって最近は人形の定義が広がってきているようにも思います。」

「病や災厄を祓うためにひとがたを利用するのは珍しいことではなく、キャラクターのぬいぐるみにそうした願いを込めるという行為もそう的外れではありません。人形研究家の山田徳兵衛は、（･･･）ぬいぐるみの「先輩」である這子（ほうこ）や天児（あまがつ）にもそれに類する機能があったと述べています。
（･･･）
　ここで興味深いのは、当初「誕生の魔除け」であった這子や天児が、やがて子どもの「おもちゃ」になったという部分です。元々どんな願いが込められたものであろうとも、ひとたびおもちゃになってしまえば、撫でられたり噛まれたり振り回されちぎられる運命が待っています。
　しかしそこからまた、子どもが成長して家を出たりすることになると、おもちゃは残された者たちにとって特別な意味合いを帯びるはずです。そうした人形の特別さ、神聖さ、親しみやすさ、儚さが混ざり合い常にそのバランスがうつろい続ける性質が今日まで引き継がれているからこそ、〈マスク地蔵〉のような存在が生まれたのではないでしょうか。」

「皆さんは「人形供養」をご存じでしょうか。
　人形供養とは、全国津々浦々の寺社で実施されている儀式で、大まかな流れとしては、人形の魂を抜いたのち一定の手順を踏んで供養をするというものです。人形文化研究者のひとりとして、わたしも機会があれば様々な土地に出向いて、参加するようにしています。
（･･･）
　人形供養は簡単にいえば人形版のお葬式です。お葬式が死者のためだけでなく、残された人たちにとっての重要な区切りでもあるように、供養には、未来へ一歩踏み出そうとする人たちの祈りが捧げられています。なので、遊び半分で見学に行くことは許されない場所ですが、同時に人形と人間のディープで複雑な関係のエッセンスが凝縮された、実に興味深い儀式だともいえます。」

（菊地浩平『人形と人間のあいだ』〜「第2回 わら人形は、なぜこわいのか」より）

「わら人形と聞くと多くの人が思い浮かべるのが丑の刻参りではないでしょうか。」

「わら人形は十分〝現役〟の存在です。最近では、二〇一七年が〝あたり年〟だったといって良いと思います。東京国立博物館で「マジカル・アジア」と題した展示に、上野公園で一八七七（明治一〇）年に発見されたわら人形が展示され、話題となりました。わたしも見にいきましたが、透明のケースに入れられていても、背筋がぞっとするような感覚を覚えた記憶があります。
　また、わら人形が関わる事件が、二〇一七年一月だけで二件もニュースになりました。」

「このような事例は、一見非科学的に思えるような存在や事象を信じたり感じたりする力が、われわれの世界から完全には消えていない証拠です。「呪」は〝まじない〟とも読みます。地方によっては、コミュニティーの守り神の役割を果たす巨大なわら人形を山道にこしらえる習慣が今もありますが、そこに託されるのはしばしば五穀豊穣や無病息災といった極めて素朴で切実な祈りに他なりません。同じわら人形でも、これらは呪いより〝まじない〟の道具として利用されていることがわかります。」

「こうしたエピソードから分かるのは、前近代的、非科学的だといわれようと、呪いやまじないは、今日においても世界のあらゆる場所にひそんでいて、われわれは案外、それに左右されてしまうということです。」

（菊地浩平『人形と人間のあいだ』〜「第13回 なぜ人形について考えるのか」より）

「人形をなんとなくこわいものと捉えている方は多くいらっしゃいます。わたしが普段接している大学生も、日本人形やくるみ割り人形、ぬいぐるみ、着ぐるみ、ロボットなど、様々な人形をこわいといっています。
　彼らになぜこわいのかと聞いてみると、単純に顔の造形などの見た目が苦手という意見もある一方で、元々大切にしていた人形を粗末に扱ってしまった、壊してしまった、八つ当たりしてしまったなどの経験から来る罪悪感でこわく感じる、という意見がよく出てきます。」

（四谷シモン『人形作家』より）

「二十数年間人形を作ることを教えていて、すべての生徒にいえることがひとつあります。同じ教材を与えているのに、よくぞここまでその人のニュアンスが出てくるものだということです。全員の作品にその人の「自分」が出ているのです。それを見ていると、人という生き物はこんなにも自分自身から逃れれらない自己愛の強い存在なのだなと感じます。
　人形は具体的なものですから、表現に個が出やすいということはあります。料理や花のいけ方などにもその人の個性は出ますが、いかんせん人形はヒトガタですから、明快に個性が露出するのです。人形には作者本人に似るなにかがどうしてもでてしまうものなのです。
　そんなことを考えているうちに、逃れきれない自己愛、ナルシシズムが誰にでもあるならば、あえてそれをテーマにして意図的に作品化しようと思い立ちました。人形というのは自分自身であり、分離しているようでしていないという作為的、幻想的な考え方をするようになったのです。
　こうして生まれた「ナルシシズム」「ピグマリオニスム・ナルシシズム」などの作品は、絵画や写真のセルフポートレイトとは少し違っていますが、おそらく「これも僕です」といえるものなのではないかと思っています。
　「人形は人形である」というところから出発しましたが、人形は自分で自分は人形という、自己愛と人形愛の重ね合わせが現段階での僕の考え方です。」

◎菊地浩平『人形と人間のあいだ』《目次》

第1回 人形とは何だろうか
第2回 わら人形は、なぜこわいのか
第3回 動員された人形劇
第4回 なぜ、テレビは人形を必要としたのか(前編)
第5回 なぜ、テレビは人形を必要としたのか(後編)
第6回 着ぐるみ学入門
第7回 大人たちはぬいぐるみを捨てるべきか
第8回 人形愛はアップデートできるか
第9回 リカちゃん、現代〈いま〉を生きる
第10回 初音ミクになぜ「がんばれ」と声をかけるのか
第11回 アバターと生きるこの世界
第12回 アンドロイドに尊厳はあるか
第13回 なぜ人形について考えるのか

☆mediopos-2877　　2022.10.3

歴史を語る人称が変化しようとしている

「歴史が作者の主観性のプリズムを通して、
次第に多くは一人称で書かれるようになっている」

歴史家は過去を三人称的に再構成するというよりも
解釈するようになってきているが
その傾向は二一世紀の転換期に強まり
歴史家の自伝も増え
「主観主義的な歴史記述の新形式に移った」のだという

その傾向をわかりやすくいえば
歴史と文学が「相互干渉／侵犯」している
ということでもある

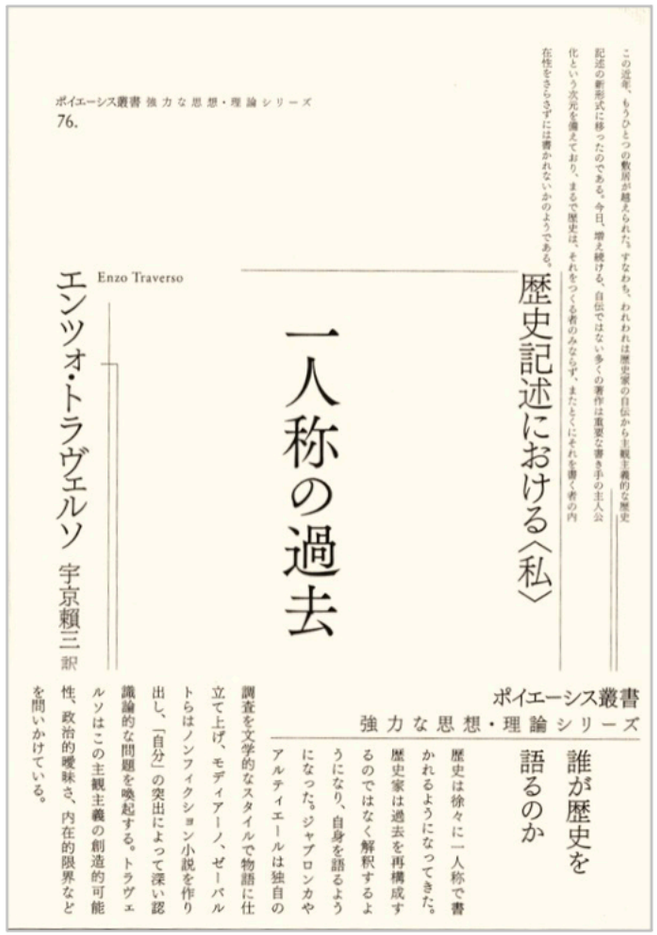
こうした現象は一九八〇年に刊行された
「ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』で予示され
「二〇〇〇年代の初めにフランスを中心に
イタリア、スペインにも生じた」

その原因のひとつに
ネオリベラリズムの出現があり
それにともなって個人主義的傾向が強まり
それは「自撮り（selfie）」に象徴されている

つまり「書くということ、とりわけ
自己について書くということの民主化」であり
いわば知的エリートにより独占されていた書くことが
「下からの歴史」の傾向を強めてきているということだ

もともとラテン語系の言語の
フランス語histoire・イタリア語storiaには
「歴史」と「物語」の両方の意味があるが
かつて歴史記述が三人称的な記述であり
文学表現の典型が一人称的なものだったのが

■エンツォ・トラヴェルソ（宇京頼三訳）
『一人称の過去 歴史記述における〈私〉』
（ポイエーシス叢書　未来社 2022/7）




「書くこと」の民主化・個人主義化によって
「相互干渉／侵犯」が起こり
その結果として歴史が一人称的な記述へと
シフトしてきているという現象が起こっているのだ

ある意味でそれまで背後に隠れていた「私」が
だれでも書き・発信できる時代を受けて
（ＳＮＳ等での過剰なまでの自己表現欲求もそうだが）
歴史の語り手として顔を見せはじめている
ということでもあるのだろう

その現象をどう問い理解するか
そして今後それがどうなっていくかを
注視しておく必要がありそうだ

▪エンツォ・トラヴェルソ（宇京頼三訳)
『一人称の過去 歴史記述における〈私〉』
（ポイエーシス叢書　未来社 2022/7）

「ことは単純である。歴史が作者の主観性のプリズムを通して、次第に多くは一人称で書かれるようになっている。文学では、この現象が古くてもーーーー『神曲』におけるダンテの語りを考えているだけだがーーーー、歴史においては別で、まったくこれまでなかったことである。この自我の侵略的な飛躍には当惑させられる。これは歴史家としての私の慣行を問い質し、またわれわれが生きている世界に関する別のより深刻な問題も提起する。「自撮り（selfie）」の時代は歴史記述の慣行にまで影響するのか？　それがもたらす方法論的変革を課投げる前、本のカバーに作者の顔写真を載せるという傾向がだんだんと増しているように、些末な細部にまで入り込む主観性の新しい一を確認しておこう。こういう作者の決心は必ずしもその「エゴティズム」ーーーー「私の好みのテーマ、私自身」ーーーーからではなく。むしろ主観性がわれわれの文化、転じて、物（もの）化された公的領域に占める新しい位置から生じている。」

「二一世紀の転換期に、歴史家の自伝が増えた。この新しい文学的ジャンルの正当なる分析家であるジェレミー・D・ポプキンとハウメ・アウレルは、この近年三〇年間に現れたその数百例を調査した。そのような広がりのある現象は研究に値すると主張しながらも、彼らは必ずその若干逆説的な性格も指摘した。概して、研究者の生活は講義やセミナーを行ない、コロックに参加し、資料館や図書かにこもることだが、それは当然ながらジェームズ・ボンド流の冒険のように胸躍るものではない。それでも、歴史家がその生活を語る楽しみは広まった。それまでこの自己反省的な享楽はその名声を意識し、キャリアの特異な性格を誇るごとく少数の学者のものだった。彼らはエリート層に属していた。彼らは普通の歴史家集団から出て、å回想録作者になったのである。」

「こうした歴史家の自伝は数多く増えているのはおそらく、部分的にはより幅広い傾向の反映である。つまり、書くということ、とりわけ自己について書くということの民主化である。一九世紀は文盲撲滅闘争、二〇世紀は読書普及の時代である。われわれはそれまで排除されていた人びとによる書くことへの適応化の時代に入ったのだ。かくして、知的エリートによる書くことの独占が終わり、普通の男女がその人生を語るようになった。「下からの歴史」の誕生は「下から」の自伝と不可分であるが、これは、広がりはあってもマージナルで、メディアや出版界のルートからは外れて、いわば陰で生まれて広まったものである。そしてこのテクスト世界の驚くべき豊かさを最初に理解したのが、まさしく歴史家なのである。イタリアでは、書くことに近づけなかった人びとの証言を書きとめる歴史家が数多くいた。」

「この近年、もうひとつの敷居が越えられた。すなわち、われわれは歴史家の自伝から主観主義的な歴史記述の新形式に移ったのである。今日、増え続ける、自伝ではない多くの著作は重要な書き手の主人公化（homodiégétique）という次元を備えており、まるで歴史は、それをつくる者のみならず、またとくにそれを書く者の内在性をさらさずには書かれないかのようである。語の慣例的な意味における歴史でも自伝でもない、このハイブリッドな新ジャンルはかなりの成功を収めた。これは伝統を侵犯し。文学的規範を越えて、歴史的分野一般に認められた、いくつかの基本的な前提を見直した。（･･･）私が検討に専念するのは。歴史記述と歴史家の自意識における主観性に与えられたこの新しい位置である。ここで明確にしておきたいのは、私の意図は反自伝的な文学の古い構築物に新しい石を加えることではないことだ。反自伝的な文学の起源は少なくともパスカルとその有名な一文「自我は嫌悪すべきものである」に溯り、これはたんなる警句以上に実際の不快感を示しているのである。『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』の構成に使われた自伝的な断片において、ヴァルター・ベンヤミンは批評家としてつねに、単純だが入念に配慮した「唯一の小さな規則」を固守したと認めている。つまり、「手紙を除いて〝私〟という語はけっして使わないこと」である。ベルリンについて一人称でコラムを書くよう提案されると、彼はごく自然なためらいを克服しなければならなかった。「突然、それまで何年も後景にあることに慣れていたこの私という主体が、そう簡単にはフットライトのそばに呼ばれるままにはならないことがわかった」。」

「実を言うと、小説家ナルシスと歴史家ナルシスは並列するのではなく。結合し、さらにはハイブリッドな表象として融合する傾向にある。なぜなら、本書の結論で見ることになるが、主観主義的な歴史家はその文学的野心を隠さないのに対して、多くの小説家は歴史家のように書きはじめ、セカイヲ探検し、「文学的なノンフィクション」の作品を生んでいるのだから。文学的ナルシシズムに倣って、歴史家暦的ナルシシズムは他者からの批評を要請し、その成果が無視されるものではなく、ときには非人称の歴史のそれよりも注目すべきものでさえあると考えているのである。」

「読者には、少なくとも私はそう期待したいのだが、本書がこの新しい歴史記述に反対するのではなく、その誕生の理由を問い考えるものであることを理解してもらいたい。その正当性とか質を否定することが問題なのではない。この記述の結果はときには注目すべきものであり、ときには、とくにその解釈学によって不可避的にさらされるリスクのために、議論の余地があるものとなる。こうした危険の主たるものは、その格子を外すどころかわれわれを窒息させる現在主義の鋼鉄の檻の中に閉じこもることである。われわれの多様な「私」ーーーー立場の、調査の、情動の私ーーーーの展開展望に開かれた地平の豊かさを探求したあと、歴史はとりわけ「われわれ」によって形つくられ、出来上がったものであることを忘れてはならない。」

（「訳者あとがき」より）

「本書『一人称の過去 歴史記述における〈私〉』だが、これはこれまでエンツォ・トラヴェルソの著作からすると、かなり異色である。」

「（本書は）従来の思想史的な観点から現代史を論じたものから、視座を変えて、歴史記述をめぐって二つのディシプリン、歴史と文学の関係、その相互干渉／侵犯の問題を扱っている。（･･･）つまり、三人称で書くはずの歴史家が一人称で語り、一人称で書くはずの小説家が三人称で物るという相互干渉・侵犯がおこっているというのである。ただ小説家が三人称で語る叙述形式はなかったわけではなく、古今東西、昔から歴史に題材をとった小説や物語は数多くある。だが歴史家が一人称で語ることはなかったであろう。こうした傾向がある頃から文化的・社会的現象となり、著者トラヴェルソはこれに注目したのである。もちろん力点を置いているのは、歴史家における一人称の記述だが、この現象をトラヴェルソらしい透徹した目で、豊富な情報、学殖を駆使して、鋭く分析している。
　彼によれば、この現象は、ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』（一九八〇年）によって予示され、二〇〇〇年代の初めにフランスを中心にイタリア、スペインにも生じたとしているが、本書では、それがなぜなのかを分析・論述している。そこでとりわけ興味深いのは、その拠ってきたる原因のひとつにネオリベラリズム（新自由主義）の出現があり、その系として生まれた個人主義が現代のハビトゥスとなり、これがデジタル社会の「セルフィ」に象徴され、歴史の主観的記述、「一人称の過去」の記述に対応するものだという。きわめてアクチュアルな認識を示し、批判的に検討・吟味しているのである。」

◎目次

序 章 第1章 三人称で書くこと
第2章 客観性の罠
第3章 歴史的エゴ
第4章 語り手〈Je=私〉の小目録
第5章 方法論
第6章 モデル:映画と文学のあいだの歴史
第7章 歴史とフィクション
第8章 現在主義

☆mediopos-2878　　2022.10.4

ミヒャエル・エンデが
三章まで残した物語を書き継ぎ
児童文学作家ヴィーラント・フロイントが
全一六章の物語として完成させ
ドイツで二〇一九年に刊行された作品が
こうして翻訳されて読めるようになった

「悪」と「おそれ」の真の意味を教えてくれる
盗賊騎士ロドリゴ・ラウバインと
少年クニルプスのメルヘン

すでにエンデの残した三章までの物語は
ロマン・ホッケ編・田村都志夫訳で二〇〇二年に
『だれでもない庭 ― エンデが遺した物語集』に
収録されているがその物語はまだ序章

どんな物語として展開されるかは未完のまま
エンデの心のなかにしか存在しなくなっていた

こうして書き継がれ刊行された物語は
エンデの意図をどれだけ反映できているだろうか
少しばかり心配もしながら読みすすめたが
それは杞憂だったようだ
（エンデのじっさいの意図がどうだったのかは
永遠の謎のままでしかないけれど）

しかも訳書にはこのmeioposでもとりあげた
エンデ『鏡のなかの鏡――迷宮――』へのオマージュ作
『ＥＮＤＥ』の作者junaidaの挿画も
60点以上添えられている贅沢な一冊だ

▪ミヒャエル・エンデ／ヴィーラント・フロイント（木本栄訳／junaida絵）
『ロドリゴ・ラウバインと従者クニルプス』
（小学館　2022/7）
▪ミヒャエル エンデ（ロマン・ホッケ編・田村都志夫訳）
『だれでもない庭 ― エンデが遺した物語集』
（岩波書店　2002/4）

本作のテーマはおそらく「悪」と「おそれ」

はじめはまったく「おそれ」を知らずにいた
主人公の少年クニルプスはそれゆえに「悪」を知らない
ということは「善」もまた知らない
そしてやがて「おそれ」を知ることによって
「善」と「悪」を知ることになる
そして「善」のためにこそ
「勇気」が必要であることを知る

おそらくエンデが実際にこの物語を展開させていたとしたら
そこらへんのテーマ展開がもう少し
陰影のある両義性をふくませたものに
なっていたのかもしれないけれど･･･

そんなことをいろいろと想像してみるのも
本書を読みすすめる楽しみのひとつになるのかもしれない

▪ミヒャエル・エンデ／ヴィーラント・フロイント（木本栄訳／junaida絵）
　『ロドリゴ・ラウバインと従者クニルプス』
　（小学館　2022/7）
▪ミヒャエル エンデ（ロマン・ホッケ編・田村都志夫訳）
　『だれでもない庭 ― エンデが遺した物語集』
　（岩波書店　2002/4）

（『ロドリゴ・ラウバインと従者クニルプス　１３　盗賊騎士と従者見習い、まちがった場所で正しいことをいう』より）

「クニルプスはさらに興奮したようにつづけた・
「それでぼくは思ったんあだ。きっと、ちゃんとおそれを知っている騎士こそ、ほんものの、一人前の騎士なんだって。おそれは。善と悪を区別することを教えてくれるから。どうやってそれを乗りこえたらいいのか、っていう勇気についても教えてくれる。そうでしょ、ロディおじさん？　悪のためには勇気はいらない。勇気は、善のためだけに必要なんだ、って」」

（『ロドリゴ・ラウバインと従者クニルプス』〜「訳者あとがき」より）

「ほんとうは心優しくこわがり屋なのに、表向きは世にもおそろしい盗賊騎士に見せかけているロドリゴ・ラウバイン。そんな彼のもとへ、こわいもの知らずの少年クニルプスが従者にしてくれとおしかけてきらのだから、さあこまった！　ろ、はじまるこの物語。ところが、『モモ』や『はてしない物語』などで世界的に知られ、日本とも縁が深かったあのミヒャエル・エンデは、三章まで書いたきり作品を完成させることなく、あまりにもはやく世を去ってしまった。
　のちに遺稿集『Der Niemandsgarten』（邦訳『だれでもない庭 ― エンデが遺した物語集』、岩波書店）に収録されることになるこの断片を、エンデの長年の編集者であり友人でもあったロマン・ホッケが発見したとき、これほど完成度の高い作品が存在していたことにおどろいたという。晩年に書かれたこの物語は、手書きの草稿をもとにきちんとタイプして清書されており、作者が念入りに推敲を重ねた文章であることがうかがえた。ただ。エンデは物語性だけではなく、作品により深い意味をあたえる理念をもとめていた。本作品でも、テーマとなっている「悪」や「おそれ」が真に何を意味するかについてずっと思索していたものの、理念（イデー）が見つからなかったために未完のまま残されたのだろう、とホッケは述べている。（Zeit誌インタビューより）つねにじっくりと納得するまで考え、執筆に五年も十年もかけるエンデにもっと時間があたえられていたら、どんなふうに書きあげただろうか。
　それがもはや本人の手ではかなわないかわりに、二十余年後に完成させたのがヴィーラント・フロイントである。彼は十歳のときに『はてしない物語』を夢中になって読んで以来、その読書体験が人生の指針になり、やがて自らも児童文学作家への道を選んだ。フロイントは、エンデが語り始めたストーリーを引きつぐという難題に着手するにあたり、ロドリゴとクニルプス以外の重要な登場人物に、馬車のなかにぶらさがりあやつり人形ーーーー姫、王、魔法使い、馬、竜や騎士ーーーーをエンデからすでにあたえられた顔ぶれとして生かしたという。そうしてしっかり者の姫、メランコリックな王や邪悪な魔術師など、個性的なキャラクターたちがそろった。また、物語の行方をおって飛びまわるオウムのソクラテスは、次の展開を模索しながら執筆したフロイント自身と重なるのだという。かくして。こわいもの知らずの少年とこわがり屋の盗賊騎士はふたたび動きだしたのである。ちなみに、言葉遊びを好んだエンデがつけた主役たちの名前だが、ラウバイン（Raubein）は粗野な人や無骨者を、クニルプス（Knirps）は少年やちびっ子を意味する。」

☆mediopos-2879　　2022.10.5

ジョン・マンデヴィルの『東方旅行記』のことは
まったく知らずにいたのだが
（そもそも宮田珠己という著者のこともはじめて知る）

宮田珠己の『アーサー・マンデヴィルの不合理な冒険』は
そのデタラメ旅行記の作者である
ジョン・マンデヴィルを（亡き）父にもつ
アーサー・マンデヴィルが教皇に命じられ
そこに描かれている「プレスター・ジョンの王国」へと出向き
「かの王国と同盟を結」ぶべく親書を託される…
という設定で語られる奇想天外な旅行記である

はじめから「ありもしない王国を探しに行くなど、
人生をねずみの餌にくれてやるようなものだ」という主人公に
柄の悪い傲岸不遜な修道士ペトルスと
書物好きで夢見がちな弟エドガーが同行する
ひたすら東へと向かう旅である

それは羊のなる木や
魚にまたがるアマゾネス
犬頭人にマンドラゴラ
背中にギザギザのある怪物などなどがいるという
荒唐無稽な東洋奇譚となっているが

発想のもとになっているのは
ジョン・マンデヴィルの『東方旅行記』と
いうまでもなくマルコ・ポーロ『東方見聞録』
その他にも著者自身のつくっている選書リストもある

そしてこの奇譚を書く動機づけになっているのは
渋澤龍彦の『高丘親王航海記』のようだが
個人的にはむしろ本書のほうが
ユーモアたっぷりで面白かったりもする

イラストを担当した網代幸介も
「それはそれは面白くて、
これは写本を残さねばというテンションにな」ったそうで
それで作られたらしい「じゃばら絵巻絵巻」も豪華で
遊び感覚にあふれている

▪宮田珠己（イラスト：網代幸介）
『アーサー・マンデヴィルの不合理な冒険』
（大福書林　2021/10）

ストーリーは荒唐無稽であるものの
旅の最後の少しばかり微笑ましくも感じるエンディングまで
それなりに筋が通っていて読後感も悪くない
なによりお説教くさいところがまるでないのがいい

著者は「不思議な世界の冒険譚が昔から好き」で
子どものころ『ドリトル先生航海記』『ガリバー旅行記』
『船乗りクプクプの冒険』などを夢中になって読んだというが
たしかに本書を読みながら
かつて読んだそうした物語が懐かしく思されたりもする

ああ面白かった！
そう思える無邪気な時間が持てるのは
なんと贅沢なことだろうか
意味に雁字搦めにされがちな時代だからこそ
こんな意味づけから自由になれる贅沢を忘れてはいけない

▪宮田珠己（イラスト：網代幸介）
『アーサー・マンデヴィルの不合理な冒険』
（大福書林　2021/10）

（「第２章　スキタイの子羊を求めて」より）

「教皇はわたしに、プレスター・ジョンの王国へ出向けと命じられた。
キリスト教徒にとってローマ教皇の命令は絶対である。
だが畏れ多いことに、わたしはその計画に賛成することができなかった。
なぜなら、父の著書『東方旅行記』に書かれてある内容はほぼ嘘八百であり、そこに書かれたプレスター・ジョンの王国への道筋などでたらめに決まっているからである。あの稀代のイカモノがご丁寧にも知りもしない王国への道筋まで書き込んでいたとは、馬鹿につける薬はないとはこのことだ。」

（付録：宮田珠己「『アーサー・マンデヴィルの不合理な冒険』をめぐる選書リスト」より）

「不思議な世界の冒険譚が昔から好きでした。子どもの頃『ドリトル先生航海記』シリーズや、『ガリバー旅行記』、『船乗りクプクプの冒険』などを夢中で読み、大人になってからは『高丘親王航海記』に感動し、いつか自分もそんなちょっとユーモラスな雰囲気のある冒険物語を書いてみたいと思っていました。今回ようやくそれを形にすることができ、宿題をやっとひとつ終えた気分です。そのうえ、憧れていた網代幸介さんに素晴らしい絵を描いていただき、作者としてこれ以上の喜びはありません。みなさんにもぜひこの奇妙で不思議な世界で心遊ばせてもらえたらと思います。」

『東方旅行記』
ジョン・マンデヴィル（東洋文庫）
『アーサー・マンデヴィルの不合理な冒険』の原典であるデタラメ旅行記。内容がぶっ飛んでいて面白い。とりわけ中盤以降のアジアに入ってからが最高。ほとんどは他の見聞録などからの剽窃だが、奇抜な話ばかりを煮詰めた感があって楽しい。ずっと愛読していた。

『高丘親王航海記』
渋澤龍彦（文春文庫）
渋澤龍彦の傑作。日本から天竺を目指して旅立った高丘親王がさまざまに不思議な体験をしながら西へ向かう。『アーサー・マンデヴィルの不合理な冒険』を書いた動機のひとつは、これに触発されたこともある。もちろん文学性は桁が違うけれども。

『東方見聞録』
マルコ・ポーロ（平凡社ライブラリー）
言わずと知れた古典的旅行記。チパングに関する表記は人肉を食べるなど実際の日本とは結構異なっていて、日本のことではなかったのではないかという説もある（的場節子『ジパングと日本』）。

（付録：網代幸介「『アーサー・マンデヴィルの不合理な冒険』の絵巻ひとこと解説」より）

「宮田さんの本を最初に知ったのは『おかしなジパング図版帖ーーモンタヌスが描いた驚異の王国』でした。モンタヌスは行ったことがないジパングを、それは面白く奇妙に描いていました。同じく、妄想旅をする僕にとって、この本はバイブル的な存在です。
そして、この度、幸運なことに宮田さんの小説の装画を担当する機会を頂き、大変驚きました。それはそれは面白くて、これは写本を残さねばというテンションになり（編集の瀧さん、デザインの大島さんには、いろいろとわがままをいってしまいました…）絵巻物を描いた次第です。『アーサー・マンデヴィルの不合理な冒険』の旅をさらに楽しむきっかけになってくだされば幸いです。」

◎目次
・第１章　アーサー・マンデヴィル、ローマ教皇に謁見する
・第２章　スキタイの子羊を求めて
・第３章　女軍団の島アマゾニア
・第４章　犬頭人の舟
・第５章　マンドラゴラを採る方法
・第６章　海を漂う少女
・第７章　巨大蟻と金の山
・第８章　ワークワークの美人巣
・第９章　最果ての国
・第10章　プレスター・ジョンの祈り
・参考文献

宮田珠己（著者）：1964年、兵庫県生まれ。95年、旅エッセイ『旅の理不尽 アジア悶絶篇』でデビュー、以後ユーモラスな文体で、独特な著作を次々発表。主な作品に『ときどき意味もなくずんずん歩く』『いい感じの石ころを拾いに』『四次元温泉日記』『おかしなジパング図版帖 モンタヌスが描いた驚異の王国』『無脊椎水族館』『ふしぎ盆栽ホンノンボ』『晴れた日は巨大仏を見に』『ニッポン脱力神さま図鑑』などがある。

網代幸介（画家）：1980年生まれ。30歳を機に絵を描き始める。これまで国内外で個展を開催。『サーベルふじん』(小学館)、『てがみがきたな きしししし』(ミシマ社)などの絵本を手がける。作品集に『Огонёк アガニョーク』(SUNNY BOY BOOKS)がある。

☆mediopos-2880　　2022.10.6

人生はゲームなのか

本書の結論は
「人生はゲームじゃない」
という予想通りの平凡なものなのだが

その結論に達することが本書の意図ではなく
重要なのはその「根拠」と「前提」を問い
そのプロセスをたどっていくことなのだという

本書は「最初の新書」という位置づけをもった
「ちくまプリマー新書」だが
人生とゲームを問う本書の射程は思いのほか深く
その問いのなかで「根拠」と「前提」に
光をあてていきながらさらなる問いに向かっていく

まず問われるのは
「ゲームとは何か」ということである

それを問うなかで
ゲームには「ルールやマニュアル」
そして「目的、終わり」という必須条件があること
さらには
「プレイヤーが自発的に参加すること」
という条件が見出されていく

そんな本書の内容のなかで
もっとも興味をひかれたのが
本文の流れとは少し離れた視点での「コラム」だった

「コラム1 内部と外部の反転」では
なぜ私たちはゲームをするのかということについて
「ゲームの外側」を現実の人生だとみれば
「ゲームの内部」はそれ自体が
「人生の外部」となることが示唆されている

人生には出口も逃げ道もないがゆえに
ゲームを通じて人生から逃避するために
「人生の外部」に行こうとしているのかもしれない
ということである

平尾 昌宏
『人生はゲームなのだろうか? ――〈答えのなさそうな問題〉に答える哲学』
（ちくまプリマー新書　筑摩書房　2022/2）

この逃避ということはおそらく
必ずしも否定的なことではなく
人生の内部にあらたなものを加えるための
契機ともなるのではないかと思われる
とはいえその「人生の外部」としての「ゲームの内部」が
過剰なＶＲのようになってしまう危険性について
自覚しておくことが求められるのはいうまでもない

「コラム2 ルールの意味」では
「この世の中になんでルールみたいなものがあるのか」
「我々はなぜわざわざゲームなんてものを作るのか」
という問いに対しての答えとして
ルールがまったくないとしたら
「何をしても意味がない」ことになることが示唆されている

私たちは「まったくの無意味さ」には
耐えられないがゆえにルールを作り
ゲームを作っているのかもしれないのだが
人生はゲームではないとしたら
私たちはルールがない（かもしれない）人生に
向き合っていかなければならなくなる

このことは「コラム3 唯一のゲーム?」にも
関わってくるのだが
「宗教はゲームだけど、経済は逆にゲームではな」いという

なぜ宗教がゲームなのかといえば
私たちはルールのない無意味な人生に
耐えることができないから
「ルールやマニュアル」「目的、終わり」を教義とした
宗教を求めているということである

少しばかりコワイ気持ちになったのは
「経済は逆にゲームではな」いとすれば
そこにはほんらい
「ルールやマニュアル」「目的、終わり」はないことだ

なぜ「経済における友愛」（シュタイナー）が重要なのかは
そんな自由において暴走しがちな経済のなかに
精神における自由の衝動からくるであろう「友愛」を
導入する必要があるということでもあったのだろう

「人生はゲームなのか」
その問いはそのように
（答えはあるけれど〈答えのなさそうな問題〉ではなく）
ほんとうのところ「答え」はないのだろう
あらたな問いを生み出してくれる重要な問いでもあるようだ

▪平尾 昌宏
『人生はゲームなのだろうか? ――〈答えのなさそうな問題〉に答える哲学』
（ちくまプリマー新書　筑摩書房　2022/2）

（「まえがき」より）

「テーマは、「人生はゲームだと言えるか」。だから、ポイントは「人生」と「ゲーム」と二つあるわけでｄすけど、どっちかと言えば人生に重心がある。ゲームの方は、人生について考えるときのモデルのようなもの。そして、最終的に欲しい答えは、人生をどう考えたらいいか。」

（「あとがき」より）

「結論というほどのものはないです。結論だけ取り出すとすると、「やっぱり人生はゲームじゃない」っていうことになるだろうけれど、「これが結論です！」と言ったら、みんな「うん、それは知ってた！」って言うんじゃないかと思うわけです。
　だから？　そう、だから、大事なのは、その根拠というか前提というか、それがあって、この結論がある、という流れそのもの。
　で、この本ではまず「人生はゲームか」問題を考えたわけですが、そのためには、「そもそもゲームとは何か」が問題になるっていうんで、ゲームの中身を考えた。で、大雑把に言えば「ルールやマニュアル」と「目的、終わり」っていう二つの必須条件が見つかった。これを踏まえて「人生はゲームか」に答えを出しました。
　で、その結論を辞退は平凡なものだったかもしれないけれど、こうしたプロセスを通ることで、「人生はゲームじゃない」っていうことがはっきりと分かりました。逆に言うと、「うん、そんなのはじめから知ってた」って言う人は、実は、本当の意味で「知ってた」ことにならないのがわかります。逆に、確実に分かったことがあれば。その足りないところを補ったり、場合によっては修正したりもできるのでしたね。
　そしてはっきり分かったことがあれば、それを土台にして、次には新しいことを考えることもできるのでした。」

（「コラム1 内部と外部の反転」より）

「「人生出口なし」「人生には逃げ道はない」。その通りです。正しい。だけど、それだけじゃキツいというか、息苦しい。
　こう考えると、たぶん我々がゲームをやるのは、「外」を作りたいからじゃないかっていう気がします。ゲームを作る。そうすると「ゲームの内部」と「ゲームの外部」が分けられるわけです。そして、「ゲームの外側」を現実の人生だと見て、「ゲームの内部」は人生じゃないと考えれば、「ゲームの内部」は、人生の方から見れば、実はそれ自体が「人生の外部」であることになります。
　そうこうして我々は、逃避のためにゲームをやるのではないでしょうか。よく言いませんかね、テスト前なんかにやらなくてもいいことがやりたくなるって。現実逃避というヤツです。私なんかも、あれこれ用事はあるのに、あるいは、あれこれとやらなければならない用事があるからこそ、それに飽き足りイヤになったりやりたくなかったりすると、ついついゲームをやっていることがあります。それは、一時的に、本当はあり得ない「人生の外部」に行こうとしているのかもしれません。」

（「コラム2 ルールの意味」より）

「この章（第12章）の途中で分かったことがもう一つありましたね。「この世の中になんでルールみたいなものがあるのか、あるいは、我々はなぜわざわざゲームなんてものを作るのか」の答えです。ルールっていうのは要するに制限のことで、それは我々の自由を奪うものなのだから、ない方がいいように思える。なのに我々は、わざわざそういう制限を作ったりしている。考えてみれば不思議。
　だけど、もしそういうルールがまったくないのだとすれば、人生は本当に不確定な、不定形なものになってしまいます。何をしてもよい、っていうことは、何をしても意味がないということと同じなのです。

　ｖふぁｊづじおありうじゃんｋじゃいえ

　いきなりものすごい誤植だと思った人もいるかもしれませんけど、そうじゃありません。何も考えずにまったく自由にキーボードを打った結果がこれです。意味が分かります？「わかるわけない」って？　そうですよね。私は心を込めて打ったんだけど（ふふ）、何の規則（文法）にも従わず打っただけだからね。そう、規則がないよ意味が生まれないのです。
　我々は自由を奪われて縛られるのもイヤだけど、まったくの無意味さにも耐えられない……。
　そういう困った事態から抜け出す、あるいは、そういうそら恐ろしい真実から目をそらすために、我々はルールを作り、ゲームを作っているのかもしれない。でも、人生はそれでもゲームにし切れない……。」

（「コラム3 唯一のゲーム?」より）

「宗教と経済。この二つは、もちろん全然違う種類のものでした。みなさんの予想と違ったかもしれませんが、宗教はゲームだけど、経済は逆にゲームではなかった。ただ、ちょっと共通するところがあります。そもそもお金と神様が似ているってこともあるけど、それと関連して、神様やお金が「唯一の価値」だと言いたがるところです。
　だから、宗教の場合だったら、信者たちは布教に熱心で「他の宗教は間違ってる」と言いたがるし、マネーゲーム論者も「お金が全て、お金があれば何でも、人の心も買える」とか「このゲームに参加しない者はその時点で負け組」的なことを言う。そして、自称「勝ち組」の人たちは、「できるだけルールは少ない方がいい、自由が大事だ」などと言いながら、実は、さらに自分たちが勝てるような都合のよいルールや仕組みを作り、他の人たちを従わせようとする。
　いずれにしても、一見すると純粋そうだけど、単純で、場合によっては歪んだ考え、こういうのは他の人にとって意見の押しつけになるばかりではなくて、自分自身をも圧迫することがあります。
　息苦しい、生きづらいのは、何か他のものに襲われるから、とは限りません。自分が（自分の偏った考えが）自分自身を苦しくしていることも多いのです。」

（「第14章 宗教はゲームか?」より）

「宗教は、ゲームとして不完全であった人生を、安全安心な究極のゲームにしてくれるものだったのです。」

「そもそも、身も蓋もない話をすれば、宗教というのは価値観の問題です。「我々の価値観はこうだ」っていうのが決まっているのが宗教です。だから宗教は、ルールもびしっと遠慮なく決めちゃう。」

「ゲームの場合、決められたルールに従う。そうすると、そのゲームに参加することができて、楽しい。宗教の場合は、決められたルール（戒律）に従うと、信者だと認められる。それで安心できる。」

（「第15章 マネーゲームはゲームか?」より）

「お金は結果、つまり外在的な目的なのです。マネーゲームは、本物のゲームとは違って、それをすること自体に意味があるのではなく、それをやった結果が大事になる。つまり？　そう、マネーゲームは遊びとしてのゲームではなく。仕事なのです。」

【目次】

まえがき
この本の使い方

パートI 人生はゲームか?
第1章 「人生はゲームか?」問題編
第2章 答えの出し方
第3章 ゲームとは何か
第4章 「人生はゲームか?」解決編
・練習問題1 受験・掃除・戦争はゲームか?

パートII 改めてゲームとはどんなものか?
第5章 私には夢がある! ―ゲームと目的
第6章 料理はゲームか?―目的とルールの連動
第7章 戦争はゲームか?―ゲームと楽しさ
第8章 人生は遊びではない?―遊びと仕事と
・練習問題2 「受験・掃除はゲームか?」再考

パートIII さて、人生とはどんなものか?
第9章 「やっぱり人生はゲームだ」論―人生の成分表
第10章 「人生にも死という終わりがある」論―人生の不確かさ
第11章 「人生はリセットできない」論―人生出口なし
・コラム1 内部と外部の反転
第12章 「そんなこと誰が決めた?」論―人生のお約束
・コラム2 ルールの意味
第13章 「誰が産んでくれと言った?」論―人生は開いている
・練習問題3 人生からの離脱

パートIV ゲームを作る、ゲームを超える
第14章 宗教はゲームか?
第15章 マネーゲームはゲームか?
・コラム3 唯一のゲーム?
第16章 教育はゲームか?
・コラム4「自分ゲーム」を作る
第17章 恋愛はゲームか?
・コラム5 始めに不一致ありき

あとがき
読書案内

☆mediopos-2881　　2022.10.7

動物たちのナビゲーションの話は先日
mediopos2869（2022.9.25）でとりあげたところだが
（デイビッド・バリー
『動物たちのナビゲーションの謎を解く』）

「たくさんのふしぎ2022年11月号」は
「バイオロギング」という
小型の記録計や電波発信器を
動物の体に取りつける手法を使って
動物たちの長距離移動を調査する話である

動物たちはなにを使って
進むべき方角を見定めるのか

そのさまざまな方法は
上記の本でもとりあげられているが
地磁気を利用する動物が多い
ということはよく知られている

その際にウミガメをはじめとして
ジンベエザメもオットセイも
アカボウクジラもキングペンギンも
「グルグル回る」謎のような行動をおこなうという

潜水艦を使って地磁気を測定する時も
潜りながらグルグル回るということだが
動物たちも方角を見定めるために
グルグル回って地磁気を測定していと考えられる
というのがタイトルにあるように
この絵本のメインテーマだ

動物たちのナビゲーションの謎を解明するために
現在では「バイオロギング」が
主な手法となっているようだが
ある意味でそのことよりもっと大事なのは
研究者たちの情熱だといえるかもしれない

▪佐藤 克文（文）・きのした ちひろ（絵）
『なぜ君たちはグルグル回るのか／海の動物たちの謎』
（たくさんのふしぎ2022年11月号　福音館書店 2022/11/1）

著者の佐藤克文による「作者のことば」によれば
「どんな人が研究者に向いているのでしょうか？」
という質問をしばしば受けるという

明確な答えはわからないそうだがそこには
「ある種の共通したパターンがある」ようだという
調査・研究の現場には長年にわたって
さまざまな苦労がつきまとうが
「その過程で経験する苦労を上回る
知的興奮を感じられる人、
そんな人が研究者になるみたい」だという

そうした研究者の性向は
行っていることはまるで違っているかもしれないが
ものを作る「職人」にも通じているように思える

世界の謎に立ち向かう研究者としての行動も
ものそのものに迫りながら
その謎に肉薄しながらそれを形にしていく行動も
その根底にあるのは
苦難の果てに垣間見えるだろう「秘密」への
あくなき衝動なのかもしれない

■佐藤 克文（文）・きのした ちひろ（絵）
『なぜ君たちはグルグル回るのか／海の動物たちの謎』
（たくさんのふしぎ2022年11月号　福音館書店 2022/11/1）

「広い海を移動する動物たちの動きは、小型の記録計や電波発信器を動物の体に取りつける「バイオロギング」という手法で調べることができる。自然な動きをさまたげることがないように、装置の重さは体重の3パーセント以下におさえるようにしている。私は、海上を飛ぶワタリアオウドリ、水中を泳ぐキングペンギンやミナミゾウアザラシに装置をつけまくった。

　動物たちは、おどろくことに数百かた数千キロメートルも離れたエサ場まで移動して、再び島に戻ってくることが、機器に記録されたデータからわかった。私が船上から見たとおり、海の上には何の目印もなさそうに見える。それなのに大海原にぽつんとうかぶ島に動物たちは戻ってくることができるのだ。」

「地球のまわりには磁場というものがある。地球という団子に棒磁石の串がささっているみたいに、地球を1つの磁石に例えることができる。磁石にはＳ極とＮ極があり、おたがいにくっつこうとする性質がある。だから、方位磁石を持っていれば、Ｎ極が指す方角、つまり北がどちらの方向にあるかを知ることができる。」

「教授から世界中のバイオロギング研究者へ電子メール、「モヘリ島や父島でとれたデータによると、アオウミガメがなぜだか同じ場所でグルグルと何度も回っていました。みなさん同じ装置をいろいろ動物につけていると思うけど、そんな動きは見たことがありますか？」するとぞくぞくと返事があった。

「ジンベエザメはまわっていた！」（びっくり）

「オットセイもまわっていた…。」（何だこれ…）

「イタチザメもだ！」

「アカボウクジラも！」（何のために…!?）

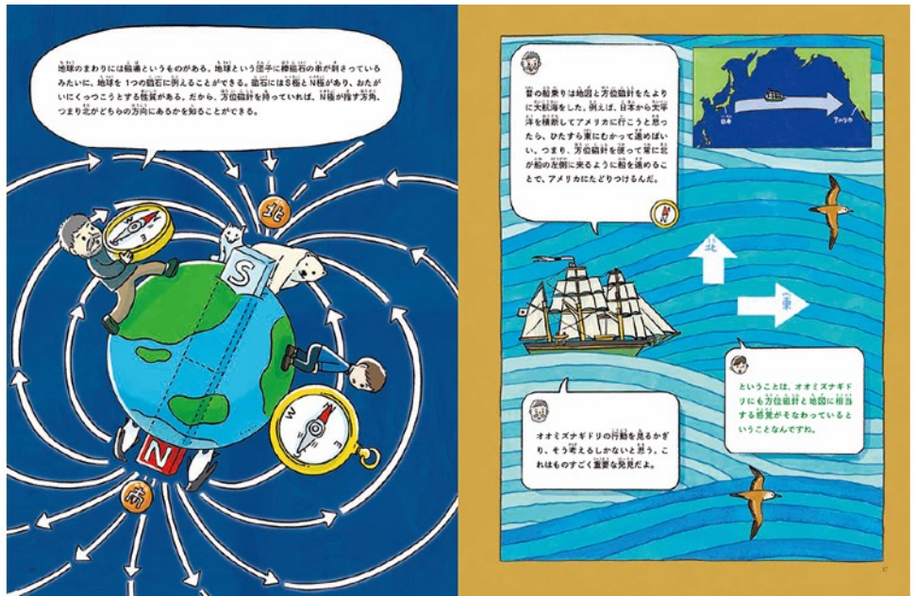
「キングペンギンもまわってた…。」」

「「私調べてみたんですけど、研究者が潜水艦を使って地磁気を測定する時も、潜りながらグルグル回るそうです。すべての方位をむいて何度も磁気の強さを測定することで、より精密に測定できるらしいです。」
「そうか、だとすると海の動物たちも、グルグル回って何度もくり返し地磁気を測定しているのかもしれないね。」

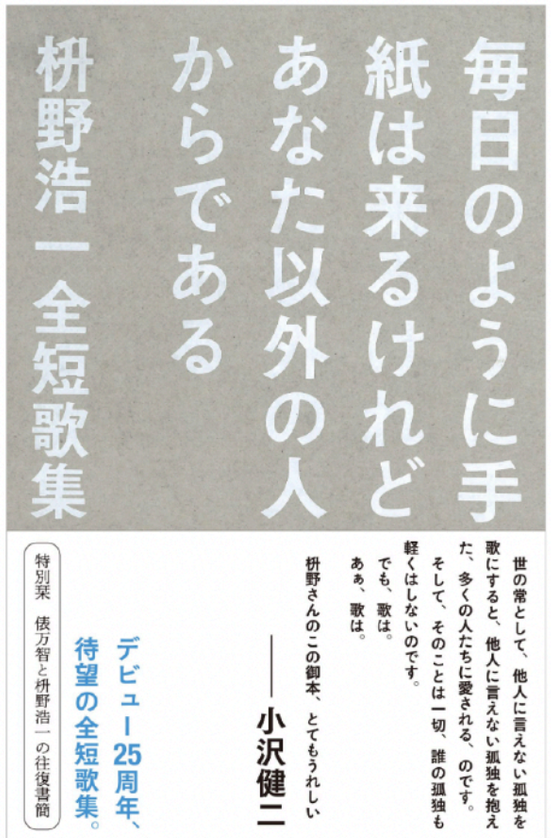
「海を長距離移動する動物がたよっているものとして一番有力なのは、地磁気だと思う。アカウミガメの子どもを使った実験結果のように、ウミガメに地磁気を感じる能力があることは証明されている。だから、きっと実際に海を移動する時も、地磁気をたよりに進むべき方角を見定めているのだろうと推測されていた。でも、具体的にどんなタイミングでどうやって地磁気を測定しているのかはわかっていなかった。今回、いくつものの動物で発見された同じ場所を何度もグルグル回る行動こそが、地磁気を精密測定して進むべき方角を正確に見定めている行動なんじゃないかと私は考えている。」

（作者のことば　佐藤克文「世界中どこへでも」より）

「野生動物の研究に必要不可欠な要素は何でしょうか。バイオロギングというハイテクを用いた研究手法が考案され、様々な動物の暮らしぶりが明らかになってきました。しかし、どんなに科学技術が進んでも、僻地に出かけ、対象とする動物と数年がかりで対峙する人がいなければ何の発見もありません。情熱を胸に野外調査に勤しむ若者こそが、全てに優る研究の必須条件です。
「どんな人が研究者に向いているのでしょうか？」というのは、私がしばしば受ける質問です。その答えは未だによくわかりません。私が今所属している東京大学には、勉強が良くできる学生が毎年たくさん進学してきます。しかし、学校の成績が良いからといって、必ずしも研究者に向いているわけではないようです。もちろん、成績優秀であることは妨げにはなりません。しかし、プラスαが必要なのです。逆に、子どもの頃から動物が好きという熱意だけで研究者になれるというわけでもなさそうです。これまで何十人もの大学院生と出会ってきました。結果的に彼らが研究者になる場合、その過程には、ある種の共通したパターンがあるように感じています。
　絵本の中では教授が新入生をいきなり外国のフィールドに送り込んだように書きましたが、実際にはそんなことはしません。私の研究室では、まず日本国内の調査地で修行を積んでもらい、数年かけてじっくりと人物を見極めます。「この人なら大丈夫」という確信が得られたら、世界中の調査地に送り込みます。過去には、南極アメリカ基地におけるエンペラーペンギン調査、亜南極フランス基地におけるワタリアオウドリ調査、アイスランドのザトウクジラ調査、西パプアのヒメウミガメ調査など、極地から熱帯に若者たちが出かけていきました。現地では何が起こるかわかりません。毎食バナナも全く想定していなかった出来事でしたが、どんな状況でもご機嫌に調和を完遂できる人が求められています。野外調査では失敗が続きます。それを「運が悪かった」で片付けることなく、「何か改良する余地はないか」とあれこれ工夫をこらして数年間努力すると、ようやくデータが取れ始めます。その後もデータを解析し、英語で書いた論文として発表するまで苦難の日々は続きます。しかし、その過程で経験する苦労を上回る知的興奮を感じられる人、そんな人が研究者になるみたいです。」



☆mediopos-2882　　2022.10.8




枡野浩一は
「簡単な現代語だけで
読者が感嘆してしまうような表現をめざす
「かんたん短歌」」を提唱して
一九九七年九月二十三日
短歌絵本の『てのりくじら』
『ドレミふぁんくしょんドロップ』の
二冊を同時発売してデビューしたそうだ

そのころは短歌に関心はなく
俵万智の『サラダ記念日』（1987年）でさえ
ほとんど読んだ記憶がない

枡野浩一のデビューもしかりで
そのことをまったく知らずにいて
知ったのは仕事柄見ておこうとおもった
コピーライティングがらみだった

本書にはデビュー二十五周年ということで
いままでの「全短歌」が収められている
しかも発行日がデビューの日と同じ九月二十三日

しかしこうして「全短歌」を読んでみると
枡野浩一の「歌」へのこだわりが見えて面白い

歌集の『ますの。』（1999）のなかに
こんな歌がある

　　でも僕は口語で行くよ　単調な語尾の砂漠に立ちすくんでも

これが「かんたん短歌」へのこだわりなのだろう
口語ゆえの「単調な語尾の砂漠」
という表現は言い得ている

短歌に興味をもちはじめ
いろいろ読むようになった今でも
口語短歌を読むことは比較的少ない

▪枡野浩一
『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである
枡野浩一全短歌集』
（左右社　2022/9）

口語は口語であるがゆえに
「歌」と歌でないことばとの境が希薄で
そこに「韻律」という
歌特有の響きが失われてしまうからだ
けれどもそのなかで
なにかをたしかに歌おうとしている

そうした枡野浩一の歩んでいる道には共感する
新たな道は
ひとり道をゆくものによってしか
つくることができないからだ

特別栞として
俵万智と枡野浩一の往復書簡もオマケでついているが
そのなかで枡野浩一がこう語っているように
「歌人と名のってはいますが、
結社や同人誌に所属したことがなく、師匠がいません。
歌会に参加したこともありません」

群れのなかで
群れの一員であろうとするところからは
おそらくなにも生まれない

『歌』（2012）にこんな歌もある

　　我々がとあなたが言ったその々に私のことは含めないでね

▪枡野浩一
『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである　枡野浩一全短歌集』
（左右社　2022/9）

（「てのりくじら　1997」より）

こんなにもふざけたきょうがある以上どんなあすでもありうるだろう

前向きになれと言われて前向きになれるのならば悩みはしない

振り上げた握りこぶしはグーのまま振り上げておけ相手はパーだ

「お召し上がりください」なんて上がったり下がったりして超いそがしい

「たとえば」とたとえたものが本筋をいっそうわかりにくくしている

（「ドレミふぁんくしょんドロップ　1997」より）

他人への怒りは全部かなしみに変えて自分で癒やしてみせる

「もう二十歳……自覚しなきゃ」と言ったのに「自殺しなきゃ」と伝わる電話

どっち道どの道どうせ結局はとどのつまりは所詮やっぱり

五年後に仕返しされて殺される覚悟があればいじめてもよい

流行が終わるころには新作の発表がある世界の病気

（「ますの。　1999」より）

「ライターになれる方法をおしえて」と訊くような子はなれないでしょう

「言葉にはできない」という言葉はジョーカーみたいにつかいまくって

こわいのは生まれてこのかた人前であがったことのない俵万智

悪口は裏返された愛だけど愛そのものはないと思った

でも僕は口語で行くよ　単調な語尾の砂漠に立ちすくんでも

人間は忘れることができるから気も狂わずに　ほら生きている

無駄だからやらないんだね　無駄のない人生なんて必要あるの

政治家は大なり小なり政治家になろうと思うような性格

（「愛について　2006」より）

被害者が四人ゐる家　加害者は一人もゐないやうな気もする

被害者であると解釈したければどんどんなってゆけさうな僕

その嘘をあなたが自分にゆるすなら続ければよい　でもそれは嘘

夭折の詩人はみんな才能がなかった　生きて行く才能が

息をする　生きていて今かなしみを味わっている　息をしていく

（「夢について　2010」より）

泣くな泣くな泣くな桝野　それなりに転がる夜もあったじゃないか

（「夢について　2010」より）

泣くな泣くな泣くな桝野　それなりに転がる夜もあったじゃないか

死にますが生まれ変わって来世ではだれかのことをまた愛したい

誕生日ありがとう　また再会のように初めて会えますように

（「歌　2012」より）

我々がとあなたが言ったその々に私のことは含めないでね

「死ぬくらいなら生まれるな」みたいです　「消すくらいなら書くな」だなんて

「がっかり」は期待しているときにだけ出てくる希望まみれの言葉

まっすぐに批判されたい　宛先も差出人もわかる言葉で

おおロミオ　憎んだことがない者は愛したこともない者だろう

「話せないことについてはおだまり」とウィトゲンシュタインさんは話した

川柳と俳句と短歌の区別などつかない人がモテる人です

嘘つきになろうと思う　嘘をつく世界のことを愛するために

（「虹　2022」より）

正義感あじわいながら気持ちよくいじめたいから起こる炎上

そうでしょう　心の持ちようなんでしょう　心を持つのお上手ですね

「待ち人は来ない」「自分で会いに行け」このおみくじは当たる気がする

（「特別栞：枡野浩一と俵万智の往復書簡」〜枡野浩一から俵万智　より）

「歌人と名のってはいますが、結社や同人誌に所属したことがなく、師匠がいません。歌会に参加したこともありません（句会経験は豊富なんですが）。穂村弘さんとは八回ほど公開の場で長くお話ししていますが、それが例外で、面識ある歌人が極端に少ない状態です。
（･･･）
　拙著は一冊あたりの短歌の数が少なく（文字数の少なさを松尾ススキさんにうらやましがられたことがあります）。今回数冊の合本であるにもかかわらず収録作は三百五十五首です。『サラが記念日』は四百三十余首ですから、それにも満たない寡作ぶりにあきれます。」

（「特別栞：枡野浩一と俵万智の往復書簡」〜俵万智から枡野浩一　より）

　群れることを嫌う短歌たちを見ていると、歌人枡野浩一の姿とも重なります。結社に所属→短歌雑誌の新人賞受賞→第一歌集出版→現代歌人協会賞･････というのが、歌壇的新人のおおむねオーソドックルというか鉄板のルート（はい、私もそうでした）。それに見切りをつけ、ずっと一匹オオカミで歌を詠みつづけ、しかも多くの読者を獲得してきたわけですから、あっぱれです。」

# ☆mediopos-2883　　2022.10.9

柏書房編集部が
「あなたが、いまこそ語りたい『絶版本』はなんですか?」
という問いかけをしたところ
本書に収められた二四名からエッセイが集まったという

長く生きていると
思い入れのある本の多くは『絶版本』になっている

じぶんだったらどれをとりあげるだろうと考えながら
どんな方がどんな思いでなにを選んでいるのか
それぞれにそれぞれの思いが詰まっているようだ

そのなかから古田徹也・稲葉振一郎・鷲田清一の
とりあげた『絶版本』について少し

本書の最初に置かれているのは
古田徹也による『吉岡実詩集』（現代詩文庫）である
なんといまはこの本は「品切重版検討中」らしい

古田徹也は吉岡実の「静物」という詩によって
「作品には必ずメッセージがある。それを見つけて書きなさい」
という小学校の先生からの「呪い」から解放される

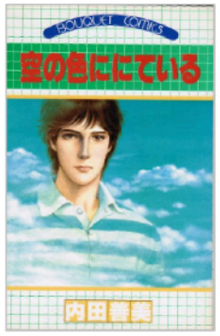
学校の国語のテストなどでは
「作品が言いたいこと」や「作品のメッセージ」が当然視されるが
たんなる説明文や論説文ならまだしも
文学的テクストにおいてそれを求めることは
基本的に言葉の働きに対する錯誤となってしまう

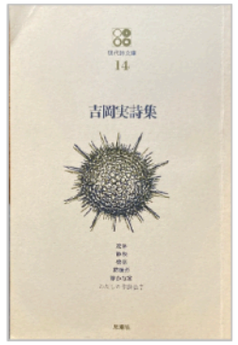
それを「呪い」だと感じとる力のないまま
言葉にかかわることを続けると
言葉はただのただの記号でしかなくなる

たしかに吉岡実の詩にふれることは
そうした「呪い」からの解放にもなり得る
というのは深く頷ける
しかし書店で吉岡実の詩集をはじめ
「良質な現代詩の多くが書店から消えてしまっている」
（つまりは読まれなくなってしまっている）
というのは言葉の劣化につながっているはずだ

二つめは稲葉振一郎による「内田善美」である

個人的にも内田善美の作品のほとんどを
いまでも大切にもっている者としては
内田善美が作品を書かなくなったこともそうだが
「読み継がれるに値すると評価した多くの読者や
出版関係者の希望を拒絶する形で、
あらゆる再版、復刊の申し出を無視し続けて
今日に至っている」ということを知ったとき
大変驚いたものだ





■『絶版本』（柏書房　2022/9）

「消えたマンガ家」をルポを行った本もあるが
（大泉実成『消えたマンガ家』（新潮ＯＨ！文庫 2000.12）にも
内田善美のことはとりあげられているが
内田善美は「拒絶」さえしないまま
「連絡」に応えないことをつづけているらしい
なんの情報もないのでなにが起こったのかさえわからない
それでもその作品はいま読んでも瑞々しい
すべては謎のままだ･･･

二つめは稲葉振一郎による「内田善美」である

個人的にも内田善美の作品のほとんどを
いまでも大切にもっている者としては
内田善美が作品を書かなくなったこともそうだが
「読み継がれるに値すると評価した多くの読者や
出版関係者の希望を拒絶する形で、
あらゆる再版、復刊の申し出を無視し続けて
今日に至っている」ということを知ったとき
大変驚いたものだ

「消えたマンガ家」三つめは鷲田清一による
『九鬼周造全集』の「月報」である

九鬼周造の全集は他で読めないでいる巻を
数巻もっているだけだが
たしかに「月報」はなかなか読み応えがある
イメージ画像に入れている「月報」は
「押韻論」も収録されている第五巻のものだが
そこには中村真一郎の
「「日本の詩の押韻」とマチネ・ポエチック」という
エッセイが寄稿されている
その月報の影響でこのmediposでも
中村真一郎のマチネ・ポエチックについてふれたことがある

『九鬼周造全集』の編纂に関しては
さまざまな問題があったようだが
たしかに「月報」という大切な資料を
まとめて読むことができないというのは勿体ないかぎりである

こうした「絶版本」についての話には得がたい話が多くあるが
じぶんがひとつだけそれをとりあげるとしたらなんにするだろう
あまりに多すぎていまのところ絞れそうにもない
そのうちこのmediposの場でそのいくつかをとりあげてみたい
ルポを行った本もあるが
（大泉実成『消えたマンガ家』（新潮ＯＨ！文庫 2000.12）にも
内田善美のことはとりあげられているが
内田善美は「拒絶」さえしないまま
「連絡」に応えないことをつづけているらしい
なんの情報もないのでなにが起こったのかさえわからない
それでもその作品はいま読んでも瑞々しい
すべては謎のままだ･･･

■『絶版本』（柏書房　2022/9）

（古田徹也「なんのメッセージもない言葉」〜『吉岡実詩集』現代詩文庫十四　思潮社　一九六八年　より）

「小学生の頃、読書感想文を書くのに難渋しているとき、ある先生からこう言われたことがある。「作品には必ずメッセージがある。それを見つけて書きなさい」。
　以来、この言葉が呪いのように自分に貼り付いていた。（･･･）
　この考え方は行儀のよい正論に思えたが、同時に違和感も拭えなかった。その感覚は、中学、高校と進むうちに、そして、課題として仕方なく感想文めいたものを書くたびに、増幅し続けていった。作家たちは、何行かで言えることを伝えるために膨大なページ数を費やして小説を書くのだろうか。（･･･）
　先生の言葉の影響はそうして次第に薄らいでいったが、呪いが完全に解けたことを実感したのは、大学に入った頃、何かのテレビ番組を観ていて、「静物」と題された吉岡実（一九一九–九〇）の詩を知った瞬間だ。心底感動して、彼の詩集を探しに本屋に行った。『吉岡実詩集』を見つけ、ページを開くと、冒頭にその一篇が掲げられていた。」

「少なくともこの詩に関して、「作品が言いたいこと」やら「作品のメッセージ」やらを云々しても全く意味がないのははっきりしている。この詩を愉しむために、何ごとかをイメージする必要すらない。ここにあるのは、言葉それ自体の姿や手触りであり、言葉のリズムやバランスの妙であり、言葉が喚起する無限の感覚である。この「静物」をはじめとする吉岡実の作品群は、装飾的な言葉の使用に頼ったり、これみよがしに技巧を駆使したりすることなく、詩に可能な表現のひとつの極限にしばしば到達している。」

「調べてみると（『吉岡実詩集』は）絶版ーーーー正確には「品切重版検討中」ーーーーになっていて、ひどく落胆した。」

「なんということだろう。今年（二〇二〇年）は吉岡の没後三〇年の節目を迎える年でもあるが、いま、巷の本屋のなかには彼の詩が存在しない。膨大な言葉の集積のなかに、現代の日本語で書かれた最高の表現のひとつが存在しないーーーーこれはもちろん私の主観に基づく嘆息に過ぎない。けれども、彼の詩をはじめとする良質な現代詩の多くが書店から消えてしまっているという事実は、もしかしたら、私たちの言葉について、言葉に対する私たちの現在のかかわり方について、何かしら重要なことがらを物語っているとすら思える。」

（稲葉振一郎「内田善美の「隠遁」」〜内田善美『空の色ににている』集英社　一九八一年　より）

「内田善美は一九七〇年代後半から一九八〇円代前半の日本の少女漫画界で短期間活躍し、大人気、とまでは言わないまでも、決して少数とは言えない熱心な読者の強い支持を集め、少女漫画、といわず日本の漫画全体の芸術的水準を一段引き上げたとまで言われながらも、早々に筆を折り、若くして引退した漫画家である。何より重要なことは、内田はただ単に筆を折り、新しい作品を送り出すことをやめただけではない。彼女の作品を愛したのみならず、それが時代を画した古典として記憶され、読み継がれるに値すると評価した多くの読者や出版関係者の希望を拒絶する形で、あらゆる再版、復刊の申し出を無視し続けて今日に至っている、ということだ。彼女の旧作は古書市場でなお入手は可能であるが、稀覯本とまではいかなくとも、かなりの値がついている。彼女が関係した書物で現在でも新刊が公式に流通しているのは、彼女が表紙イラストを手掛けたジャック・フィニィ『ゲイルズバーグの春を愛す』の文庫版（早川書房）だけだ。」

「書かなくなったーーーー書けなくなってか、書きたくなくなってか、書く必要がなくなってか、いずれの理由にせよーーーー漫画家、作家は特に珍しい存在ではない。ただし長く書き続けていた人のほうが人の記憶には残るから、そうした作家の多くは忘れ去られる。そのうちごく少数だけが、人々の記憶に、更に歴史に残る作品をものしたと評価されたがゆえに、ある種神話化される。内田善美もまたそういう漫画家である。ただ彼女の異様さは、ただ単に筆を折ったというだけでなく、すでに書いてしまって高い評価を得た作品をも、これ以上流通させまいとする拒絶の所作にある。ーーーーいや、正確に言えばそれははっきりした「拒絶」でさえない。(･･･）はっきりした再版・復刊の拒絶の意思を表明しているわけではなく、ただ単に連絡に応えないだけである。所在不明・行方不明というわけではどうやらない。複数の証言を照合する限り、連絡を取ろうとしても一切の応答がない、ということらしいのだ。」

（鷲田清一「幻の本」〜「月報」『九鬼周造全集』岩波書店　一九八〇–八二年　より）

「橋本（峰雄）は、おりにふれて岩波書店に九鬼周造全集の刊行を要請していた。それが二十年ほど経ってようやく実現した。その編集には、九鬼の親友であった天野貞祐、九鬼の許で学んだフランス哲学の澤瀉久敬、それに九鬼周造文庫を保管している甲南大学の佐藤明雄教授（当時）の三人があたった。全十一巻別巻一の構成で、その最終配本がその別巻『資料篇』であったが、それに挟まれた最後の月報に、橋本は爆弾のような文書を寄せた。この全集のつくり方への大いなる異議である。本人は「いささかの異和感」という抑えた表現をしているが、じっさいには憤りにひとしい抗議の文章である。全集の編集を主導したとおもわれる澤瀉久敬の、師への愛情の足りなさに、橋本は我慢がならなかったらしい。
　この全集の幾巻かは、九鬼の講義ノートを丹念に起こしており、その綿密な校閲にはおそらく編集協力の石垣哲二か、あるいは岩波書店編集部があたったのであろう。貴重な仕事である。一方、巻四に添えられた月報五には「個々の諸篇につきましては、編纂者の手になる各巻待つ「解題」が委曲をつくしておりますが」とあるが、その執筆がだれの手になるかはあきらかではない。しかもそれは「解題」というより、ほとんど書誌情報だけの簡便なものである。ついでにいえば、この全集の「編纂方針」が、なぜ配本の途中（第五回配本時と第七回配本時の二回）に、しかも「月報」という小さな冊子のなかに、出版編集部よりの連絡として載せられたのかも不可解である。
　橋本は、編集の中心にいた澤瀉が、学恩ある身として、「個人的経験のなかの「人間認識」として独自の九鬼像を新しく書き下ろされなかったことは遺憾でならない」と、その最終配本の月報に記している。」

「全集に付けられたこれら月群は、全集を持っていなければ図書館で巻ごとに読むほかない。合本として編まれたこともないから「絶版本」ともいえない。この幻の本がいつか陽の目を見ることを、わたしは心底願っている。できれば全集の版元から。」

《目次》

柏書房編集部 いまこそ語りたい、あの一冊
古田徹也 なんのメッセージもない言葉
伊藤亜紗 わたしの思考のエンジン
藤原辰史 ナチスの聖典は絶版にすべきか
佐藤卓己 よみがえる名著
荒井裕樹 「絶版」になれない本たちへ
小川さやか 人間性なるものへの問い
隠岐さや香 「忘却されつつある歴史」に属する本
原武史 日記だから書けること
西田亮介 知の散逸を防げるか
稲葉振一郎 内田善美の「隠遁」
荒木優太 ファンと甦り
辻田真佐憲 それでも手放さなかった一冊
畑中章宏 忘れられた思想家
工藤郁子 本をもらう、本をあげる
榎木英介 自然科学における絶版本ーー色褪せない価値を放つ一冊との出会い
山本貴光+吉川浩満 「絶版」がモンダイなのだ
読書猿 なぜ本を読む猿は「復刊」をライフワークとしたのか
岸本佐知子 隅っこ者たちへの大きな愛
森田真生 絶版本の贈り物
ドミニク・チェン 混沌を愉しむ術
赤坂憲雄 なにか、秘められた事情が
斎藤美奈子 「本がない！」からはじまる旅
鷲田清一 幻の本
柏書房編集部 編集後記
選者一覧

☆mediopos-2884　　2022.10.10

学習図鑑の「三家」といえば
小学館の「ＮＥＯ」
講談社の「ＭＯＶＥ」
学研の「ＬＩＶＥ」
だそうだが

そのなかでも
『小学館の図鑑ＮＥＯ〔新版〕昆虫』が絶対王者で
（個人的にもその図鑑を手元においている）
トンボ図鑑などの個別種の図鑑はいろいろあるものの
日本で昆虫を総合的に参照できる図鑑といえば
やはり小学館の「ＮＥＯ」であると思っていた･･･が

今回それに戦いを挑んだのが
学研の「ＬＩＶＥ」である

監修は昆虫学者の丸山宗利氏
学研の編集者は牧野嘉文氏
画像編集担当は長島聖大氏

２０２０年の秋に図鑑を作ることが決まり
２０２１年の春から本格的な作業が始まり
制作期間は２０２２年春までの１年
その間に総勢50名の研究者が集結して
図鑑制作の冒険が繰り広げられることになる

昆虫の写真はすべて生きたままの白バック撮影
撮影はプロではなく全国の昆虫愛好家
日本全国7000種の生体を撮影し
結果的に学習図鑑史上最多となる2800種が掲載される
「奇跡の図鑑」が完成することになる
（ちなみに小学館の「ＮＥＯ」は約1400種掲載）

丸山宗利氏の図鑑制作の理想像は二つあり
ひとつめは「昆虫の多様性と進化がわかる」こと
ふたつめは「すべての昆虫を生きた姿の写真で掲載する」こと
そのふたつともがほぼ１年の制作期間で実現されることになる
まさに「奇跡」である

▪丸山 宗利
『[カラー版] 昆虫学者、奇跡の図鑑を作る』
(幻冬舎新書　幻冬舎 2022/9）
▪丸山 宗利・長島 聖大・中峰 空 (監修)
『昆虫 新版 (学研の図鑑LIVE(ライブ)』
（学研プラス 2022/6

しかしこの図鑑ができあがったことも「奇跡」だが
虫好きたちが無謀にしか思えないような挑戦に
燃え続けた１年間という冒険そのものが
「奇跡」だったといえる

丸山宗利氏曰く
「まさにおじさんの青春でした」

その青春の物語が本書では綴られている
現代のような閉塞した時代でもこんな冒険がある！
虫好き・図鑑好き必読の冒険物語がここに

▪丸山 宗利
『[カラー版] 昆虫学者、奇跡の図鑑を作る』
(幻冬舎新書　幻冬舎 2022/9)
▪丸山 宗利・長島 聖大・中峰 空 (監修)
『昆虫 新版 (学研の図鑑LIVE(ライブ)』
（学研プラス 2022/6）

（丸山 宗利『昆虫学者、奇跡の図鑑を作る』～「はじめに」より」

「『学研の図鑑LIVE 昆虫 新版』として、完全に新しい図鑑を作ることになったのは、２０２０年の秋のことだった。そして、２０２１年の春から本格的な作業が始まった。制作期間は２０２２年春までの１年しかない。
　この１年は、図鑑作りのためにとにかく突っ走った。途中で息切れしかかったこともあるが、とにかく走り切った。50歳近くになり、この年齢になると、１年というのはすごく身近く感じるものであるが、私にとってこの１年は、数年分を凝縮したような、濃密で長く感じられる時間だった。」

「この本ではその図鑑制作の顛末を包み隠さずご紹介したい。多くの人が子供の時になにかしらの図鑑を見ていると思う。しかしそれらがどのようにできたのかを知る人はほとんどいないはずだ。今回の図鑑は、これまでにない種数（２８００種以上）が生きたまま掲載されるという前代未聞の内容で、しかも多くの研究社が関わり、中身も素晴らしく充実したものになっている。そして、急ごしらえで、ほとんどが撮影初心者の虫好きを集めて撮影隊を汲み、図鑑の命ともいえる写真を準備したというのも特筆すべき点である。」

（丸山 宗利『昆虫学者、奇跡の図鑑を作る』～「第１章　一切妥協なしの図鑑を作ろう」より」

「私が考えていた理想像は二つあり、いずれも実に単純なものである。
　まず、昆虫の何よりの特徴は多様性だ。世界で１００万種以上の昆虫が知られており、実際には５００万種いるとも、１０００万種いるとも言われている。日本だけでも３万数千種が知られているが、まだまだ名前のついていない種が多く、本当は６万種から10万周はいるのではないかと言われている。
　その生活様式や姿かたちも含め、昆虫はあらゆる生物のなかでも抜きん出いた多様性を持つと言える。そのような昆虫の多様性と、どのようにして多様になったのか、その進化の道筋をわかるようにしたいというのが、まず一つの理想像である。一言で言ってしまえば、「昆虫の多様性と進化がわかる」という内容である。
（･･･）
　もうひとつの理想像は、「すべての昆虫を生きた姿の写真で掲載する」ということだ。これまでの図鑑の多くは、魂チュの絵や、標本の写真を並べたものである。もちろん、それらの図鑑にも良い点はあるし、私もたくさんの刺激を受けた。しかし、図鑑を手にした人、とくに子供がつかまえた虫の名前を調べる時、わざわざ標本にしてから調べるということはめったにないはずだ。（･･･）そう考えると、生きた姿の写真に勝るものはないと考えた。何より昆虫は生きた姿がいちばん美しい。」

（丸山 宗利『昆虫学者、奇跡の図鑑を作る』～「第６章　ーもう二つの図鑑」より」

「学習図鑑には現在「御三家」と言われる大手３社の出版物がある。小学館の「ＮＥＯ」、講談社の「ＭＯＶＥ」、そして学研の「ＬＩＶＥ」という各シリーズだ。この３社で大部分のシェアを占め、そこにポプラ社の「ＷＯＮＤＡ」などが戦いを挑んでいる。」

（丸山 宗利『昆虫学者、奇跡の図鑑を作る』～コラム　長島聖大「画像編集担当の制作日誌」より」

「２０２０年９月のある日、丸山さんからメールが来ました。「学研の昆虫図鑑を作るので協力してください」。考える間もなく、「是非やらせてください。25年くらい誰にも負けない図鑑にしましょう！」とお返事しました。
　当時の昆虫図鑑では、『小学館の図鑑ＮＥＯ〔新版〕昆虫』（小学館）が絶対王者で、私は職務上も助けられているこの図鑑にあこがれていました。（･･･）新しい図鑑を作るとなると、これに勝つことは最低条件です。さらに、25年は王座に君臨する一冊を作りたい、という野心に燃えました。
　それからの日々は、まさにおじさんの青春でした。昆虫採集・画像編集・制作陣とのオンラインでのやりとり･･････無我夢中でした。特に、私が担当した「白バック写真の画像編集」については一から技術を磨き直しました。30人を超える撮影チームがそれぞれの機材で撮影した、それも生きた状態の虫のＲＡＷを現像するというのは、おそらくほかの図鑑でも前代未聞です。」

（丸山 宗利『昆虫学者、奇跡の図鑑を作る』～コラム　牧野嘉文「編集担当の制作日誌」より」

「この図鑑制作は何から何まで異例づくめ。すべての原因は「白バック撮影」にありました。
　これまで学研では、『沖縄の昆虫』という。生体厄００種を槐真史さんお一人の手で白バック撮影したポケット図鑑を刊行していました。槐さんによると、断続的に沖縄を訪れて撮影に約８年かかったといいます。ならば、ＬＩＶＥ旧版の掲載種数と同じ２１００種を約１年で撮影するには、単純計算で24人いれば可能なはず･･････。２０２０年8月、丸山先生の「全種を生体白バック撮影で」とのご提案を、昆虫素人の私は都合よい計算とともに了解したのでした。
　また、どんな障壁があるといぇも「前代未聞の図鑑」を制作することは、編集者冥利につきるものです。かつて業界で初めて『危険生物』を制作した身としても、他社にない魅力をもったこの規格に迷うことなく飛びついてしまいました。
　デジタルが主流となった昨今、図鑑の未来はどうなるのか、という質問をとく受けます。
（･･･）
　『学研の図鑑』が目指す本作りの肝は常に、伝統と革新にあり、紙としての図鑑の最高傑作を目指さなければなりません･･････。」

「私たちが身の回りの環境の変化や季節の移り変わりを知るうえで、「昆虫」の図鑑は最も役に立つ教科書です。ですから、図鑑の掲載数は多いほどよいはず。その点、２８００種以上という数は、全ジャンルの学習図鑑誌上で最大です。すごい図鑑ができました。
　昆虫を採集したら。図鑑の誌面の上に置いて、生きた虫を撮った写真と比べてみてください。昆虫の名前を知ることで、あなたの世界観は一変することでしょう。」

☆mediopos-2885　　2022.10.11

漫画『言葉の獣』は
言葉が獣の姿として見える「東雲」と
言葉とくに詩に強い関心を持つ「薬研」が
「いちばん美しい言葉の獣」を見つけるため
協力しあって言葉と向き合う物語である

東雲が「生息地」と呼ぶ場所に
獣たちは棲んでいる
その場所は
言葉がどう扱われるかによって
さまざまに変化する

興味深いテーマの漫画だと思っていたら
『群像11月号』に作者・鯨庭の
『言葉の獣』についての
「石膏のヒポグリフ」という随筆が掲載されている

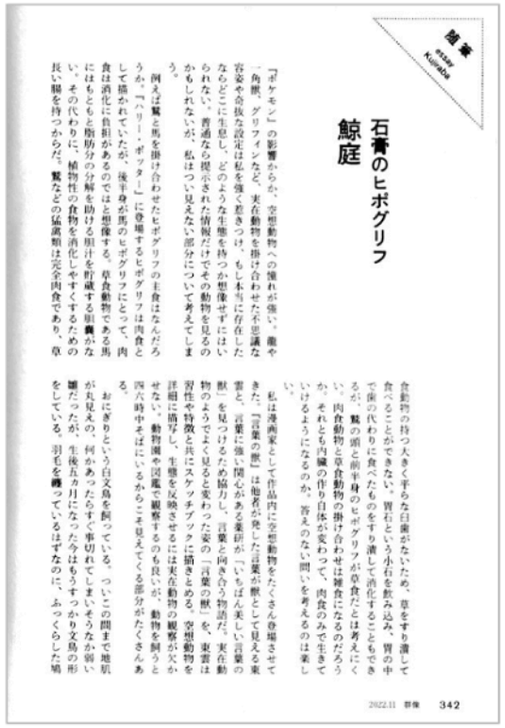
「言葉について考えて視野を広げる行為と、
空想動物の隙間を描くことは似ている」のだという

「どちらも深く考えるには面倒な部分で立ち止まり、
粘り強く観察し疑問を抉り出して、
自分なりの答えを突き詰めようと」しなければならない

この観点はじぶんが投影する心的現象が
向こうからこちらに向かっているように見えるような
アストラル界での現象にも似ている

『言葉の獣』における「言葉」は
アストル界で生きている生物のような「言葉」が
その発する考えの質に応じて
その「獣」としての姿を変化させてゆくのだ

実際「言葉」というのは
辞書などで定義された概念として
静的に固定化されたものではない
それはつねにそれを使う者の心的な場のなかで
さまざまな姿をとって現れている
まさに変化する「獣」だ



▪鯨庭『言葉の獣 1』
（torch comics　リイド社 2022/5）
▪鯨庭「石膏のヒポグリフ」
（『群像 2022年 11 月号』講談社　2022/10　所収）

そしてその「獣」は
それを投げかける者に働きかけ
見えないところで影響を与えるが
それはまたその言葉を発した者へと
フィードバックされることになる

その意味でも
自分が発する言葉が
目に見える形になっているとしたら
どんな姿をしているか
意識しておく必要がある

その言葉はたしかに
獣として生きて人の前に現れ
なにかを批判するときには
鏡に映るように
じぶんを襲う獣にもなるのだから

▪鯨庭『言葉の獣 1』
（torch comics　リイド社 2022/5）
▪鯨庭「石膏のヒポグリフ」
（『群像 2022年 11 月号』講談社　2022/10　所収）

（鯨庭『言葉の獣 1』より）

「ほら
君の「綺麗」だよ
（･･･）
君が今言った綺麗って言葉
こんな形の獣だったよ！
（･･･）
私はね、
獣の形を見ると
他者が言った
言葉の真意がわかるんだよ」

「この世で
いちばん美しい
言葉の獣を見つけたい
（･･･）
最初、獣が襲ってきたと
思ったでしょ？
実はああやって
言葉の獣に
襲われること
たまにあるんだ」

「何気なく
呟いた言葉が
偶然一篇の詩になることは
美しいけど

美しいものの
輪郭を見たくて
詩を書くことだって
慈しむべきなんだ

それなのに
詩を書くことを
馬鹿にする風潮は
どこまでも消えない

でも何かを
言葉で掬いたいなら
臆せず書かなければならない」

（鯨庭「石膏のヒポグリフ」より）

「私は漫画家として作品内に空想動物をたくさん登場させてきた。『言葉の獣』は他者が発した言葉が獣として見える東雲と、言葉に強い関心がある薬研が「いちばん美しい言葉の獣」を見つけるため協力し、言葉と向き合う物語だ。実在動物のようでよく見ると変わった姿の「言葉の獣」を、東雲は習性や特徴と共にスケッチブックに描きとめる。空想動物を詳細に描写し、生態を反映させるには実在動物の観察が欠かせない。動物園や図鑑で観察するのも良いが、動物を飼うと四六時中そばにいるからこそ見えてくる部分がたくさんある。」

「奇妙な姿の「言葉の獣」たちは東雲の空想なのか。それとも実在するのか。その正体を追って、ふたりは獣たちが棲む「生息地」に足を踏み入れる。さまざまな獣を通して言葉と遭遇し、その獣をよく観察し言葉を深く突き詰めていく。言葉について考えて視野を広げる行為と、空想動物の隙間を描くことは似ている。どちらも深く考えるには面倒な部分で立ち止まり、粘り強く観察し疑問を抉り出して、自分なりの答えを突き詰めようとする執着だからだ。それを漫画に落とし込むのはなかなか骨が折れるが、こんなに面白い仕事は他にないと思う。考えて考えて、考えた先に現れる空想動物は、こうべを垂れて私が頭を撫でるのを許してくれるのだ。」

☆mediopos-2886　　2022.10.12

ほんとうに久しぶりに
ショーペンハウアーの名を目にした
「自殺してはいけない」という記事である

ちょうど同著者（梅田孝太）の
『ショーペンハウアー』という新書も
同じ講談社からでたところなので
その記事はその紹介という意味もあったようだ

ショーペンハウアーといえば
『意志と表象としての世界』であり
「意志の否定」である
欲望を否定し求道する仏教者のような哲学

そのイメージが強くあったのだが
梅田孝太の解説によれば
ショーペンハウアーは晩年になり
〈処世の哲学〉を説いたという
それは「この世を堂々と生き抜く」ということ

「人生は苦しみ」であるとしても
それを生き抜いていかねばならない
そうした苦悩や葛藤から自由になるためには
「内面の富」に目を向ける必要がある

「より多くの欲望を持たすことではなく、
むしろなるべく欲望を鎮め、心の平穏を得」る
ということである

そのための哲学が
ショーペンハウアーの哲学だというのだが
「処世」といいつつも
ほとんど仏教者的なスタンスであることに
変わりはなさそうだ

問題は果たして
その〈求道の哲学〉と〈処世の哲学〉で
この日本の「生きづらさ」からくるだろう
「自殺（願望）」や「反出生主義」などから
救済され得るのかどうかだ

▪梅田孝太「現代新書のタネ❻自殺してはいけない
――――ショーペンハウアーとともに考える」
（『群像 2022年 11 月号』講談社　2022/10　所収）
▪梅田孝太『今を生きる思想　ショーペンハウアー／
欲望にまみれた世界を生き抜く』
（講談社現代新書　講談社 2022/9）
▪渋井哲也『ルポ自殺／生きづらさの先にあるのか』
（河出新書　河出書房新社 2022/8）

個人的にいうならば
逆説的にいって「なぜ自殺しないのか」といえば
「きわめて面倒だからだ」というのが大きな理由である

生まれてきたのも生きているのも面倒ではあるのだが
あえて自殺するほうがもっと面倒だという感覚がある

生きていて面倒なことがいろいろあると
死にたいというよりは「消えたい」と思ったりもするが
長年いろいろ霊学的なことを学んでいき
それが実感となってくると
自殺がいかに霊的に面倒なことになるのかがよくわかるし
「消える」ことなどできはしないのも言うまでもない

決して「生き抜こう」というような
積極的な姿勢で生きていることがなくても
そしてたとえどんなに「生きづらく」ても
そのほうがまだ面倒さが少なくて済むということだ

しかしこうした面倒回避による自殺防止というのは
そこそこ長くのらりくらりと生きている結果
身についてきたいわば「処世」であって
昨今の若年層の自殺には
そんな生き方は役に立ちそうもない
ましてやショーペンハウアーのような
仏教的なスタンスはあまり役に立ちそうもない

「自殺してはいけない」というのは
戦争の最中に「殺してはいけない」と
戦場で叫んでいるようなものだからだ

しかしどうもショーペンハウアーというと
こうしたかなりネガティブスタンスが戻ってくるが
「～してはいけない」というのは
それを「外」から強く働きかけることでは
むしろそれを助長してしまうところがある

必要なのは身心ともに
「外」と「内」のバランスをいかに保つか
そのためにはなにが必要なのかを模索することなのだろう
それを「中」ということもできるが
それもまた仏教的な観点だったりするのだが
仏教的になるとポジティブさへと
向かいにくいのはどうしてなのだろう
やはり「解脱」指向になってしまうからかもしれない

▪梅田孝太「現代新書のタネ❻自殺してはいけない
ーーーーショーペンハウアーとともに考える」
（『群像 2022年 11 月号』講談社　2022/10　所収）
▪梅田孝太『今を生きる思想　ショーペンハウアー／
欲望にまみれた世界を生き抜く』
（講談社現代新書　講談社 2022/9）
▪渋井哲也『ルポ自殺／生きづらさの先にあるのか』
（河出新書　河出書房新社 2022/8）

（梅田孝太「現代新書のタネ❻自殺してはいけない」より）

「若者の自殺という社会問題に、多くの人が関心を寄せている。大学で学生に興味のある社会問題を尋ねてみると、一定数の学生がやはりこの問題を身近に感じているという。一五歳から三九歳の死亡原因の一位は自殺である（厚生労働省「令和３年版自殺対策の白書」）。なぜ将来のある若者たちが、自ら命を絶つのか。」

「この問題には、現代社会の生きづらさが顕著に表れているように思う。わたしたちは社会生活を送っていく間に、解決の糸口が見えず、希望さえ見出せないいくつもの難問に直面させられる。未解決の諸問題が心にひっかかり続ける居心地の悪さは、いつしか漠然とした負の感情に変わり、自分や他人を傷つけてしまいかねないほどに鬱積していく。」

「こうした状況にあるとき、大抵の人はメンタルヘルスの問題としてとらえ、カウンセラーやセラピストに頼るべきだと考えるだろう。もちろんこれは病的状態に陥っているときには非常に有効な手立ての一つである。最近ではずいぶん気軽に利用できるようになってきていて、その傾向は歓迎すべきことだと思う。
　だが、いかに優秀なカウンセラーといえども、人生問題や社会問題をはじめとするいわゆる「答えのない問い」を一緒に考えてくれるわけではない。病的状態にあるわけではないが、心の中を整理したい、自分で考えるための手がかりがほしい、そういう方々のためにもう一つの選択肢を提示しておきたい。それが哲学である。
　哲学とは、漠然とした不安やモヤモヤを腑分けして、一つ一つ問いの形に落とし込み、悩みの種を学びの種に変換する知的な営みである。」

「生きづらさに満ちた時代を生きる現代人に、ショーペンハウアーの哲学はうってつけのものだと言える。」

「私の理解では、ショーペンハウアー哲学には二つの側面がある。
　一つは、主著『意志と表象としての世界』で開示された、ショーペンハウアーの中心思想だ。欲望にまみれた世界を超え出ていくような、〈求道の哲学〉の側面である。
　これに対して、晩年の『余録と補遺（パレルガ・ウント・パラリポメナ）』で開示されたのが、この世を堂々と生き抜く〈処世の哲学〉の側面である。
（･･･）
　九月の講談社現代新書から刊行された拙著『ショーペンハウアー　欲望にまみれた世界を生き抜く』で伝えたかったのは、ショーペンハウアー哲学の二つの側面をあわせて理解することで、その魅力が何倍にもなるということである。「人生は苦しみだ」としながらも、強く「生き抜く」思想になっている。この点を強調するのが、他に類を見ない拙著のショーペンハウアー理解の特徴である。
　第一章では、ショーペンハウアーがまぜ「生きることは苦しみである」と考えるようになったのかが、その哲学者としての出発とその後の生涯を追う。第二章では、主著『意志と表象としての世界』の内容をなるべくわかりやすく提示したつもりだ。上で述べた「本当の救済」が気になった方には、ぜひこの部分を読んでもらいたい。第三章では『余録と補遺』の全体像を示し、とりわけショーペンハウアーの幸福論を抽出した。そして、第四章では、明治期のショーペンハウアー受容や反出生主義の問題について取り上げ、ショーペンハウアー哲学のアクチュアリティを論じている。
　私の考えでは、〈求道の哲学〉と〈処世の哲学〉の二側面が両立するからこそ、ショーペンハウアー哲学は面白い。」

（梅田孝太 『今を生きる思想　ショーペンハウアー』～「第二章　悲惨な生と「意志の否定」より）

「「意志の否定」とは、ショーペンハウアー哲学がたどり着いた究極的な「認識」である。その「認識」は、自分の他人も生きることに同じように苦しんでいるという直観にもとづくものである。これは、自他の区別という認識主観の枠組みを取り除いた、純粋な「意志」の現象についての直観である。すなわち、「意志」が自らを「客観化」することで生じていた「マーヤーのヴェール」が取り払われ、個体を生かそうとする動機であることをやめて、「意志」が「意志」そのものを純粋に自己認識するに至るのである。そうして、他なるものもまた、実は自らと同じく苦しんでいる「意志」なのであるということ、まさに「汝がそれである」という真なる認識が成立する。またその認識が、何かをしたいと欲するいっさいの意欲を否定し、「生きようとする意志」を根本的に鎮静化するものとなったときに、はじめて完成に至る。それが完全なる「意志の否定」の境地である。」

「無尽蔵に湧き続ける欲望を肯定し、より多くの満足感を手に入れようと努力し続けること－－－－わたしたちの日常は、こうした「意志の肯定」という生き方一色である。だが、出口がないもののように思える日常を、すなわち「マーヤーのヴェール」を超出したところにショーペンハウアーは真理を求め、意志からの自由という希望を見出したのだ。」

（梅田孝太 『今を生きる思想　ショーペンハウアー』～「第三章　人生いかに生きるべきか」より）

「あるひとがいかなる内面的性質をもっているのかが、幸・不幸を隔てる最も重要な要素となる。これをショーペンハウアーは「内面の富」と呼んでいる。」

「ショーペンハウアーにとって幸福とは、より多くの欲望を持たすことではなく、むしろなるべく欲望を鎮め、心の平穏を得ることだった。そのために、次から次へと欲望を掻き立てる「外面の富」よりも、もともと備わっている「内面の富」に目を向けるべきなのである。」

「『幸福について』に最もよく表現されている晩年のショーペンハウアーの思想は、〈処世の哲学〉として特徴づけることができるだろう。若き日の〈求道の哲学〉は、俗世を逃れて「意志の否定」という無の境地を彼方に元値、身を賭して完全なる自己放棄を目指す、求道の哲学だった。これに対して晩年の〈処世の哲学〉は、「意志の否定」という真なる認識をあらゆる物事に応用し、もはや欲望に惑わされることなく堂々と俗世を闊歩する、老練なる処世術なのである。」

（渋井哲也『ルポ自殺／生きづらさの先にあるのか』～「はじめに」より）

「日本の自殺者数のピークはいくつかある。戦後の混乱期と、１９８０年代後半の低成長期。そしてバブル崩壊後だ。私が新聞社を辞めた１９８８年、警察庁での統計で年間自殺者がはじめて３万人代を突破した。前年比で、８５００人近く増加した。女性は約１９００人増加したが、男性は６６００人増えた。
（･･･）
　私はこの頃、取材を通じて、「生きづらさ」という言葉を知った。摂食障害を煩っている女性を取材した。その女性は「私って、生きづらさ系だよね」と言っていた。
（･･･）
　１９９０年の年末、初めて「生きづらさ系」をテーマにしたオフ会を開き、以降、何度も開いた。最大で50人ほどが集まった。〝オフラインとオンラインの交流がうまくいけば、生きやすくなる。言語化することで、悩みを整理できる〟と思っていた。そして取材を繰り返すうち、「自殺未遂」は、次のようなメッセージであると思うようになった。

　１、「本当に死にたい」が、なかなか死ねない（慢性的な自殺願望）
　２、自己確認としての自殺願望・自殺未遂（自分が生きていることを確認する行為）
　３、「死にたい」というよりは「消えたい」（もともと生きていなかったことにしたい、周囲の人の記憶かた消え去りたいという意味が込められている）
　４、「死にたい」というよりは「眠り続けたい」（目を覚ましたくないというもの）
　５、「死にたい」というよりは、リセット願望（別の人間になりたいというもの）
　６、精神疾患などの病気による自殺衝動（病気の症状としての自殺企図）
　７、生きるとは何かを問い続けた結果としての哲学的な意味の表現

　これは大筋では今でも同じ考えだ。しかし、自殺の背景要因はいくつもの要素が絡む。

（･･･）

　先ほどの７項目に、

　８、自尊感情や居場所を奪われた結果の自殺企図
　９、急なプレッシャーに襲われたときの回避行動
　10、政治的なメッセージとしての自殺行動

　の３項目を付け加えることができる。」

（渋井哲也『ルポ自殺／生きづらさの先にあるのか』〜「おわりに」より）

「１９９８年から年間自殺者が３万人を越えたと同時に、私は「自殺」をテーマにした取材を始めた。この頃はバブル経済崩壊による不景気が失業率を高めただけであり、経済が回復さえすれば、特に増えすぎた中高年男性の自殺者数が減ると思っていた。

　しかし、経済が回復することなく、当初は「失われた10年」と呼ばれ、ついには回復しないまま、「失われた30年」を迎えた。ただ、２０１１年の東日本大震災以降、年間自殺者数は減少傾向をたどり、年間の自殺者は２万人台になった。経済成長はしない中ではあるが、自殺者数が減り続けた。なぜこの時期に自殺率が減ったかは十分に検証されていない。

　ただ、小中学生の自殺者は増加傾向だ。ツイッターなどでのＳＮＳでは、毎日のように「死にたい」などの言葉が溢れかえり、動画配信しながらの自殺も、珍しくない。

　いずれにせよ、今後も「死にたい」人や、また、自死遺族の取材も続けるだろう。亡くなった人が存在したこと、その死から何かを教訓を得てほしいという遺族や周辺の人の思いはある。そして何よりも、亡くなった人の存在を記録し続けたいというのが私の思いでもある。」

☆mediopos-2887　　2022.10.13

子供はことさらに文法を学んで
言語を習得するのではなく
使いながら言語を学んでいく

そのように高野秀行は
多くの言語を現地で学んできた

『語学の天才まで1億光年』は
その体当たり的な言語習得の冒険譚であり
ユニークかつある意味で普遍的な言語論でもある

その高野秀行と
広瀬友紀（心理言語学）の対談が
週刊読書人に掲載されている

そのなかから興味深い部分を引用してあるが

高野が「子どもは言語を身につける前に、
既に何らかのネイティヴであると感じ」ているといい
「生まれたときから何らかの言語感覚をもっている」とし

『ちいさい言語学者の冒険』の著者である広瀬は
「そう考えなければ、外界から得られるインプットだけでは
カバーできないほど豊かで高度な知識に
子どもたちがもれなく到達することを説明するのは難しい」という

シュタイナーは十二感覚に関する示唆のなかで
五感以外に言語感覚や思考感覚を挙げているが
わたしたち人間には動物が持っている
たとえばナビゲーション能力のような生得の感覚のように
言語を学び思考するための生得の感覚があり
その感覚を外界からの影響を受けながら
育てていき言語習得をすることになると考えるとわかりやすい

▪対談＝高野秀行×広瀬友紀「言語の／で未知を切り拓く」
（『週刊読書人　2022年9月30日』所収）
▪高野 秀行『語学の天才まで1億光年』
（集英社インターナショナル　2022/9）
▪広瀬 友紀『ちいさい言語学者の冒険――子どもに学ぶことばの秘密』
（岩波科学ライブラリー　岩波書店　2017/3）

高野は子供のようにさまざまな言語を学び
さらにその体験を深めるなかで

「およそ、どの言語でも、言い表せないことはない」
といい
「もしできない話があるとすれば、
概念自体がないときである」といい
言い表すためには概念を言葉化すると
それについて話ができるようになるといっているが

おそらくそこには生来の言語感覚に加え
概念化能力を育てる思考感覚が
創造的に加わることで表現が可能になるということな
のだろう

語り得ぬものについては沈黙しなければならないとも
いい
それはそれで言語化不可能なものもあるが
思考感覚により概念化することで
間接的にであっても言葉化できることもある

おそらくそのはざまにポエジーがあり
語り得ぬものを詠おうとしているともいえる

▪対談＝高野秀行×広瀬友紀「言語の／で未知を切り拓く」
（『週刊読書人　2022年9月30日』所収）
▪高野 秀行『語学の天才まで1億光年』
（集英社インターナショナル　2022/9）
▪広瀬 友紀『ちいさい言語学者の冒険――子どもに学ぶことばの秘密』
（岩波科学ライブラリー　岩波書店　2017/3）

（対談＝高野秀行×広瀬友紀「言語の／で未知を切り拓く」より）

「広瀬／『語学の天才まで1億光年』には、言語学者の営みの全てが詰まっています。これを読むと、「言語学者です」と名乗るのが、烏滸がましく感じられてしまう。
高野／いえいえ（笑）。広瀬さんの『ちいさい言語学者の冒険』（岩波書店）を拝読して、子どもの言語の習得の仕方は、ぼくが外国の言語を学ぶ方法とそっくりだと驚きました。子どもに同志意識が湧いています。
広瀬／大人は自分がどう言語を学んできたのか忘れているし、子どもは自分が何をしているのか普通は表明できない。しかしその両方をやってみせてくれたのが高野さんです。様々な言語の習得法を、一からご自身で類推して見つけ出し、その経験を客観的に分析・記述しているのはまさに「大きい言語学者」です。
高野／客観的な分析は、当時を振り返ることで、今だからできているのだと思いますが。
　一般的に言語を学ぶときには、テキストがあって先生がいますよね。ところがぼくの場合は、探検やノンフィクションの取材が目的で、行くのは辺境の地ばかりです。人が行かない奥地の少数民族の言語を学ぶことも多いので、テキストはないし専門の先生もいない。それでどうしても手探りになるんです。幻獣ムベンベ探査のために学んだリンガラ語は文字がなかったり、多くは文法なんてわからない状態から学びはじめます。とにかくその言語を現地で使うためにm入ってくる情報を類推して自分なりの法則を見つけ出し、法則が違っているようなら修正を加えながら、試行錯誤することになるんです。」

「高野／『ちいさい言語学者の冒険』を読むと、子どもは言語を身につける前に、既に何らかのネイティヴであると感じます。ぼくは日本語ネイティヴとして新しい言語を学ぶわけですが、子どもたちの習得の仕方がそれと同じだとしたら、生まれたときから何らかの言語感覚をもっていることになりますよね。
広瀬／はい、そう考えなければ、外界から得られるインプットだけではカバーできないほど豊かで高度な知識に子どもたちがもれなく到達することを説明するのは難しいでしょう。何語に特化していくのかは、もちろん外界からの情報に依存しますが。」

（高野 秀行『語学の天才まで1億光年』〜「はじめに」より）

「学生時代から現在に至るまで二十五を超える言語（外国語）を習い、実際に現地で使ってきた。そう言うと、「語学の天才なんですね！」などと感嘆されてしまうのだが、残念ながら現実はまるでちがう。」

「そもそも私の語学は普通の人が思っているものとはかけ離れている（念のために断っておくと、「語学」とは「言語（外国語）の学習」を指す。学問ではなくて技術の習得である）。
（…）
　ようするに、私にとって言語の学習と使用はあくまで探検的活動の道具なのである。しかし、言語（語学）はひじょうに強力な道具なので、ときには「魔法の剣」のように思える。できとうに振り回しているだけで自然に「開かずの扉（に見えるもの）」が開いてしまったりするからだ。こうなると、俄然、道具である言語自体にも興味が湧いてくる。
　いくつも魔法の剣を使っているうちにそれを比較したり、中身を自己流で分析したりしてしまうのは人の性（さが）である。すると、それは魔法でもなんでもなく、極めて論理的な構造をもっていることがわかってくる。ただ、その論理とは日本語ともちがうし、各言語同士でも似ているところもあれば、まるっきり別の組み立てであることもある。すごく不思議な構成だったりもする。でも必ずそれぞれが一つの独立した小宇宙となっている。アフリカのジャングルで話されているマイナーな言語でも、世界中で話されている英語のようなメジャー言語でもそれは変わらない。しかも言語を学ぶと、それを話している人たちの世界観もこちらの体に染み込んでくる。それが面白くてしかたがない。
　いつの間にか、私にとって語学（言語）は「探検の道具」であると同時に「探検の対象」にもなっていた。」

（高野 秀行『語学の天才まで1億光年』〜「エピローグ」より）

「三十数年にわたり、世界各地で二十五以上の言語を学んで実際に使ってきた感動を一言述べたい。よく質問されることでありながら、これまできちんと答えてこなかったからだ。
　面白いことに、初期の段階では「言語とはどうしてこんなにちがうんだろう」と思った。
　（ところが、習った言語の数が増えていくと印象が変わってきた。むしろ、「人間の言語はどれもなんて似ているんだろう」と思うようになった。多くの言語に共通する例をパッと思いつく順に挙げると、
　・「〜してください」という言い方より「〜してくれますか」という言い方の方が丁寧。
　・「あなた」という二人称を直接用いるのは失礼に感じるので、名前で呼んだり、「おにいさん」「おねえさん」みたいな呼び方をしたり、いろいろ婉曲な方法を編み出している。
　・名詞を分類する傾向がある。中国語や日本語、タイ語のように「〜本」「〜枚」「〜個」と助数詞（類別詞）を使ったり、フランス語やスペイン語のように男性・女性に分けたり、バントゥ諸語のように十いくつかの種類（クラス）に分けたりする。
　・音の似た単語があると、アクセントや音の高低で区別する。
　・「行く」とか「する」といった使用頻度の高い動詞は不規則変化しやすい……ｅｔｃ。

　逆に言えば、他の言語と極端に異なった言語もない。発音で言えば、音楽の和音みたいに二つの音を同時に発する単語をもつ言語とか、イルカのように超音波を発してコミュニケーションをとる言語など聞いたことがない。人間の身体構造を超えた発音はできないのだろう。
　異常に風変わりな文法の言語も見当たらない。例えば、目的語の中に動詞が突っ込み、「ごはん（を）食べる」が「ごは・食べる・ん」みたいになる言語はお目にかかったことがない。こちらは人間の脳が処理できないのだろう。コンピューターを使っても処理できないかもしれない。あるいは、処理できても合理的でないのだろう。
　各言語で発達したシステムの完成度にも感心する。
　前にも言ったように、一つ一つの言語は一見、驚くほど異なる。タイ語やワ語には動詞に時制がない。過去形も未来形もない。でも、過去や未来を言い表せないかというとそんなことはなく、英語のようにひじょうに多くの時制を駆使する言語と同じことが言えてしまう。
　英語の名詞には定冠詞ｔｈｅ、不定冠詞ａ／ａｎが付き、さらに単数・複数がある。日本語の名詞には何もない。では日本語の方が不自由かというとそんなことはなく、他の文法機能や文脈でちゃんと表現することができる。例えば「このへんに店とかないかな」と言えば、不特定の店のことだし、「ちょっと店に来て」と言えば、億体の店だろう。
　およそ、どの言語でも、言い表せないことはないのだ。ボミタバ語でもワ語でも、どんなテーマについても話すことができる。ボミタバ語で相対性理論について議論することも原理上可能だ。もしできない話があるとすれば、概念自体がないときである。概念がなければ、単語や表現もない。例えば、明治初期、日本には西洋文明とそれが生み出すモノの概念がなく、従って言葉もなかった。だから「会社」とか「権利」とかいった用語を作ったり、ビールとかシャツという外来語を導入したりした。すると普通に話ができるようになった。
　美しい言語や美しくない言語もない。フランス語が世界でいちばんうつくしいとか、中国語は音が汚いとか言う人がいるが、偏見にすぎない。
　どの言語もみんな美しい。」

「だから私は、つくづく思うのである。「人間はみな同じなんだな」と。
　人間は平等であるべきだとか、人権の観点から言うのではない。語学を通してみると、そういう結論しか得られないのである。」

（高野 秀行『語学の天才まで1億光年』〜「第五章　世界で最も不思議な「国」の言語（中国・ワ州篇）」より）

「村のワ語には、他の言語に当然存在するような言葉がいくつも欠けていた。例えば、「こんにちは」も「ありがとう」も「ごめんなさい」もなかった。
　私がチェンマイで習った標準ワ語にはちゃんと「こんにちは」や「ありがとう」があったが、気づくと、使っているのは私だけであった。少なくともムイレ村では使われないようだし、ワ州に住む多くの純粋ワ人はそれらの挨拶語をもっていなかったのではないかと思う。
　なにしろ、ワ人は狭い村の中に住んでいる。外から来る人もめったにいないし、こちらからよその村へ行くこともない。結婚もほぼ村内で行われるから、親戚も村の外にいない。毎日同じ場所で同じような人と会うのである。
　標準ワ語の「こんにちは」（モーム・マイ）は直訳すれば「あなたは良い」であり、これは中国の「你好」をそのままワ語に置き換えただけだろう。」

「外界から孤立した前近代社会の村には、他にもいろいろ「村言葉には存在しない語彙や表現」があった。「友だち」という単語がないことにも最初驚いた（標準ワ語にはあるのかもしれない）。
　でも、よく考えれば無理もない。物心ついたときからみんなが顔見知りの状態で、「友だち」なんて言葉を使うだろうか。友だちという言葉を使う必要があるのは、例えば、私のようなよそ者に対してだけだ。親戚でもなく、同じ村の人間でもないが、「おまえはいいやつだ。俺の友だちだ」とか「おまえ、友だちだろう。酒おごってくれ」などと言いたいときは彼らにもあり、そういうときは「朋友」と中国語を借りてくるのだった。」

☆mediopos-2888　　2022.10.14

間違うということはいいことだ
そのことでなにが間違いなのかを
意識化することができるからだ

さらにいえば
「間違い」とされていることの背景に
なにがあるのかを問うこともできる

本書『ことばと算数』では
間違いとされる事例を通じて
算数とことばとの関係や
ことばという謎への問いが示唆されている

なぜ算数で間違うのか
その多くの原因は
数の世界で働いているルール（規則）が
理解できていないことからくるわけだが
理解できていないままに
「ことば」の世界で理解していることを
適用してしまっていることも多々あるようだ

しかし数や算数を教えるとき
「数の世界」にしか通用しない規則のように
いきなり抽象度の高いことを
そのまま教えるわけにはいかないので

まずはリンゴを３個買いました
もう５個買うと全部で何個になりますかといったように
買い物などで使う実用的な数として教えるのだろうが
そうした具体物を数えるということと
抽象度の高い「数」を扱うということとのあいだには
おそらく深くて暗い河が流れている

そしてその河をとくに苦もなく渡る人と
ずっとリンゴ〇個の世界から離れられず渡れない人がいる

「数の世界」のなかにいるときは
抽象度の高い数の操作のために必要な規則（ルール）を
そこに適用する必要があることがわからないと
いわゆる「数学が苦手」ということになってしまいがちだ

しかし重要なのは
なぜその「河」が渡れないのか
その鍵／枷になっているものが何かを問い
そこから河を渡る方法を見つける
あるいは此岸と彼岸に共通するものと
異なっているものを見つけることなのだろう

学校のテストなどで正解するためには
そこでいったいなにが求められているのかという
いわばそこで「常識」化されているルールに沿った
「忖度」が必要だということもある
（わからないながら「そういうものなのだから
そういうものにしておこう」という忖度である）

そこには教えられているルール（規則）もあれば
「いわれなくてもわかっていてね」という
暗黙の前提というのがあるのだけれど
後者については教えてもらえないし
場合によっては先生に煙たがられることになる
（先生自身がわからないということも多々あるだろう）

たとえば「数とは何か」
「数えるということとはどういうことか」
そうしたことを小学校の先生に聞いても
まずは答えは返ってこないから
（たとえばリンゴ３個と数の３はどういう関係なのかとか）
無難にテストなどをこなすには「忖度」が必要だ
（そのときはまだ習っていないことも禁じ手になったりする）

▪広瀬 友紀『ことばと算数 その間違いにはワケがある』
（岩波科学ライブラリー　岩波書店　2022/7）

個人的にいえば
「数」や「数式」は
姿を変えた「ことば」だと思っていて
その「ことば」の世界との違いがどうなのか
逆にいえば共通するところはどこなのか
といったことを考えていくのが面白い

じっさい「ことばと算数」で挙げられているような
こうした比較的単純な事例から
ひらけてくる問いは思いのほか深く広い
そこを旅するだけでもちょっとした冒険になる

▪広瀬 友紀『ことばと算数 その間違いにはワケがある』
（岩波科学ライブラリー　岩波書店　2022/7）

（「まえがき」より）

「私の息子は母をしのぐつまづきエリート。今春中学生になりましたが、小１から約６年間の百花繚乱解答を提供してくれています。加えてその他に巷で話題になっているエピソードや題材を通して、数と言葉の意外な共通点、あるいは似ているようで異なる点について考えてみましょう。正解から得られる情報より、間違いから得られる情報がいかに豊かなことか、きっとうなずいていただけると思います（だから我が子には正解して欲しくないのだ、とまで言うと嘘になりますが、不正解を喜べるというのは本当です）。数と言葉の関係のあり方は、時には子供にとって理解のヒントになり、時には逆に混乱を生みます。「算数に大切なのは国語力」とはよく言われますが、その通りの場合、または逆に「それで片付ければいいってもんじゃない場合」についても示唆が得られるはずです。」

（「第１章　カッコつけるのやめたら」より）

「うちは算数苦手な家系でして、母親似の息子（このとき症）はその日も順調にバツをいただいてきました。

　　１８−１０＋５＝３　×
　　１１−５−４＝１０　×」

「最初の問題１８−１０＋５は、左から順番に、１８から１０を引いて、そこに５を足せば正解の１３が導けます。つまり（１８−１０）＋５。だけど、じゃあ、３はデタラメなのかと言えば、２つ目と３つ目の１０＋５を先にやって、それを１８から引けばちゃんと３にもなります。それはどうして間違いなんだろう。
　次の問題１１−５−４も同様に、左から順番に、１１から５を引いて、そこからさらに４を引けば正解の２が得られます。（１１−５）−４ですね。だけど、１１−（５−４）、というように、５−４を先にやって、それを１１から引けば１０でもよくない？　左から順番に計算しないとどうして間違いになるのだろう？」

「数式記述のうえでの決まりごととしては「（×や÷は、＋や−より先に。ただしカッコでくくられていたらそこを一番先に。）ただしカッコでくくられていたらそこを一番先に。）それ以外は左から順番に」とされています。ただ、この「それ以外は左から先に」という部分は、おそらく人間の定めたあくまで便宜上の決めごとであって、冒頭の問題に答えが本当は２つあるということ自体を打ち消すものではないでしょう。」

「迷子になった選手の愛犬　拡散に次ぐ拡散、最後には発見
　サッカーＪ１大分トリニータのＭＦ松本怜選手（31）の愛犬が22日、北海道室蘭市の実家付近で行方不明になった。（asahi com 2020.2.24より）

　これを見てつい「サッカー選手が迷子になったんか？　大人なのに？　どういう事態？」ってちょっとびっくりしたのですが、よく読んだら迷子になったのはワンちゃんのほうでした。
　こうした表現も、3つの要素のうちどの2つを先にまとめるか、という点で解釈が２つ生じている例です。「［迷子になった選手］の愛犬」なのか、「迷子になった［選手の愛犬］なのか、カッコでくくって違いを表せるところが先ほどの計算問題と共通していますね。」

「近年、言語のみならず、言語以外の認知領域においても類似した階層構造が見いだせること、ならばそれらの領域の間に共通した階層構造の表現形式やそれを処理する認知基盤があるのではないかということに、多くの研究者が関心を持っています。視覚的芸術、音楽そして数隙はいずれも階層構造を持つという点で言語と共通しています。」

（「第３章　正三角形は二等辺三角形に入るんですか問題」より）

「まさにタイトル通り、数学的な解釈と、言語ならではの語用論的解釈がいよいよ真っ向から異なってしまうという事象を取り上げます。」

「正三角形も二等辺三角形に入るという点については「漸次着目させる」ことによってやがて気づいてくれることが期待されているように見受けられるものの、最初からそのように説明することにはどうやら焼却的な姿勢が見てとれます。異なる名称が同じ対象物に当てはまる、つまり、ある三角形は、同時に正三角形であり二等辺三角形である、ということにより子供が混乱することへの配慮なのでしょうか。」

（「第５章　かける数とかけられる数は同じだった？」より）

「かける数とかけられる数はどう区別するのか。いわゆる「かけ算の順序問題」を巡り今でも熱い議論が続いています。そしてその陰でひっそり見逃されている問題が。そもそも「かける数」「かけられる数」っていう日本語はどう理解すればいいの？」

「日本語の構文構造、特にこうした関係節構造は、母語話者の統語的な知識のなかでも比較的複雑なほうに入るでしょう。主語を名詞とする関係節、間接目的語を主名詞とする関係節、直接目的語を主名詞とする関係節を大人と同じくらい処理ができて、「かけるシロップ」とも「（パンケーキに）かけられるシロップ」とも言えるじゃないか、ということに気づく傾向がもしあるのだとしたら……むしろこうした言語能力、そしてさらに言語知識を客観視できるほどの高度なメタ言語能力があるからこそ、「かける数」「かけられる数」「比べる量」「比べられる量」等の持つ曖昧性に混乱する場合も多々あるのではないか、というのがこの章で言いたかったことです。そう考えると、もしかしたら巷で言われている「算数は国語力」には、「その実、（鋭すぎる）国語力がアダ」的なパターンも隠れているのかもしれません。」

（「第６章　マイナスを引くと……とってもマイナス？）」より）

「「マイナスのマイナスはとってもマイナス？」「え、なぜプラスになるの？」と、今では忘れてしまったけれど私たちもかつてはきっと悩んだはず。ここでは個別言語の二重否定表現や、言語一般の再帰性とのつながりについていろいろ考えを巡らせてみました。」

「日本語で「ないものはない」と言うと、「ないったらない」という同語反復の意味にもなりますし、逆に「何でもある」という意味にもなりますが、後者の肯定強調の計算をマスターするのは一筋縄ではいかないのかもしれないなと「思わされた事例があります。

（小３のとき、クラスの誰がドッジボールが強いかという話をしていて）
息子「○○の球は、あたらないやつがいない！」
母「全員あたるん？」
息子「ちがうよ。１人はあたるってことだよ」
母「へー（それ絶対ちゃうし……）」

　これは「あたるやつがいない、ってことはない＝＝少なくとも誰か１人は当たる）」という肯定強調の趣旨での二重否定表現だったのかもしれず、しかしそれを意図していたのなら日本語としてはおかしいっちゃおかしいんですが（あたらないやつがいない≠あたるやつはいないってことはない）、彼の頭のなかで、彼なりの、「否定の否定は肯定」的な計算自体はされていたことになるのかと、今から考えたらほめてあげたいかも……「一理ないわけはない」と。」

「人間の言語における再帰性とう性質はとても大きな意味を持ちます。これは、ある構造操作の結果に、同じ構造操作を再度適用することができる、あるいはある構造単位が、その内部にそれと同じ構造単位を持つことができる、というふうに、有限の性質を持つ決まりを無限にくり返すことを許す性質です。
　前者と後者は本質的には共通した性質ですが、例えばわかりやすい前者の例としては、名詞と名詞で複合語（より大きな名詞）を作ることができる、そしたらそのできあがった名詞とまた別の名詞を……をくり返してものすごく長い複合語を作ることもできます（東京特許許可局職員代表委員会委員長杯←適当に作ってみました）し、理屈上ではこれは無限に長くすることもできるはずです。
　そして後者の例が、自己埋め込みによる入れ子構造です。「夢を見た夢を見た夢を見た夢を見た……」はただ同じフレーズを連呼しているのではなく。ある夢の内容としてそのなかで夢を見ていて……という内包関係がマトリョーシカのようにくり返されているという解釈ができますよね。
　この再帰性は、人間の言語の普遍的（つまり言語共通の）性質であること。そして、その再帰性を持つことが、他の生きもののコミュニケーションと比較しての人間の言語の重要な特性であること。そうした前提のもと、人間は進化の過程でどのように再帰性を扱う能力を獲得したのか。これらの問題は引き続き多くの科学者の興味を集め、熱い議論の対象となっています。」

☆mediopos-2889　　2022.10.15

「私たちは果たして自由であるのか」

古来から哲学者たちは
自由と決定論のあいだで議論を重ねてきた

そして自由と決定論は両立するのか
それとも両立しえないのか
そうした問いが堂々巡りのように
繰り広げられてきているが
（そうした議論に細かく付き合うのも疲れてしまう）
論者がどの視点に立っているかによって
その答えはすべてにあてはまるものではなさそうだ

自由が何を意味しているかにもよるが
じっさいのところ私たちは
自由ではありえないとも
自由であるともいえると捉えたほうがよさそうだ

ちょうど量子力学のわかりやすい本
フランク・ウィルチェックの
『すべては量子でできてい』がでているが
そのなかでとりあげられている「相補性」が
その問いに対するひとつの答えを示唆してくれる

「相補性」とは「一つの事柄が
異なるいくつもの観点から考慮されるときには、
非常に異なる、あるいは矛盾する
複数の性質を持つように見える可能性がある
という考え方」である

量子力学で物体の最も基本的な記述をする場合
波動関数を用いるが
位置と速度とを同時に予測することはできない

それを音楽を分析することにたとえれば
和音とメロディーにあたる
その両者を同時に扱うことはできない

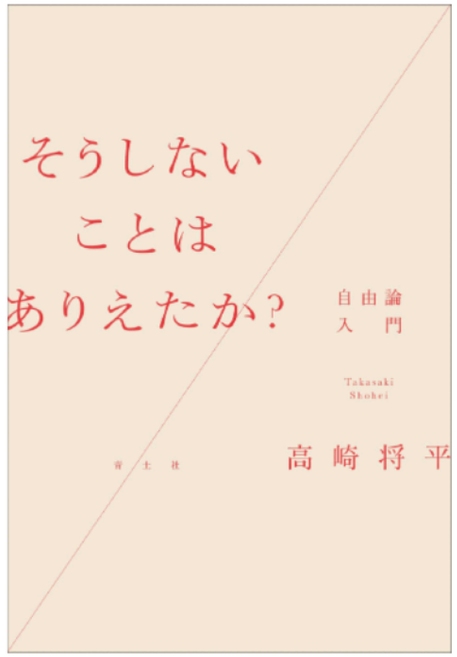
自由であるのか
という問いに対しても
ある観点から自由ではありえないとされても
それと矛盾する観点からは
自由であるといえるかもしれない
そしてその両者は別のものではない
相補的な矛盾的同一がそこに成立する

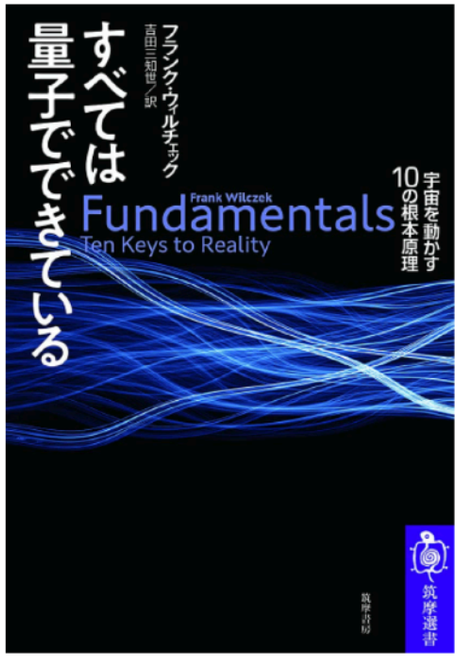
それに加え観測問題がある
「何かの性質を測定するためには、
それと相互作用しなければならない」
さらには
「正確な測定には強い相互作用が必要」となる

量子力学的にどうなのかわからないが
観測問題はある意味で（アナロジーとしてだが）
自由の両義性を表しているともいえるかもしれない

私たちはただ他に働きかけているのではない
働きかけられてもいる
さらにいえば働きかけるためには
働きかけられなければならない
強く働きかければかけるほど
強く働きかけられる

その意味では
○○からの自由というとき
わたしたちは自由であろうとしながら
むしろ逆説的に〇〇に働きかけられ
純粋に自由であることはできなくなる
自由を求めれば求めるほど
自由をなくしてしまうことになる




▪高崎将平『そうしないことはありえたか?／自由論入門』
（青土社　2022/9）
▪フランク・ウィルチェック（吉田 三知世訳）
『すべては量子でできている／宇宙を動かす１０の根本原理』
（筑摩選書　筑摩書房　2022/9）

すべては関係性のもとに成立しているからだ
その関係性のなかにおいて
自由ということも捉える必要がある

それでは〇〇からの自由が
自由と逆のベクトルを招来してしまうのだとすれば
自由をどこに求めればいいのだろうか

むしろ〇〇への自由という観点において
関係性のなかでの創造的なありようが
可能になるのではないか

ある意味ではそうしたありようのなかで
自由ではないことと自由であることが
相補的に成立し得るのではないか

ある時は自由であり
ある時は決定論的であり
それぞれが相補的に成立するなかで
私たちは存在していると

▪高崎将平『そうしないことはありえたか?／自由論入門』
（青土社　2022/9）
▪フランク・ウィルチェック（吉田 三知世訳）
『すべては量子でできている／宇宙を動かす１０の根本原理』
（筑摩選書　筑摩書房　2022/9）

（高崎将平『そうしないことはありえたか?／自由論入門』〜「序章」より）

「私たちは果たして自由であるのか。この問いは長年のーーーー溯れば古代ギリシャの時代からのーーーー哲学者たちの悩みのタネで、この二千年来ああでもない、こうでもないと喧々囂々の議論が繰り広げられてきた。」

「哲学者たちは、ある極端な状況を想像する。それは「私たちが日常におこなっている行為の全ては、実は私たちが生まれるはるか前から決まっていたのではないか？」という想像である。世界の在り方が私たちの意志にかかわらずあらかじめ決まっているのだ、という考えは、「決定論」的な世界観と呼ばれる。」

「「決定論」的な世界の見方と「運命」には、実は深いつながりがある。
（･･･）
あなたのなすこと全ては運命の網の目の中に絡み取られていて、あなたは決してそこから抜け出すことができない。このような世界観を「運命論」と呼ぼう。
　さて、運命論が言うように、この世界の全てが運命によって決まっているとしよう。このときあなたは、「それでも私たちは自由だ！」と自信を持って言えるだろうか。もしそう断言できない気持ちがどこかにあるなら、あなたはすでに、立派に自由に関する哲学的思索の一歩を踏み出している。というのも、冒頭で述べた哲学者の悩みーーーー決定論的な世界で私たちは自由でありうるのか、という悩みーーーーは、運命論的な世界観にいまあなたが感じたであろう薄気味悪さに通底するものがあるからだ。」

「私たちは決定論という考えをトンデモ理論だといって無視することはできない。決定論は、私たちの日常的思考に深く浸透している科学的な世界化に裏打ちされているからだ。また同時に、「私たちは本当は自由なんかじゃないんだ」と簡単に開き直ることもできない。というのも、「自由」という概念は責任の帰属や他者への非難・賞賛といった私たちの道徳実践と密接に結びついており、自由を否定することはそれら実践の意義をも否定することにつながりかねないからだ。かくして、私たちは「自由と決定論」という哲学的問題の前に立ち止まって、納得のいくまで考え抜かねばならない。」

「自由という哲学的主題の主軸となる問いは、私たちが（ときに）自由であるということと決定論が真であることとが両立するか、一言で言えば、「自由と決定論は両立するか」である。この問いに「イエス」と答える立場は「両立論」、「ノー」と答える立場は非両立論と呼ばれる。

（フランク・ウィルチェック『すべては量子でできている』〜「第10章　相補性は精神を拡張する」より）

「「相補性」とは、その最も基本的な形態においては、一つの事柄が異なるいくつもの観点から考慮されるときには、非常に異なる、あるいは矛盾する複数の性質を持つように見える可能性があるという考え方だ。相補性は経験や問題に対する一つの態度なのだが、それは目からうろこが落ちるようなきわめて有用なものだと私は気づいた。それは文字通り、私の考え方を変えた。」

「世界は単純であると同時に複雑であり、論理的であると同時に奇妙であり、法則に従っていると同時にカオス的だ。「根本的な理解」は、これらの二重性を解消したりはしない。実際、すでに見たように、逆にそれを際立たせ、深める。相補性を重く受けとめないかぎり、物理的な実在に正しく向き合ったことにはならない。
　人間もまた二重性に包まれている。私たちは小さいと同時に巨大であり、儚いと同時に長く存続し、博識であると同時に無知である。相補性を重く受けとめないかぎり、人間の状態に正しく向き合ったことにはならない。」

「量子力学では、物体の最も基本的な記述は、その物体が電子であろうが象であろうが、その波動関数である。物体の波動関数は一種の原材料で、私たちはそれを処理して、物体の振る舞いについての予測を導き出すことができる。波動関数はさまざまな異なる問題に答えるために、それぞれに応じた異なる方法で処理することができる。その物体が今後どこに存在するかを予測したければ、その波動関数をある方法で処理しなければならない。その物体がどんな速度で運動しているかを予測したければ、別の方法で波動関数を処理しなければならない。

　この波動関数を処理する二つの方法は、おおまかに言って、音楽を分析する二つの方法に似ている。和音による分析とメロディーによる分析の二つだ。和音が局所的な分析だーー音楽の場合は、空間の一点ではなく、時間のなかの一瞬を調べるーーが、メロディーはもっと広範囲の分析である。和音は位置のようなもので、メロディーは速度のようなものだと言えよう。
　この二つのかたちの処理を同時に行ったりはしない。両者は互いに干渉しあうからだ。位置の情報が欲しければ、速度の情報を破壊してしまうような方法で波動関数を処理しなければならない。そして、その逆の場合も同じだ。」

「物理的な振る舞いのレベルでは、この対立ーー相補性ーーは、二つのキーポイントを反映している。一つ目のキーポイントは、何かの性質を測定するためには、それと相互作用しなければならないといいうことである。言い換えれば、私たちの測定は「実在」を捉えるのではなく。実在の標本を抽出するだけだ。
（…）
　二つ目のキーポイントは、一つ目のものをいっそう高めたもので、正確な測定には強い相互作用が必要だ、である。
（…）
　ここで触れた二つのキーポイントーー観測は能動的なプロセスで、観測は侵略的であるーーは、ハイゼンベルクの分析の堅固な基盤である。これらがなければ、私たちは量子論の数字を使って物理的実在を記述することができない。しかしこれらは、私たちは子ども時代に構築した世界模型を損なう。「向こう側にあり」、私たちが観察することでその性質が明らかになる外界と、私たち自身とのあいだには厳格な区別があるという世界模型を、ハイゼンベルクとボーアの教えを受け入れるなら、そのような厳格な区別は存在しないのだと気づかざるをえない。世界を観察することで、私たちは世界の構築に参加するのだ。」

「精神と心理学に基づくものと、物質と物理学に基づくもの、どちらのモデルも間違ってはいない。それぞれが異なる疑問にちゃんと対応している。しかし、どちらも完璧ではないし、どちらも他方の代わりをうまく務めることはできない。人々は確かに選択をするし、彼らの体験は実際に物質の法則に従っている。これらの知見は日々の現実だ。消えてなくなることはない。相補性の精神で、私たちは両者を受け入れる。どちらも相手を反証することはない。事実がほかの事実を反証することはできない。むしろ両者は、実在を処理する異なる方法を反映しているのである。
　人々は自分が行うことを選択できるのだろうか？　それとも、数理的な物理学の調べに合わせて踊る操り人形なのだろうか？　これは良い質問とは言えない。音楽は和音なのか旋律なのかと問うのと変わらない。
　自由意志は、法律と道徳規範にとって本質的な概念だが、物理学は自由意志なしでうまくいっている。法律から自由意志を取り去る、あるいは物理学に自由意志を挿入するなら、法律もしくは物理学がむちゃくちゃにしてしまうだろう。そんなことはまったく不要だ！　自由意志と物理学的決定論は、実在の相補的な二つの側面である。」

☆mediopos-2890　　2022.10.16

レイチェル・カーソンが
「鳥の鳴き声が聞こえない春が来る」と警鐘を鳴らした
『沈黙の春』（一九六三）から半世紀以上が過ぎたが
今やこのままでは
「昆虫たちの羽音が聞こえない沈黙の春」が来ることになる

毒性の強い農薬
土壌の劣化
生息環境の激減
気候変動
そんなさまざまな要因が
昆虫たちの生態環境を破壊し続けている

昆虫たちがいなくなると
作物の受粉ができなくなり
他の生物の栄養源がなくなり
枯葉や死骸・糞の分解ができなくなり
土壌の維持ができなくなり･･･
というように
人類の生態環境にも甚大な影響が及ぶことになる

人間は昆虫なしでは生きていけない
というよりも昆虫だけではなく
地球全体の生態系のなかで
大きな役割をもっている存在がいなくなると
その失われた役割を他で補完することができなくなる

『サイレント・アース』の著者デイヴ・グールソンは
ネオニコチノイド系殺虫剤の使用禁止を
ＥＵ全域で実現させるべく働きかけを行った生物学者だが
昆虫たちと共存することの重要性を訴えているのが本書

ちなみに日本では
ネオニコチノイド系農薬への規制ががあまりにも緩く
一般での問題意識も度を超えて希薄なままだ
これは政治や教育そしてメディアといった
「公」からの情報を鵜呑みにして疑わない
日本人特有のメンタリティにも原因がありそうだ
昨今の感染症や戦争に関する情報などに関する
極端なバイアス情報を信じ込んでしまうのも同様である

▪デイヴ・グールソン（藤原多伽夫訳）
『サイレント・アース／昆虫たちの「沈黙の春」』
（NHK出版 2022/8）

著者のデイヴ・グールソンは
「大多数の人は昆虫のことをあまり好きではないと思う。
それどころか実際のところ、多くの人が昆虫を嫌っているか、
怖いと思っている」と率直なことを語り
さらに
「昆虫を愛するとまではいかなくても、
少なくとも昆虫の役割すべてを尊重してくれるように
人々を納得させる」ことを
みずからのミッションだとも語っている

日本でも同様なところはあるものの
おそらく昆虫図鑑がブームとなったりもするように
欧米に比べれば昆虫への親近感はそれなりにあるはずだが
どうも「大本営発表」のようなかたちで
具体的な指導がないかぎり行動を促すまではいかないようだ

少なくとも身近なところで生息している昆虫たちに
関心をもつようになるひとが増えればとも思うのだが
実際は「昆虫好き」が大勢になることは難しく
昆虫への無関心派ないし嫌悪派のほうが多そうだ
それは過剰なまでに「菌」を嫌悪する人たちとも通じている

昆虫の減少問題もそうだが
ほかのさまざまな問題についても
じぶんなりに調べ考え問うことのできる人たちが増えなければ
やがて人間そのものの「沈黙の春」がやってくることになる

現代は過去の時代よりも
じぶんで調べることのできる環境があるにもかかわらず
あいかわらず「大本営発表」に依存して疑わないことが多い
そのメンタリティが変わる時代は来るのだろうか

▪デイヴ・グールソン（藤原多伽夫訳）
『サイレント・アース／昆虫たちの「沈黙の春」』
（NHK出版 2022/8）

（「はじめに　私の昆虫人生」より）

「一九六三年、私が生まれる二年前に、レイチェル・カーソンが著書『沈黙の春』で人間が地球をひどく傷つけていると警鐘を鳴らした。あれから状況が悪化しているのを目にしたら、カーソンは涙を流すことだろう。牧草地や湿地、荒れ地、熱帯雨林といった、昆虫に満ちた野生動物の生息環境がブルドーザーで切り開かれ、燃やされ、農地にされて、大規模に破壊されてきた。カーソンが大きく取り上げた農薬や化学肥料の問題はいっそう深刻になり、いまや世界中で毎年三〇〇万トンもの農薬が環境中に流出していると推定されている。こうした新たな農薬のなかには、カーソンの時代に存在していたあらゆる農薬より、昆虫にとって何千倍も毒性の強いものがある。土壌は汚染し、河川は泥に埋もれ、化学物質に汚染されてきた。そして、カーソン時代には認識されてきなかった気候変動が、すでに傷ついた地球にさらに脅威をもたらしている。これらすべての変化が人間の一生のうちに目の前で起こり、いまも加速し続けている。
　昆虫の減少は、この小さな生き物を愛し、大切にしている私たちにとって、耐えられないほど悲しいことではあるが、それだけではなく人間の豊かな暮らしをも脅かしている。作物の受粉、糞や枯れ葉、死骸の分解、健全な土壌の維持、害虫防除をはじめ、さまざまな目的で人間は昆虫を必要としているのだ。野生の花は昆虫がいないと受粉できない。昆虫が減っていくにつれて、私たちの世界は徐々に動きを止めてゆく。世界は昆虫なしでは成り立たない。レイチェル・カーソンが言うように、「人間は自然の一部えあり、自然に対して仕掛けた戦争は自分自身との戦争になる」のだ。」

「残された時間はなくなりつつあるが、危機を救う時間はまだある。昆虫たちはあなたの助けを必要としている。大半の昆虫はまだ絶滅したわけではなく、ある程度の空間を与えるだけですぐに繁殖できるから、すばやく回復できるのだ。昆虫は身の回りのあらゆる場所にすんでいる。（･･･）私たち全員が簡単な対策をとるだけで昆虫を支えることができる。」

（「第１部　なぜ昆虫が大切なのか」より）

「大多数の人は昆虫のことをあまり好きではないと思う。それどころか実際のところ、多くの人が昆虫を嫌っているか、怖いと思っているか、あるいはその両方の感情を抱いているのではないか。
（･･･）
私たちの大半が都市に住むようになって、昆虫をほとんど見ることなく成長するようになり、せいぜいイエバエや蚊、ゴキブリくらいしか目にする機会がなくなっているから、昆虫を怖いと感じる反応は意外ではないかもしれない。私たちの大半は未知のもの、なじみのないものを怖がるものだ。だから、昆虫が人類の生存にとって欠かせない重要な存在であることをわかっている人は少ないし、昆虫が美しく、賢く、魅力的で、謎めいた驚くべき存在であることをわかっている人はさらに少ない。昆虫を愛するとまではいかなくても、少なくとも昆虫の役割すべてを尊重してくれるように人々を納得させることが、私の生涯のミッションだ。」

（「第２部　昆虫の減少」より）

「過去五〇年で、私たちは地球の野生動物の数を著しく減らしてしまった。かつてよく見られた多くの種がいまは少ない。はっきりしたことはわからないが、ヨーロッパでさまざまな期間や異なる昆虫グループに着目したさまざまな研究を見てみると、一九七〇年以降で少なくとも五〇％の昆虫が失われたと考えてよいだろう。九〇％失われた可能性も十分ある。過去一〇〇年間の減少幅はさらに大きかった可能性がかなり高い。北アメリカはヨーロッパと農法がだいたい似通っているから、おそらく状況も同様だろうが、世界のほかの地域の状況は欧米よりもはるかにはっきりしない。少しはましなのか、それとももっと悪いのか。
　昆虫は食料や送粉者、物質の再循環を担う存在などとしてきわめて重要な役割を果たしていることがわかっているから、昆虫の減少速度について確実なデータがほとんどない状況は恐ろしい。さらに恐ろしいには、私たちのほとんどが何かしらの変化に気づいていないことかもしれない。一九七〇年代の状況を覚えていて、自然への関心が高い人であっても、子どもの頃にどのぐらいの数のチョウやマルハナバチはいたかを正確に思い出すことはできない。」

（「第３部　昆虫が減少した原因」より）

「昆虫が世界的に減少した原因は何だろうか？　最近では多くの仮説が登場し、昆虫の数と同じぐらいありそうに思えるほどだ。証拠に裏付けられた説や、証拠の裏付けは弱いが妥当に思える説がある一方で、まったくばかげた説もある。昆虫のなかでも野生のミツバチが減少した原因は多く議論されてきて、いまだに議論は続いているものの、生息域の喪失、複雑に入り混じった多様な農薬への慢性的な曝露、養蜂の巣における外来の感染症の蔓延、出始めた気候変動の影響、ほかの要因もあるだろうが、こうした人為的な負荷の組み合わせが原因であると大部分の科学者は考えている。まだ誰も気づいていない要因もきっとあるだろう。ほかの昆虫もおそらく似たような困難に直面している。減少の原因は場所によっても異なるだろう。つまり、入り組んでいるということだ。しかし、そうした減少を食い止め、そして増加に転じさせるためには、減少の原因を正しく理解しなければならない。そうすれば、昆虫の仲間たちがもっと住みやすい世界をつくるために必要な対策を導き出すことができる。」

（「第４部　私たちはどこへ向かうのか？」より）

「この危機を回避できなかった原因は、政治家が長期的な計画の作成よりも次の選挙に集中せざるを得ない政治制度にあるのかもしれない。多くの人は、欲に駆られた資本主義制度に原因があると指摘している。巨大な多国籍企業が、政治家や、さらには国家全体さえもはるかに凌駕する大きな力を集めることを赦し、人間や環境が負う代償を顧みることなく利益を最大化するように世界を形成したというのは。それを助長したのは、経済が無限に成長するというほぼ全世界的な信念のほか、経済成長と幸福が結び付いているという前提もあったのだと思う。（･･･）
　ほとんどの科学者が警告していたにもかかわらず、なかにはジオエンジニアリングで気候を修正しようとした人もいた。大気中に化学物質を散布して、雲の形成を促すとともに、太陽光を反射させるのが目的だ。だが、気候はそんなやり方ではとうてい制御できないほど複雑であることが明らかになった。彼らが成し遂げたのは、汚染の問題を増やし、気象をはるかに予測しにくくしたことだけだった。」

（「第５部　私たちにできること」より）

「昆虫の減少に歯止めをかけて自体を好転させるには、そして。私たちが直面しているほかの大きな環境問題に対処するためには、一般の人々から農家、食料品店などの事業者、地方自治体、政府の政策立案者まで多様なレベルで行動を起こさなければならない。つまり、私たち全員が行動しなければならないということだ。そもそもこの問題は私たち全員の有害な行動が組み合わさった結果として起きたものだから、問題を解消するためにはみんなが力を合わせて取り組まなければならない。」

☆mediopos-2891　　2022.10.17

本書には養老孟司のこんな言葉が寄せられている

「〈バカの壁〉はここから始まっていたか。
子供たちの国語力をめぐる実情から、
日本社会の根底に横たわる問題まで
掘り起こした必読の書。」

本書のいちばん最初で紹介されている
小学校四年生の
新美南吉の児童文学『ごんぎつね』を
班にわかれて読む授業での
生徒たちの発言には
著者同様驚きを禁じ得なかった

葬儀のシーンで村の女たちが
大きな鍋で料理をしているところだが
「大きななべの中では、
何かぐずぐずにえていました」
とあるその「何か」について
生徒たちの多くが
「母親の死体を煮ている」
と答えていたというのだ

「おそらく私にとって始めてのことなら、
苦笑いして流していただろう。
だが、似たような場面に出くわしたのは
一度や二度ではなかった。」
というのだ

これは「誤読」ではなく
「読む力」さらにいえば
感受性そのものが壊れているといったほうがいい

小中学でこのように
「国語力が弱まったように感じる」ようになったのは
二〇〇〇年前後を境にした時代だというが
その後ＳＮＳなどもふくめたインターネットが
おそらくはその傾向を助長してきたところもあるだろう

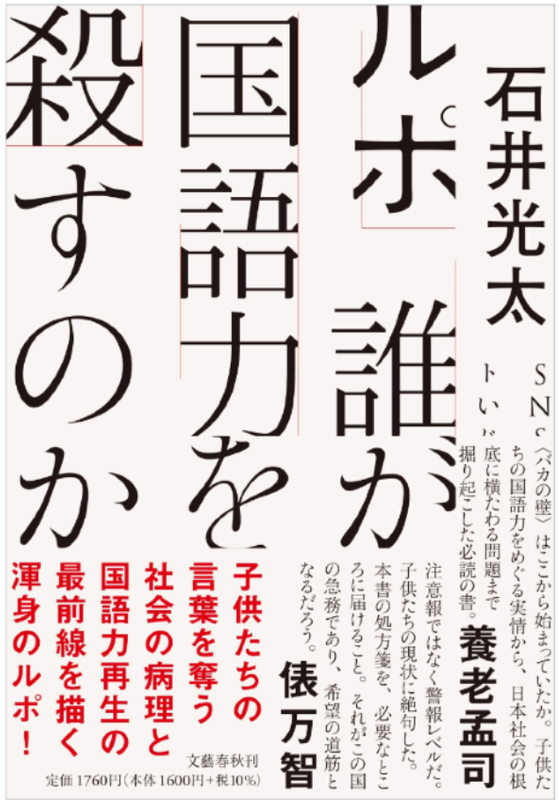
本書でも紹介されているが
そうした「国語力」ついての問題意識は
「比較的家庭格差の上層」にいる子供たちの通う
学校では危機感のもとにさまざまな取り組みが
なされてきているようだが
そうでない場合上記で紹介したような
「国語力」のもとになっている力が
すでにスポイルされてしまっている状況が
現象化しているとみるのが現実なのだろう

しかしおそらく問題は子供たち以前に
大人の「国語力」とそれをつくりだしている
感受性や思考力・メンタリティ等のアウトプットとして
現象化していると捉えた方がいいのかもしれない

それを如実に表しているのは
政治の言葉であり
メディアの言葉だともいえる
それらもまた「国語力」以前の段階で
ほとんど壊れている
そしてその状況に対して
疑いさえもつことができない大人たちの姿である

その意味で上記の最初に紹介した
養老孟司の言葉に深く頷かざるをえない

ほんとうは学校とかに頼らず
「読み書き算盤」の力をなんとか身につけ
じぶんで生き抜く力を育てるのがいいと思うのだが
現代のような実質的な「階層社会」のなかで
すべてのひとにそれを求めるものは困難なことでもある




▪石井 光太『ルポ 誰が国語力を殺すのか』
（文藝春秋　2022/7）

本書のいちばん最後にこんな言葉が記されている

「日本の未来を生かすか殺すか、
私たちは今、その岐路に立っているのである」

まず大人が〈バカの壁〉を超えられるかどうかだろう

▪石井 光太『ルポ 誰が国語力を殺すのか』
（文藝春秋　2022/7）

（「序章」より）

「都内のある公立小学校から講演会に招かれた時のことだ。校長先生が学校の空気を感じてほしいと国語の授業見学をさせてくれた。小学四年生の教室の後方から授業を見ていたところ、生徒の間から耳を疑うような発言が飛び交いだした。
「この話の場面は、死んだお母さんをお鍋に入れて消毒しているところだと思います」
「私たちの班の意見は違います。もう死んでいるお母さんを消毒しても意味がないです。それより、昔はお墓がなかったので、死んだ人は燃やす代わりにお湯で煮て骨にしていたんだと思います」
「昔もお墓はあったはずです。だって、うちのおばあちゃんのお墓はあるから。でも、昔は焼くところ（火葬場）がないから、お湯で溶かして骨にしてから、お墓に埋めなければならなかったんだと思います」
「うちの班も同じです。死体をそのままにしたらばい菌とかすごいから、煮て骨にして土に埋めたんだと思います」
　生徒たちが開いていたのは国語の教科書の『ごんぎつね』だ。

（･･･）

「当初、私は生徒たちがふざけて答えているのだと思っていた・だが、八つの班のうち五つの班は、三、四人で話し合った結論として、「死体を煮る」と答えているのだ。みんな真剣な表情で、冗談めかした様子は微塵もない。この学校は一学年四クラスの、学力レベルとしてはごく普通の小学校だ。
　おそらく私にとって始めてのことなら、苦笑いして流していただろう。だが、似たような場面に出くわしたのは一度や二度ではなかった。」

「校長はつづける。
「学校は学力を育てる場なので、子供たちが誤読をするのは悪いことではありません。そこで教員に正してもらうことで、読解力を高めていけばいい。でも私は。こうした子たちの反応は単なる読み違いではないと考えています。
　もし『ごんぎつね』の鍋のシーンを、家が食堂を経営しているとか、喪服を消毒しているとか読んだのだとしたら、誤読と言えるでしょう。ありえないことではないからです。しかし、母親の死体を煮ているというのは、常識に照らし合わせれば明らかにおかしいとわかるはずで、平気でそう解釈してしまうのは単なる読み違えではありません。
　こうした子たちに何が欠けているのかといえば、読解力以前の基礎的な能力なのです。登場人物の気持ちを想像する力とか、別の事を結び付けて考える力とか、物語の背景を思い描く力などです。自分の考えを客観視する批判的思考もそうでしょう。それらの力が不足しているから、常識に照らし合わせればとんでもないような発想をしているのに気づかず、手を挙げて平然と答えられてしまう。読解力の有無で済ましてはいけないことだと思うのです。
　校長がそう語る背景にあるのは、近年教育業界を中心に沸き起こっている「読解力の低下」の議論だ。」

「今回、校長が指摘しているのは、こうした教育界を主導する人たちの間で行われている議論への違和感だ。つまり、そもそも学校現場で見られる子供たちの想像力の欠如や珍妙な解釈を、「読解力の低下」という問題だけに留めて考えていいのかということである。文章を正確に読んで理解する以前のところで、子供たちは何か大きなものにつまづいているのではないか。」

「「国語力」とは何なのだろう。文科省の定義によれば、国語力とは「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」の四つの中核からなる能力としている。
（･･･）
　文科省が国語力を高めることがより良く生きる力を育むとしているのは、将来的にそれが全人的な力となるからだ。だが、先ほどの校長の指摘は、今の学校の教育や社会の在り方が、本当に子供たちが必要としている国語力を上げるためのものになっているかというものだ。もし適切に機能していなければ、子供たちは生きていくために必要な力を得られないまま成長していっていることになる。」

「子供たちの国語力は本当に失われているのか。
　だとしたら一体、誰が、何が、なぜ、国語力を殺したのか。
　子供たちの国語力を回復させるには、どのような取り組みが必要なのか。」

（「第一章　誰が殺されているのかーーーー格差と国語力」より）

「多くの教員によれば、今の学校はそれをするための環境が整っていないという。いつから、なぜ学校は子供たちの生きる力を育むことができなくなってしまったのか。」

（「第二章　学校が殺したのかーーーー教育崩壊）

「一九九〇年代以前から教鞭をとっていた小中学校の教員たちに話を聞くと、二〇〇〇年前後を境に子供たちの国語力が弱まったように感じるという意見でほとんど一致する。」

「インタビューを終えた後、私はある言葉を思い出さずにいられなかった。一章に登場した元教員の末次則子のつぶやきだ。

「文科省も、学校も、親も、みんな結局は成果主義なんですよ。すぐに形として表れる結果ばかりを追い求めつづけている。だから、もっともっとという具合に新しいことをやろうとする。
　国語力を育てることって成果主義とは真逆で、目に見えないものなんです。一つの詩を丹念に読み込んで感動の涙を流しても、テストの点数に結びつかないし、資格を取得できるわけでもない。でも、そうやって内面で育ててきたものがあるからこそ、何十年か先に誰も想像しなかったような素晴らしい人間性を持てるようになるんです。
　私は、人にとって本当に大切なものって不可視なものだと思っています。その子のやさしさを育てる、その子の勇気を育てる、その子の誠意を育てる。どれも明確な方法論があって、数日後に点数化されて見えるものじゃなありませんよね。
　それでも、その子の未来のために毎日水をやり、丁寧に語りかけ、手を汚しながら土を取り換えて育てていく。家庭でも、学校でも、地域でもそれをやっていく。これが本来の教育だと思うのです」
　今の教育の世界に、こうしたことを実行できる余地はどれだけあるだろうか。」

（「第三章　ネットが悪いのかーーーーＳＮＳ言語の侵略）

「現在の子供たちの国語力は、ＳＮＳの短文テキストコミュニケーションによって根底から揺さぶりをかけられている。元来、言葉は自己肯定感を育み、世界のあらゆることを思いやりでつなぎ、未来を切り開いていくためのものだった。それが無思慮に感情を吐き捨てるだけのものに取って代わられた時、子供は、世界は、未来はどうなってしまうのだ。
　私たちは目を向けなければならないのは、そんな世界の危機的な一側面なのである。」

（「第六章　非行少年の心に色彩を与えるーーーー少年院の言語回復プログラム」より）

「四章から六章にわたって、社会の底辺からの国語力再生の取り組みを見てきた。不登校、ゲーム依存、非常と形はちがえど、ここから脱するために必要なプロセスに共通するものがあるのに気がついただろうか。いずれも次のようなステップで回復支援が行われているのだ。
１，劣悪な環境で言葉を失う。
２，子供を安全地帯（心理的安全性）に置く。
３、そこで五感を刺激しながら言葉と思考のリハビリを行う。
４、言葉による成功体験をつみ重ね、自己肯定感を高める。
５、実社会での生きがいや希望を見いださせる。
　こうしたプロセスは、家庭格差の上層にいる子供たちであれば、親や友人と接する中で自然と経験するものだ。しかし、家庭格差によってその機会を奪われた子供たちは、人生の困難にぶつかった後、フリースクール、病院、少年院などである種の保護下に置かれ、それを回復プログラムとして行うことになる。いわば〝育て直し〟のような形で国語力をつけてくのだ。」

（「第七章　小学校はいかに子供を救うのかーーーー国語力育成の最前線１）

「なぎさ公園小学校の教育が示しているのは、現代の子供に必要なことを考えた上で創意工夫によって五感に刺激を与え、思考や表現の機会を用意すれば、彼らの国語力を確実に伸ばしていけるということだ。さらに授業によって関心を縦に横にと広げれば、自ずと自分の好きなことを見つけ、それに向かって進んでいくようになる。
　こうしたことが数年後に子供たちの生きる力となり、自らの人生と社会を輝かせていくことにつながっていくのだろう。」

（「第八章　中学校はいかに子供を救うのかーーーー国語力育成の最前線２）

「附属高校で国語科を担当する田尾澄子は言う。
「高校でも、中学と同じように、勉強は大学に入るためにあるのではなく、心を成長させるためにあるものだという理念で授業を進めています。たまに「私はその立場になったことがないのでわかりません」という人がいますが、それを言ってしまったら社会は成り立ちません。世界のことだってわかるわけがない。他人の気持ちを想像した上で自分が何をすべきかを考え、行動していく力は、大学に入ってから習得するのではなく、中学、高校の段階で確実に自分のものにしておかなければならないものです。」

「国際化の尖端を走る同校（開智日本橋中学校・高等学校）は、一風変わった授業を取り入れている。中学三年間を通して道徳の授業をつかって「哲学対話」を行っているのだ。
　（･･･）哲学対話とは答えのない問い（テーマ）に対して、クラスのみんなが意見を出し合うというものだ。テーマは「友達がいる意味は何か」「魚は何を思っているのか」「言葉と感情はどうつながっているのか」「いいことをしても報われないのはなぜか」など自由であり、生徒たちは多様な意見をつみ重ねることで思考を深めていく。世界各国でこの対話を取り入れる学校が増えてきており、ここ一〇年ほどは日本でも少しずつ広まりだしている。」

「これらの学校に通うのは比較的家庭格差の上層で育ってきた生徒たちだ。それでも両校が総力を挙げて取り組んでいるのが、ともすれば時代遅れで実利とは無縁に思われているような文学作品や哲学を用いて、愚直なまでに人間にとて根源的な力をつけさえていく教育なのだ。」

☆mediopos-2892　　2022.10.18

作家にかぎらず
それなりに仰ぎ見ていた
過去のひとたちが
次々と自分よりも
若くして亡くなっているのを知ると
それなりの感慨がわいたりもする

物理的に年を重ねたからといって
自分が成熟しているとはいえないし
かつてそれなりの事績やそれにともなった名を
残したひとたちと比べるなど烏滸がましくもあるが

なにをして生きてきたかというのはともかくとして
生まれてからそれなりの年数に渡って
太陽のまわりをまがりなりにも回ってきたことで
経験されるものもあるのではないかとも思う

そんななか『作家の老い方』という
「老い」を描いた作家のエッセイを集めたアンソロジーがあり
そのなかの吉田健一のエッセイがじんわりと沁みてきた

今年はじぶんにとって記念すべき？
シュタイナーの亡くなった年を越えた年齢になったが
吉田健一のそれまでにもすでにあと一年を切っている

じぶんが成熟しているなどとは露ほども思えないが
自分比だけでいえば若い頃よりは
なにがしかのことを少しは広く深く
考えられるようにはなってきてはいるのではないかと思える
逆にいえば若い頃はいまよりももっと粗雑に
しかも狭い範囲のことしかものを考えることができずにいた

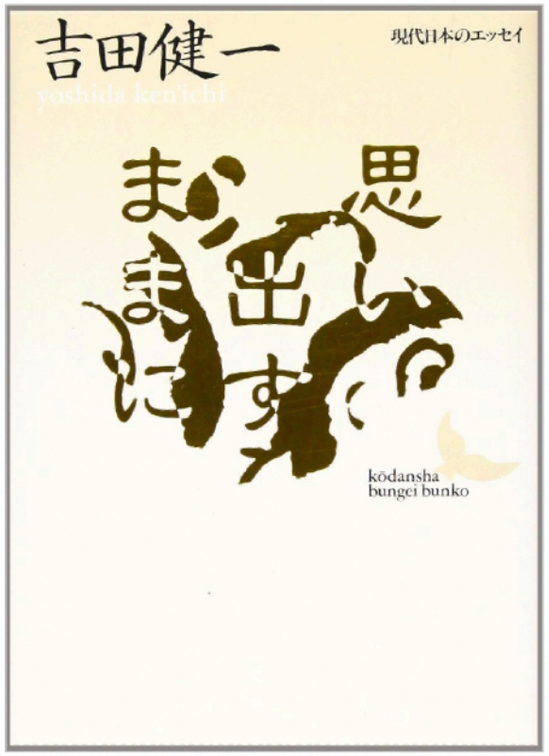
年を経たことで変わってきたことがあるとすれば
エッセイのなかでふれられているように
「年を取ることで変わるのではなくて
それだけ自分になって行く」
それしかないことがわかってくることだろう

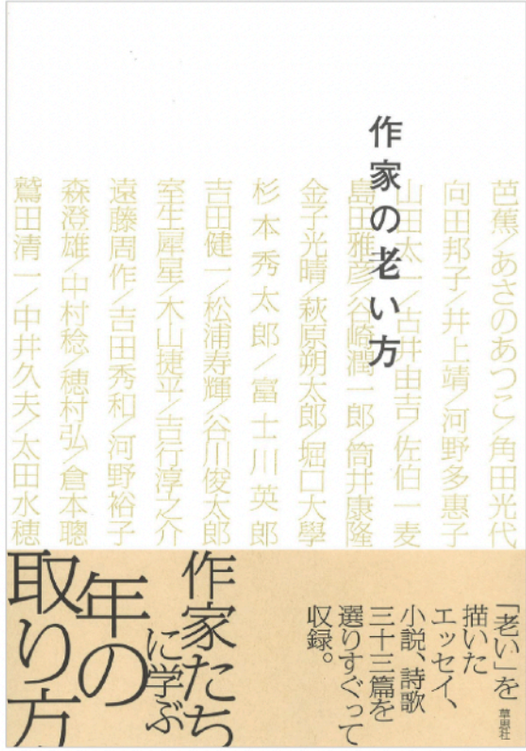
「○○のようになりたい」という人も多いだろうが
けっきょくのところ自分は自分にしかなりようがない
年を経てみればそのことは否応なくわかってくる

そして自分が自分になろうとするとき必要なのは
まさに生きて行く時間のプロセスなのだ
そのためにはそれなりに
「時間を掛ける」ということが不可欠となる

吉田健一曰く
「人間には成熟すること自体の他に目的がない」
つまり成熟にはゴールはなく
それは自分になって行くということに他ならないのだ

気をつけなければならないのは
そのプロセスにおいて
自分から逸れていかないようにするということだろう
（そのためにこそ「時間を掛ける」必要がある）
自分から逸れるとき
成熟とは反対に
未熟への道を歩んでいることになってしまうから




▪吉田健一「早く年取ることが出来ればと……　」
（『作家の老い方』 草思社　2022/9　所収）
▪吉田健一『思い出すままに』
（講談社文芸文庫　講談社　1993/7）
※上記エッセイはその最終章の「XII」

▪吉田健一「早く年取ることが出来ればと……　」
　（『作家の老い方』 草思社　2022/9　所収）
▪吉田健一『思い出すままに』
　（講談社文芸文庫　講談社　1993/7）
　※上記エッセイはその最終章の「XII」

「未熟である状態に最も欠けているのが時間の観念であると考えられる。既に早く年取ることが出来ればと思うことがどこか遠い先に自分が望む自分というものを置くことでそれならば現在は無我夢中のうちに過ぎ、その前後には空白があるばかりである。それでも時はたって行くことを我々は若いうちは知らずにいる・併し時間の経過を意識しないでいる為に時間が止まることはないのでその刻々に自分がいることに次第に気付くようになることで我々は大人の閾に近づく。それは我々がしたいことをするとか無智が知識で少しずつ埋められるとかいうことにも増してであって寧ろ時間の経過に気付くことで自分がしたことや知ったことが初めて自分のものになる。（…）
　年を取ることで変わるのではなくてそれだけ自分になって行くのである。まだ若いうちはその自分というものも不確かでどこまでが自分であるのか解らないのみならずこれを自分が努力する方向に変えて行けるという考えがあるからそれだけ事態が収拾し難い。これを庭前の梧葉風に言えば切磋琢磨という言葉も出来ていてそれが到底やれそうもないことという感じが必ずしもするものでもないので自分と呼べるものがあるのが又先のことになる。併し幾ら努力しても、或は跪いても自分以外のものになることは許されないのでそれが朧気にも頭に染み込んで来て漸く自分がいる辺りが見えて来る。或は少なくともそうとでも言う他ない。」

「若いうちというものが去っていつ人間が年を取って大人になるかということは人間の銘々が自分に即して考える他ないことのようである。今思い出してみると若いうちにこうであると思ったことはただそれだけを取り上げるならば凡て嘘だったという気がする。もし為にするということをそういう意味に用いることが許されるならばそれは何かの為にということがあって思ったことばかりでその仮設の必要がなくなれば直ぐに忘れられた。それが多種多様だったことも嘘の証拠で一人の人間に解ることはそう幾つもあるものでない。或は何れも世界を映して世界に繋る考えというものは人によって形は違っても幾つもあるのではなくていつ頃からのことなのか読むに値するものを書いた人間が言っていることはどれも際立った特色があるものでないことに気が付いた。或る種の味というようなものが共通でさえあって世界というものが一つしかない時にこれはそのことに気付くのに時間を随分掛けたことになる。
　併し時間を掛けるというのは何にでも必要なことであるらしい。」

「人間が成長することで次第に子供の状態から遠ざかって智能その他が複雑なものになるというようなことはない。或はその複雑は人間が生きて行く上で課せられる各種の条件に応じる為の複雑で更に子供というのもそれならば充分に複雑なものなのであってただ大人はその能力を用いることに熟しているだけ寧ろ単純なのである。もし考えずにただ平静な意識で何かするならばその為に精神がどれだけ複雑な働き方をしていてもそれは単純な行為なので意識もそれをそう受け取る。」

「そういうことから老後というのを風雨、波浪に存分に痛め付けられてから達する安息の地、港と考えるのは必ずしも当たっていない。それならばそれは苦労を散々した後である故にもう休んでもいいということになってただ後で少しばかり休めるから苦労することはない筈である。ここでお座なりに頼ることものないので世間並に立身出世とか今日風に何かの形で勲章を貰うとかいうことも人間が成熟し、老成する目的である訳がなくて人間には成熟すること自体の他に目的がない。それは人間であるから人間になることであってそれが簡単なことではないから若いうちというのが長い間続く。その上で人間になってからが余りに短いということがあるだろうか。これはいい思いをするのがなるべく長く続くことを望むということと違っていて今ここにいるというのは今ここにいることであってそのことに長いとか短いということはない。それが終わるのは死ぬ時だからで死に際して思い残すことがあるのはそれまでの成熟の仕方がまだ不充分だったのである。」

☆mediopos-2893　　2022.10.19

フーリエの名をはじめて目にしたのは
ロラン・バルトの『サド、フーリエ、ロヨラ』だったが
そのときサドとロヨラについてはなんとかイメージできたが
フーリエのことはよくイメージできないままだった

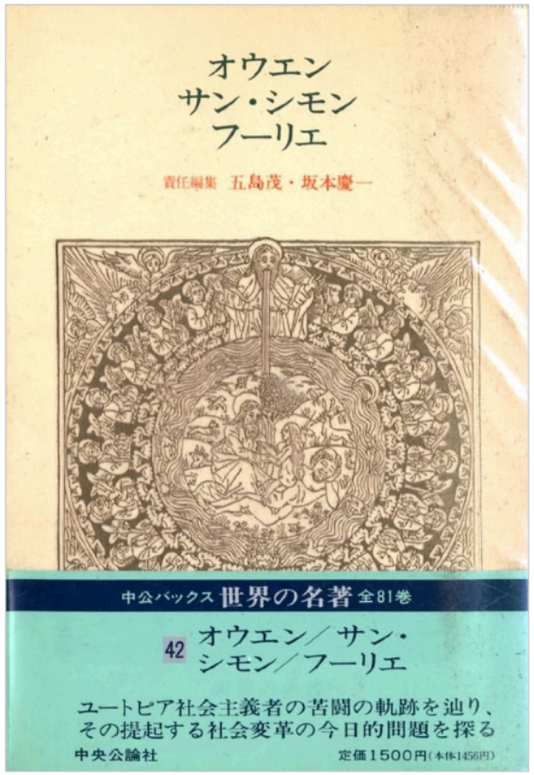
ロラン・バルトがなぜその三人をとりあげたかといえば
それぞれが独自の言語体系を創り出したからだというが
フーリエが創り出したのは
社会的な幸福を追求するユートピアの言語体系である

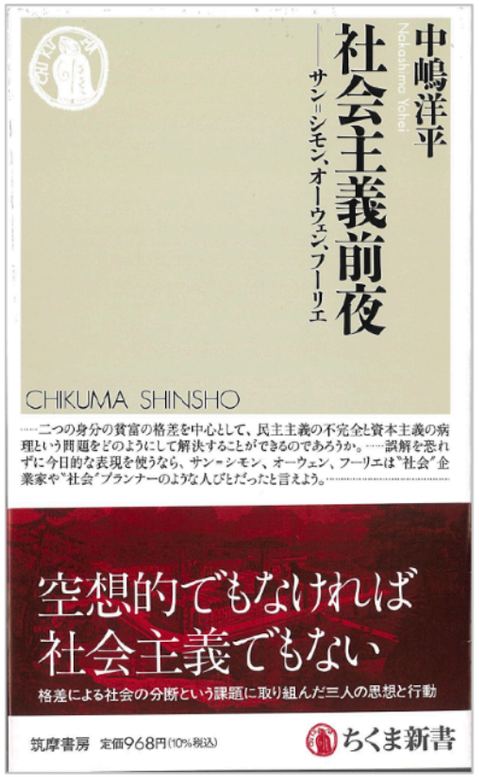
フーリエは
「オーウェン　サン＝シモン　フーリエ」というように
三者がセットで論じられることが多いのだが
それは「空想的社会主義」と呼ばれている

なぜそう呼ばれているかといえば
マルクスとエンゲルスがあの『共産党宣言』において
その三者の名が労働者階級と資本家階級の闘争の
未発達な時期の思想家さらには「空想的」な思想家として
並べられたことからそう呼ばれることになっている

そしてその「空想的社会主義」に対して
じぶんたちは「科学的社会主義」であるというのである

しかし三者は「空想的」であるのではなく
一九世紀初頭
フランス革命と産業革命で荒廃したヨーロッパで
それぞれの立場と視点において
労働者と資本家というように
格差によって分断された社会の諸問題を
どのように建て直していかなければならないのか
そんな問題意識をもって活動した
「〝社会〟プランナーのような人びとだった」
というのが本書『社会主義前夜』の基本的な視点である




▪中嶋洋平『社会主義前夜――サン＝シモン、オーウェン、フーリエ』
（ちくま新書　筑摩書房　2022/10）
▪『オーウェン　サン＝シモン　フーリエ』
（中公バックス　中央公論社　1980/3）

三者の活動によって
その後多義的にとらえられることになる
「社会主義」が結果的に生みだされ
その影響をおそらく多分に受けながら
マルクスとエンゲルスは三者を「空想的」と形容することで
みずからの構想を「科学的」として意味づけかったのだろう
それが「科学的社会主義」ないし「共産主義」である

しかし三者の問題意識やその活動を
「空想的」と呼ぶこともできないし
たしかに「社会主義」としてしまうこともできない

「社会主義」が袋小路のようになった感のある現代において
かつて三者が「社会主義前夜」において
それぞれ取り組もうとした営為のなかから
さまざまな格差等の問題の「種」を
あらためて見いだしていくことが必要だと思われる

▪中嶋洋平『社会主義前夜――サン＝シモン、オーウェン、フーリエ』
（ちくま新書　筑摩書房　2022/10）
▪『オーウェン　サン＝シモン　フーリエ』
（中公バックス　中央公論社　1980/3）

（「中嶋洋平『社会主義前夜』より）

「サン＝シモン、オーウェン、フーリエは「空想的社会主義（utopian socialism）」という表現でよく知られている。世界史や現代社会、あるいは公民といった科目の教科書において、彼らは空想的社会主義の代表的人物として挙げられ続けている。
　また、教科書に登場する対義語のような表現は科学的社会主義（scientific socialism）、あるいは共産主義（communism）で、カール・マルクス（一八一八〜八三年）とフリードリヒ・エンゲルス（一八二〇〜九五年）によって構想された、となっている。
　社会主義にも「空想的」と「科学的」の二つがあるというわけだが、字面だけ見て考えるなら、ふらふらとして地に足のつかない「空想的」に対して、しっかりと構築された理論を持った「科学的」というイメージが湧いてくるだろう。あるいは、「空想的」な状態で生まれた未熟な「社会主義」が「科学的」なものに成長した、というストーリーが頭の中に描かれるだろう。
　ところが、サン＝シモンもオーウェンもフーリエも、社会主異議を打ち立てようとか、社会主義のために戦おうとか、そんなことをまったく考えもしていなかった。そもそも、三者は同じ時代を生きていたというだけであって、社会主義のために一緒に仕事をしたという事実はなかったのである。
　実のところ、社会主義という表現とは、サン＝シモン、オーウェン、フーリアの周辺の人びとや、三者よりも後の時代の人びとがそう呼ぶようになったことで生まれたにすぎない。
　空想的という言葉もまた、科学的社会主義とも共産主義者とも名乗ったマルクスとエンゲルスがそのように表現したのである。サン＝シモンもオーウェンもフーリエも、自分たちの構想を空想的であると考えていたわけではない。」

「一九世紀初頭にサン＝シモン、オーウェン、フーリエが思想活動や実践活動を開始したことで、社会主義という思想系譜が生まれたことは紛れもない事実である。そして、マルクスとエンゲルスは先駆者たちの構想を批判的に検討しながら、科学的社会主義とも共産主義ともマルクス主義とも呼ばれる自分たちの構想を確立していった。

「もっとも、こうした三者のあり方、あるいは行動にゆいて、マルクスとエンゲルスは否定しているわけではなく、社会主義のさきがけとして評価している。三者の思想や行動があったからこそ、社会主義という思想系譜が生まれたからである。しかし、それらを「空想的」や「実現不可能な」を意味する表現で形容することで、マルクスとエンゲルスは自分たちの「科学的社会主義」を社会主義社会の実現を可能にするもっと優れた思想だと示した。」

「誤解を恐れずに今日的な表現を使うなら、サン＝シモン、オーウェン、フーリエは、〝社会〟プランナーのような人びとだったと言えよう、
　工場経営者であったオーウェンの場合、資本家と労働者の貧富の格差や労働者の悲惨な生活を目の当たりにしながら、実際に企業経営の実践をとおして労働者の境遇の改善を進めた。そのようにして、資本主義社会の矛盾を解消しようと行動した点で、社会企業家のさきがけのような人物であった。
　また、サン＝シモンとフーリエの場合、それぞれの生まれ育った境遇は大きく異なるが、両者ともに上述のような社会問題を解決するために、著作の刊行という思想活動をとおして社会のあるべき理想像とその実現方法を広く世の中に提示していった点で、社会プランナーと呼んでよいような人物であった。フーリエが多様性を持った人間の包摂と共生を可能にする協同体を構想する一方で、サン＝シモンは資本家と労働者の融和を実現しようと、自由な産業活動をとおして生まれる新しい宗教のあり方を構想した。

（･･･）

　ところが、サン＝シモン、オーウェン、フーリエによって社会主義という思想系譜が生まれた後、この三者の本来的な思想と行動とは必ずしも一致するわけではないままに社会主義が大きく発展していった。したがって、三者に近い立場から社会主義を捉えるのか、三者を「空想的」と形容したマルクスとエンゲルスに近い立場から社会を捉えるのか、あるいは他の思想家の立場から社会主義を捉えるのかによって、社会主義の解釈は大きく変化する。社会主義は実に多義的なものとなってしまったのである。」

「貧富の格差を完全に消滅させることは不可能であっても、せめて労働環境を整備したり、貧困層の境遇を改善したりと、理想に近づこうとすること自体は不可能ではない。むしろ、どんな理想も掲げられない世界では、現状の問題が問題として認識されていないのだろうし、誰もが現在を改善することを意識していないのだろう。それは実に不幸な状況と言えよう。
　「空想的」であることは、社会を変えていくために必要な姿勢なのである。」

「サン＝シモン、オーウェン、フーリエの構想はマルクスとエンゲルスの構想に比べれば、構築されているとは言い難い。
　経営実践をとおして労働者の境遇の改善を進めるとともに、私有財産制度を基礎とした資本主義の矛盾を解消する方策として、労働協同体という理想の実現を目指したオーウェン。このようなオーウェンを批判しながら、多様性を持った人間を包摂して共生させる「ファランジュ」という名の理想社会を構想したフーリエ。はたまた自由な産業活動をとおして生まれる道徳を新しいキリスト教に昇華させたうえで、その下での資本家と労働者の融和を構想したサン＝シモン･････。
　いずれの人物もが、目の前に現れた新しい「社会」とそこで生じている貧富の格差といったさまざまな問題をなんとかしたいという強い思いを持っていた。ただし、そうした強い思いから生まれた構想が資本主義の矛盾を解消できるかといえば、それは決してかんたんではなかった。
　とはいえ、二〇世紀におけるソ連を中心とした東側諸国での社会主義建設の実験と失敗を、あるいは革命という大変動によって生みだされた多大な犠牲を踏まえながら、二一世紀の現代を生きるわれわれは目の前の「社会」をなんとかしたいという強い思いを持つことによって、ひとつひとつの問題の解決を目指していくしかないだろう。」

「一％の富裕層による富と利益の独占が問題視され続ける二一世紀とはいえ、今さらソ連の政治体制を復活させるわけにはいかず、あくまでも資本主義を基軸として社会をどうにかして持続させていこうとするとき、サン＝シモン、オーウェン、フーリエの社会を前にした思想と行動はわれわれにとって見習うべきでありこそすれ、無視できるものではないのである。」

☆mediopos-2894　　2022.10.20

ひとの心を知ろうとする
その「ゲームにはゴールがない」

わたしたちは切に
ひとの心を知りたいと思うことがある
けれど確実に知ることはできない
どこまでいっても不確実性とともにあるのだが

懐疑論者がひとの心に到達しえないにもかかわらず
それを求めてしまう「ゴール」そのものが
そこには存在していない

ひとの痛みを知ろうして
「神経を直結して、痛みをすべて自分の痛み」
「にすることが仮にできたとしても」
それはおそらくひとの痛みを
確実に知ることにはならない

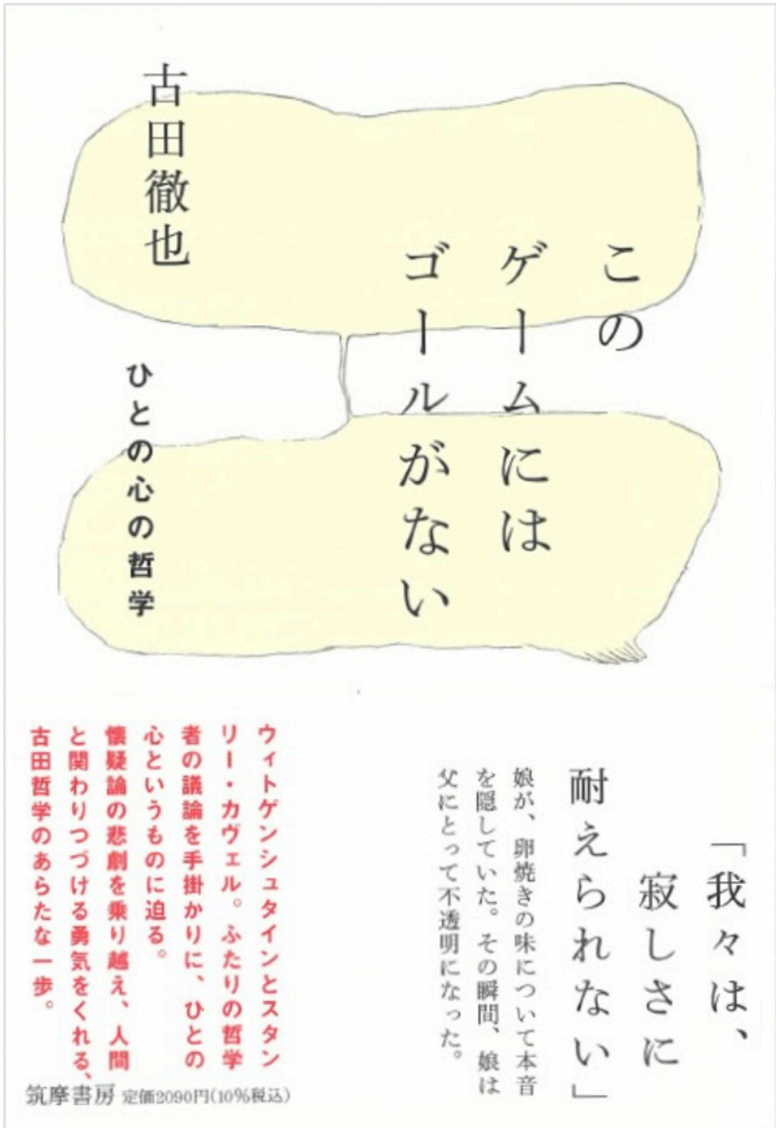
わたしたちは
ひとの心を知りたいと思い
知るためにさまざまな言語「ゲーム」や
言語を超えた「ゲーム」を試みるが
そのなかでの終わらない果てのない試みそのものが
「ゲーム」にほかならないといえる

わたしたちは
じぶんの心を知りたいと思い
知っていると思っていたりもするが
それそのものもまた
じぶんの心を知ろうとする「ゲーム」であり
その「ゲームにはゴールがない」

じっさいのところ
じぶんの心ほど不確実なものはない
そのことをだれもが日々痛感しているはずだ

ひとの心を知りえないということを
「悲劇」だということもできるだろうが
それは同時に「喜劇」でもある
もちろんじぶんの心についても同じである

わたしたちはよくわからないままに
「心」という舞台のうえで
さまざまな「ゲーム」を繰り広げている




▪古田 徹也『このゲームにはゴールがない／ひとの心の哲学』
（筑摩書房　2022/10）

▪古田 徹也『このゲームにはゴールがない／ひとの心の哲学』
（筑摩書房　2022/10）

「人間が誰かほかの人間を求めること、とりわけその他者を理解しようとすること、それは本来、他者の心中を完全に理解しようとすることではない。むしろ、そのような試みは、ある種の自然科学が夢見るように、他者の心から不確実性を奪い去り、透明な機械仕掛けの存在としてのロボットに変えることだ。つまり、近づき過ぎると、かえって他者の心を見失ってしまう。我々は何よりもそのこよを怖れる。我々はたとえば、皆で神経を直結して、痛みをすべて自分の痛み（自分たちの痛み）にすることが仮にできたとしても、それを求めないだろう。他者の痛みを感じることを求めつつも、「他者の痛み」がそれとして存在すること、痛みの概念が不確かさを含むことを同時に求めるだろう。

かといって、他者から遠ざかり過ぎてもーーすなわち、他者を他者として受け入れず、どこまでも不透明な存在として拒絶してもーー、他者の心はそのまま見失われてしまう。全く理解不可能な存在に対しても、我々は心を見出すことができない。つまり、他者の行動を予見することの完全な可能性も不可能性も、心という概念とそもそも相容れないないのだ。むしろ、〈しばしば予見できるが、完全には予見できない〉という意味での予見不可能性にこそ、心的なものに不可欠な特徴を見出すことができる。言い換えれば、他者の透明性と不透明性、その両端の付かず離れずの揺らぎの運動それ自体にこそ、この「心的なもの」という概念の住処があるということだ。

私は、予見不可能性が、心的なもののひとつの本質的な性質に違いないと思う。および、表現の果てしない多様性も。（LW-2.65/365）

それはまた、言語ゲームというものの不可欠な特徴としてウィトゲンシュタインが最晩年に挙げたものでもある。

言語ゲームは予見不可能なものであるということを、君はよく考えなければならない。私が言わんとしているのは次のようなことだ。それには根拠がない。それは理性的ではない（また非理性的でもない）。それはそこにあるーー我々の生活と同様に。（OC:559）

我々の言語ゲームには、理性によって見出せるような確たる根拠が存在するわけではない。それゆえ、規則のパラドックスのような事態は原理的に排除できない。我々のゲームは、むしろそうした、他者が次に何をするか完全には予見できないという点にこそ本質的な特徴がある。たとえば、気まぐれな振る舞いをし、果てしない表現の多様性を有し、我々と言語ゲームができる機械ーー我々はそれを、もはや自動機械とは呼ばないだろう。映画『２００１年宇宙の旅』（一九六八年）の中盤、宇宙船の乗組員に対して嘘をつき、役に立たなくなった機械ＨＡＬ–９０００に、我々が自然と「心的なもの」を帰属させるように。

懐疑論者であれば、他者の心中を確実に知ることーー他者の存在を完全に透明にすることーーこそが我々のゲームのゴールだと言うだろう。そして、このゴールには絶対に到達しえないから、〈推測する〉ことで我慢せざるをえない、と言うだろう。しかし、それは間違っている。そもそも「このゲームにはゴールがない」（BB:54/126）のだ。敢えて、このゲームのゴールないし目的を挙げるとすれば、それは、ゲームを終わらせないことそれ自体である。概念の揺らぎが保たれること、他者が透明性と不透明性の間で揺らぎ続けること、その意味で、他者が半透明であり続けることを、我々は求めているのである。」

【目次】

第一章　他者の心についての懐疑論
　第一節　「秘密の部屋」としての心
第二節　外界についての懐疑論
「なんで分かるの？」という問いが通常意味すること ほか
第三節　日常の生活に息づく懐疑論
「秘密の部屋」として心を捉える懐疑論　ほか

第二章　懐疑論の急所
第一節　懐疑論の不明瞭さ、異常さ、不真面目さ
「知っている」という概念は通常、知らない可能性がある場合にのみ用いられる　ほか
第二節　規準
「規準」と「定義」はイコールではない　ほか
第三節　文法
「文法」とは、我々が概念を用いる際に自ずと了解している前提のことである　ほか
第四節　懐疑論は混乱した思考の産物なのか
「規準」と「文法」による再整理①ー外界についての懐疑論の問題　ほか

第三章　懐疑論が示すもの
第一節　懐疑論の真実、あるいはその教訓 基礎的な概念の一般的な側面に焦点を合わせたウィトゲンシュタインの議論　ほか
第二節　生活形式への「ただ乗り」としての懐疑論
懐疑論へと取り込まれる筋道①ー反懐疑論者は論敵と同じ土俵に乗っている　ほか
第三節　懐疑論への「自然」な道行き
「通常性の問題とは、実践の限界の問題である」　ほか
第四節　「人間的なもの」の発露としての懐疑論
ネーゲルの「不条理」論①ー人間がもたざるをえない二重の視点　ほか
第五節　悲劇としての、他者の心についての懐疑論
他者の心についての懐疑論から回帰すべき日常とは、どのような世界か　ほか
第六節　「他者を受け入れる」とは何をすることか
他者とのすれ違いや相互不信の典型例ー物事の見方のずれと、その発覚　ほか

第四章　心の住処
第一節　演技の習得
子どもが「痛み」という概念を習得するプロセスほか
第二節　子どもが言語ゲームを始めるとき
言語ゲームの習得と心の発達は軌を一にする　ほか
第三節　「このゲームにはゴールがない」
規準の不確実性が心的概念に組み込まれていることが、他者をときに不透明にさせる　ほか
第四節　他者とともにあることの苦痛と救い
他者が遠い存在になることで近い存在になる、ということの内実　ほか

☆mediopos-2895　　2022.10.21

著者の近藤祉秋は
マルチスピーシーズ民族誌と環境人類学の視点から
内陸アラスカ先住民の人々のところで
フィールドワークを行い
人間と自然の関係を問い直そうとしているが

その関係は
「人間中心主義」でも
「生命／生態系中心主義」でもない

現代は人間中心主義によって
環境に対してもさまざまな問題をもたらしているが
そのアンチとして「人間不在」の世界を論じるのは
こうした内陸アラスカ先住民の人々の「生」を
捨象してしまうことになる
どちらも人間と自然の関係としては不毛である

内陸アラスカ先住民の人々が
動植物や精霊そして土地とのあいだで
どのような関係性をもちながら暮らしてきたか
そのありようから
人間か自然かではなく
人間と自然がどのような関係性のもとで生きてゆけるか
その意味での「自然との共生」を問い直すことが課題だろう

「マルチスピーシーズ」とは「多種」
その「多種」とともに生きのびる知恵が問われねばならない
それによって「世界をつくる実践」を行うこと

つまり「ときに重なりあい、ときに反目しあいながら、
諸々の存在が世界への働きかけを通して
新しい存在を生み出したり、また別の存在にとっての
新しい生の条件となっていったりすること」そのものである

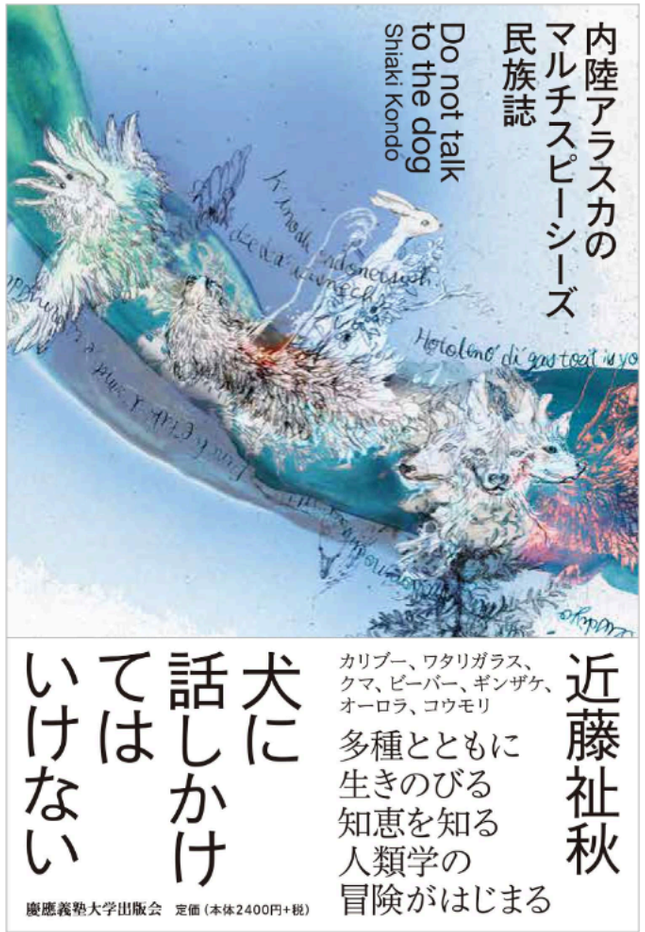
本書のタイトルは「犬に話しかけてはいけない」
となっているがこれは
内陸アラスカ先住民の人々の
「交感しすぎない」「構いすぎない」という知恵を意味している

「一部のエコロジー思想家にとって」
「「自然」と「交感」する人間」は
「近代人が取り戻すべき姿であるかもしれない」のだが
それは内陸アラスカ先住民の人々の知恵とは異なっている

その知恵とは「自然と共生する美しい生き方」ではなく
「他種の間で生きることの煩わしさに
長年向き合ってきた結果として生まれた彼らの構え」なのだ

その知恵は彼らが「共異身体」を生きていることからきている
「多種」とともにそのなかで生きるということは
決して「同化」するということではないからだ
彼らの神話も禁忌もそんな関係性のもとから生まれてきた

彼らの自然との関係性は決して過去のものではない
「その一部は消滅していきながらも、
現在でも語り継がれたり
実践されたりするアクチュアルなもの」であり
その関係性を学ぶことによって
わたしたちは人間か自然かというような「主義」ではなく
あらたな「生」のありようを作り出すための
問いへと開かれる契機を持ち得るのではないだろうか




▪近藤 祉秋
『犬に話しかけてはいけない
／内陸アラスカのマルチスピーシーズ民族誌』
（慶應義塾大学出版会　2022/10）

■近藤 祉秋
『犬に話しかけてはいけない／内陸アラスカのマルチスピーシーズ民族誌』
（慶應義塾大学出版会　2022/10）

「「交感しすぎない」ことが内陸アラスカ先住民の知恵であるとすれば、それは彼らが「共異身体」を生きているからに他ならない。共異身体は、絡まりあいを前提とした、多種の開かれた身体である。北方アサバスカンの人々にとっての「社会」化は、常にすでに共異身体の（共）生成をともなっている。日本から来た人類学徒に生業活動を自分でも実践することを望むのは、彼らの世界での生き方を学ぶことが、常に多種との関わりに開かれていることを意味するからだ。

このような共異身体を生きる人々であるからこそ、「交感」はときに危険をはらむ。自己完結型の身体であれば、みずからは常に認識する人間＝主体であり、その主体のもとにまなざされる「自然」が立ち現れる。他方で、共異身体のもとでは、そのような一方的な主体／客体関係をア・プリオリに想定することはできない。共異身体における主体性は実践の中で一時的にのみ発生するものであり、ある実践が可能となる原因でもあるというよりも、その実践の効果として捉える方がより正確となる。「犬に話しかけてはいけない」という禁忌は、犬の言語能力が〈ワタリガラス〉によって奪われたという神話を背景として、ゴールドラッシュ以前の犬ー人間の関係性を形づくっていた。同様に、兄弟を殺して大空に上がった〈月〉の神話も、「月を見つめすぎてはいけない」という禁忌をともなっていた。このような神話（フゾッシュ）と結びついた形で提示される禁忌（フツァニ）は、犬ー人間や月ー人間がいとも感嘆に「交感」しあってしまうからこそ必要とされていた。犬の場合も月の場合も、過剰な交感が生じると疫病や洪水のような形で人々の死につながる。神話とは必ずしも連動していなかったが、雨雲が人の言葉を聞きつけてしまわないように、雨についての言及を避けるダニエルの態度は一種の禁忌とも言える。禁忌の役割の一つは、過剰な交感から共異身体の集まりを守ることなのではないかと考えられる。ディチナニクの子どもは望ましい特徴を持った動物の部分を身体に接ぎ木されることで成人に近づく一方で、禁忌によって過剰な交感から守られている。これらの習慣は、共異身体を生きる者たちにとってコインの裏表である。

月にまつわる神話と禁忌を紹介した際に、フィリップがアポロ計画に対して怒りを覚えていたことを述べた。それは、宇宙船が月面に着陸することで情緒不安定な〈月〉を怒らせてしまったからだと説明されていたフィリップにとって、月は注意を要する存在であり、必要以上には近づかず放っておくべき存在であった。禁忌によって共異身体を守ることと関連する別の側面は、「構いすぎない」という知恵である。ビーバーダムにすき間を開けることでも、渡り損ねた「残り鳥」を冬の間飼うことでも、重要なのは生きものたちが「世界をつくる実践」をおこなうのを邪魔しないことである。内陸アラスカでの「ともに生きる」ことは、ベストの状態で「世界をつくる実践」に携わることができるような関係性をともに築くことである。一時的な保護や介入につながることはあったとしても、多くの場合、それらは永続的ではない。」

「多種による「世界をつくる実践」は、人間とその子分である他種でどのような世界でもつくりあげることができるという全能感を意味するのではない。この言葉で私が表現したかったのは、ときに重なりあい、ときに反目しあいながら、諸々の存在が世界への働きかけを通して新しい存在を生み出したり、また別の存在にとっての新しい生の条件となっていったりすることである。だからこそ、人々は自己完結しえない。「自然」と「交感」する人間は、一部のエコロジー思想家にとって、近代人が取り戻すべき姿であるかもしれないが、私がフィールドで目の当たりにしたことの一つは、自己完結しないがゆえの煩わしさであった。もし私たちが荒らすか先住民の生き方から何かを学ぼうと思うのであれば、それは「自然と共生する美しい生き方」ではなく、他種の間で生きることの煩わしさに長年向き合ってきた結果として生まれた彼らの構でえあるべきだと私は考える。」

「私は人間中心主義でも生命／生態系中心主義でもない第三の道を探ることを目指したい。管見では、絡まりあいを考えることは、人間が中心か、生命や生態系が中心かという二択（もしくは三択）の問題ではない。むしろ、中心ー周辺の階層的な秩序が成り立たないような状態こそが絡まりあいではないか。ポストヒューマニティーズに対する批判として、「人間」を捨象してしているというものをよく耳にする。確かに一部の論者は「人間不在」の世界を論じるようになってきたし、「人間」に対する不信感を告白する者もいる。しかし、本書では「人間」中心主義に異議を唱えながらも、具体的な（共異）身体を生きる人々を決して置き去りにしたつもりはない。人間中心主義への批判は往々にして生命中心主義や生態系中心主義に改宗されてくが、もしその批判はそこに生きる人々の生を捨象することにつながるのであれば、「人間」中心主義と同様に、もしくはそれ以上に暴力的である。本書では、他種の絡まりあいから創発し、共異身体として生きる「デネ＝人々」を考えることで、自己完結的で常に認識主体として「自然」を分節化するような「人間」中心主義から離れる道を模索しながら、人々の生を捨象してしまわないように注意を払った。」

「読者の中には本書で論じた知恵がもうすでに賞味期限が切れているのではないかという意見を持つ人もいるかもしれない。人新世を生きる私たちにとって、今さら内陸アラスカ先住民の人々が動物や土地といかに付きあってきたかに関する説明や彼らの神話・禁忌のたぐいについて知ったところで何の役に立つのであろうか。確かに本書は人新世に対する解決策を直接的に示すことを目指すものではない。本書で提示できたのは、内陸アラスカ先住民がさまざまな存在との付きあいの中で育んできた知恵に関するものにすぎない。他方で、本書で扱った事例（とくに神話や禁忌）は滅びるのを待つ過去の遺物ではなく、ぞれぞれの人々による試行錯誤を経て、新地代謝をくり返していく。その一部は消滅していきながらも、現在でも語り継がれたり実践されたりするアクチュアルなものである。」

「フリップは、先祖から伝えられてきた予言として、いつか村外から運ばれてくる「白人の食べもの」（おもに加工食品）が来なくなってしまい、人々じゃ自給自足の生活に戻ることになると語っていた。究極的には信頼に値しないものである。だからこそ、フィリップや彼の親族たちは、森や川の生きものたちとの交渉が楽しいときばかりではなく、ときに煩わしさを含むものであったとしても背を向けることはない。人新世をどう生きのびようと思うか、それはあなた次第だ。」

【目次】

はじめにーーある日の野帳から

第1章　マルチスピーシーズ民族誌へようこそ
現代人類学への道
マルチスピーシーズ民族誌の誕生
人新世と環境人文学ーーマルチスピーシーズ民族誌との関連から

第2章　ニコライ村への道のり
ニコライ村
フィールドワークの始まり
本書のおもな登場人物
個人主義的な人々？
徒弟的なフィールドワーク
フィールドワークの身体性

第3章　ワタリガラスのいかもの食い——ある神話モチーフを考える
トリックスターとしてのワタリガラス
神話は子育てによく効く？
犬の屠畜とワタリガラス神話
犬屠畜モチーフが他地域からもたらされた可能性はあるか？
〈ワタリガラス〉の犬肉食は、動物行動学で説明できるか？
〈ワタリガラス〉の犬肉嗜好モチーフは修辞戦略としてみなしうるか？
多種の因縁を語る神話

第4章　犬に話しかけてはいけない——禁忌から考える人間と動物の距離
ある禁忌の語りから
運搬・護衛・狩猟
犬ぞりの受容と二〇世紀初頭の変化
犬ぞりの現在
犬ー人間のハビトゥス

第5章　ビーバーとともに川をつくる——「多種を真剣に受け取ること」を目指して
ビーバー論争
生態学・生物学と対話するマルチスピーシーズ民族誌
ビーバーとディチナニクの人々の関わり
ビーバーダムとギンザケ
ビーバー擁護派と反対派の二項対立を超えて
キーストーン種とともに考える
マルチスピーシーズ民族誌が目指すこと

第6章　「残り鳥」とともに生きる——ドムス・シェアリングとドメスティケーション
ドメスティケーションの周辺から考える
野鳥の餌づけ・保護・飼育
「残り鳥」と住まう
野鳥とのドムス・シェアリング
ドムス・シェアリングとドメスティケーション

第7章　カリブーの毛には青い炎がある——デネの共異身体をめぐって
北方アサバスカンの身体
共異体と社会身体
サイボーグ・インディアン
カリブーの民とオーロラ
巨大動物と超自我
ぬくもりの共異身体

第8章　コウモリの身内——環境文学と人類学から「交感」を考える
悪魔からロールモデルへ
目的としての「交感」と実用的な「交感」
生きものとの会話と非会話
「交感しすぎない」という知恵

おわりにーー内陸アラスカ先住民の知恵とは何か？
マルチスピーシーズ民族誌の射程
各章の概要
アラスカ先住民の知恵
第三の道を探る

あとがき
注
初出一覧
図版一覧
動物の名称一覧
参考文献一覧
索引

☆mediopos-2896　　2022.10.22

mediopos2822（2022.8.9）で
同じ著者・上野 誠の『折口信夫「まれびと」の発見』を
とりあげたことがあったが

NHKテキストはそれをダイジェストした放送用の内容で
今回とりあげたのは
前著の「第七章 日本の芸能のかたち 」に関連した
「第３回　ほかひびとの芸能史」から

折口信夫は芸能者を
「聖と賤が表裏一体となった存在」とみて
その「賤」の側にいる芸能者の価値を見出し
それが日本文化に深い影響を与えているとしている

いわゆる「無頼漢（ゴロツキ）」
そして「かぶき者」
「悪所」といわれる場所も
そうしたものと関連して機能していた

現代では「除菌」が常識化されているように
「芸能」と深く関係している「賤」を
表の世界から排そうとする力が強く働いている

本来的にいって
光と闇が表裏一体であるのと同様に
聖と賤も表裏一体なのだが
それが表向き隠されているのが日常の世界で
その偏った世界を非日常的な有り様のなかで
バランスさせてくれるのが
「芸能」の世界であるともいえる

現代のように「芸能」の世界のなかにも
日常の道徳観が持ち込まれてしまうようになると
そこにあった「闇」は行き場所を失ってしまう

けれどもそれらは表向き消えているように見えても
これまでよりも巧妙なかたちで
あるいは見えない危険な場所から
むしろ強く働くようになってしまう

それは管理社会のなかで
魂が知らないあいだに闇を彷徨うように
スポイルされてしまうこととや
「除菌」社会のなかで
免疫力が失われてゆくことと通底している

きれいは汚い
汚いはきれい

その箴言ともいえることばに象徴される
聖と賤をそのままに体現するような
「芸能」的な有り様が
表社会から消去されてしまうとき
わたしたちはそれと知らず不治の魂の病に
冒されてしまうことにもなるのだろう

▪上野 誠『折口信夫『古代研究』』
（2022年10月　NHKテキスト　NHK出版　2022/9）

▪上野 誠『折口信夫『古代研究』』
（2022年10月　NHKテキスト　NHK出版　2022/9）

（「第３回　ほかひびとの芸能史」より）

「折口信夫は、芸能者を「聖と賤が表裏一体となった存在」と見ていました。神を演じ、人に祝福を与える存在であると同時に、「下級の宗教者」として、時に差別の目にさらされました。ある面では「あこがれの対象」なのですが、それがある瞬間に反転してしまう。この点については、現在の芸能人にも似た構図があります。例えば、大人気のタレントのスキャンダルが発覚した途端、ゴシップの種として消費されてしまうような例を想起させますね。
　いずれにせよ、折口は、芸能にはさまざまな側面があると考えていました。だからこそ、「賤」の側にいる芸能者の価値をも認め、彼らが日本文化の中で果たした役割に注目した。この点にこそ、折口学の極めてユニークな特質があると、私は思います。例えば、『古代研究』には、そのものずばり「ごろつき」に言及した文章があります。

　　無頼漢（ゴロツキ）などゝといへば、社会の瘤のようなものとしか考へて居られぬ。だが、嘗て、日本では此無頼漢が、社会の大なる要素をなした時代がある。のみならず、芸術の上の運動には、殊に大きな力を致したと見られるのである。（「ごろつきの話／一　ごろつきの意味」全集③二二頁）

　「ごろつき」という語には、一定の住所も職業もなく、あちらこちらをうろつき、時に脅しを働くような「ならず者」という意味があります。一般的に、ごろつきは、室町時代から江戸時代にかけて存在したならず者たちと考えられていましたが、折口はもっと長い歴史を持つものとして捉え直し、時代時代で姿を変えながら社会を動かし、芸能や文学を生み出す原動力となっていた人びとだ、と評価しました。そして、単なる無頼漢としてだけでなく、下級の宗教者や、歌舞伎として昇華する「かぶき者」にまで、「ごろつき」という語の指す範囲を広げていったのです。
　動詞「かぶく」は、もともと傾けることをいう言葉でした。つまり、中庸ではなく、右なら右、左なら左に大きく傾くことをいうのです。それを、生き方の信条としたのが、「かぶき者」です。世間の目を気にすることなく、派手な衣装を身にまとい、荒々しい振る舞いをする者が、「かぶき者」です。一方で、世間体や金銭にとらわれることなく、恋や色事を極める生き方、自分が犠牲になっても正しいことを貫く生き方を求めてゆくのも、「かぶき者」です。いわば、反抗的な生き方をする人びとなのです。
　このような「かぶ」いた生き方を舞台で見せるのが、「歌舞伎」なのです。現在でも、いろいろとゴシップはありますが、昔に比べれば、今の歌舞伎役者さんたちは、品行方正になったと私は思います。歌舞伎は、生き方そのものを観客に見せる芸ですから、時には破天荒なことをして、私たちを楽しませてほしいと思います。
　また、階級社会においては、下の階級の者が、上の階級の者に対して反発する気持ちを持っているのは当然です。折口は、その反発心を示す方法の一つとして芸能というものが機能した、とも考えていました。
（…）
　無頼の徒たちの芸能、すなわち権力に抗う者たちの芸能は、上からの圧力に対抗する中で生まれた情熱をエネルギーとして駆動されていた、というのです。この上下関係が調和してゆくのに伴い、彼らの芸は一気に輝きを失ったと折口は考えていました。ある種の危うい状況の中でこそ無頼の徒たちの芸は輝く、ということでしょう。彼らにつきまという闇の側面をも含めて、折口は、芸能を理解していたのです。折口信夫の芸能史の根底には「ごろつき」「かぶき者」「無頼の徒」への、深い深い理解と、愛情があるのです。」

「かつて寄席が「悪所」と言われたように、芸能はそれまで学問的な視点で論じられる対象ではありませんでした。むしろ、下賤なものとして蔑視されていた。それを折口は、日本人の心や文化にとって価値あるものとして再定義し、芸能評論という分野を切り拓いたのです。折口の弟子たちの中には、戸板康二や伊馬春部など、芸能評論家や放送作家となって活躍した人物もいます。これまで見てきたように、芸能史は、国文学の発生の延長線上にあるものなのですが、折口学の特性がいかんなく発揮せられた分野といえるでしょう。」

☆mediopos-2897　　2022.10.23

もともと政府もメディアも企業も
オープンであったためしはなく
隠したい情報は秘密にされたまま
「ブラックボックス」のなかにあり
数多くのフィルターの通された情報しか
開示されることはないが

インターネットが普及した現在の
「情報と金融をコントロールする
隠されたアルゴリズム」の世界では
私たちはますます巧妙な仕方で管理化され
「ブラックボックス化」が進んでいる

著者のフランク・パスカーレは
その「ブラックボックス」の内部で
行われているさまざまな「悪行」を
明るみにだすための制度を築こうとしているが
（本書の原書が刊行されたのはすでに七年前）

とくにここ数年の
政府・メディア・企業の情報の
「ブラックボックス化」による
監視社会化は激しさを増している
しかもその方法は「隠されている」というよりも
むしろなりふり構わないほどあからさまでさえある

少しばかり情報へのリテラシーがあれば
疑ってしかるべき場合でも
とくに日本のような
「教育」の行き届いた
教えられたことを信じやすい人びとは
とくに教育程度の高いとされる人たちほど
開示され指示された情報に対して
疑うことさえしないまま従順に従ってしまう

▪フランク・パスカーレ（田畑暁生訳）
『ブラックボックス化する社会／
金融と情報を支配する隠されたアルゴリズム』
（青土社　2022/6）

そういう人たちにとって
「ブラックボックス」はむしろ
「ブラックボックス」のままのほうが
じぶんで考えなくても良い分好都合なのかもしれない

そしておそらくそれは
ある種の「善良さ」に由来している
そこには「知る必要性」などなく
「みんなで渡ればこわくない」のである

おそらく現在のような状況は
ある種の破壊的なものとなるまで
つまり「みんなで渡ったけれどこわくなった」
ということになるまで
変わることはないのかもしれない

そしてそのときはじめて
メディアも政府も企業も
変わらざるを得なくなるのだろうが
いまはまだ「みんなで渡ればこわくない」と
危険な道を渡ろうとしているようにしかみえない

▪フランク・パスカーレ（田畑暁生訳)
『ブラックボックス化する社会／
金融と情報を支配する隠されたアルゴリズム』
（青土社　2022/6）

（「第１章　序ーーーー知る必要性」より）

「強力な企業や金融機関、政府組織が「不開示合意」「適切な方法」「言論統制法」等のもとで自らの行動を隠しているのに対し、市民の生活は徐々に裸にされてしまっている。私たちのオンラインでの行動はすべて記録されている。そのデータが誰に、どのくらい開示されるのかといった問題が残っているに過ぎない。匿名化を行うソフトウェアは多少の扶けにはなるが、「隠れよう」とする行動自体が、監視当局にとっては目印となっているのではないか？　監視カメラや、データ業者、センサーのネットワーク、「スーパークッキー」等が、私たちの運転速度、飲んでいる薬、読んでる本、訪れたサイトなどを記録している。法律は、ビジネスの世界での営業秘密を守ることには熱心だが、個人のプライバシー保護については比較的寡黙なのである。
本書が焦点を当てるのはこの不均衡である。(･･･)
私たちはまずこの問題を十分に理解しなければならない。「ブラックボックス」という言葉はそのために有用なメタファー（隠喩）であり、それ自体二重の意味を持っている、一つは、飛行機や列車、自動車などが搭載している、データ記録機器である。そしてもう一つ、入力と出力は観察できるが内部の仕組みがわからない、ミステリアスな装置をも意味する。私たちは日々、この二つの意味に直面している。企業や政府によって行動を追跡されるが、その情報がいったいどれほど遠くまで運ばれ、どのように利用され、どんな結果をもたらすのか、私たちにはまったく明らかではない。」

「知識は力である。自分を隠しながら他者を観察できれば、それは最も強い力となる。企業は観客や従業員になり得る人の詳細な個人データを得ようとするが、企業自身の統計や手続きに関する情報は、当局に対して必要最小限しか開示しない。ネット企業は利用客についてますます多くの情報を集めているが、その記録に対して利用者が権利を行使しようとすると、規制と争う姿勢を見せる。」

「ビッグデータのブラックボックスを解明するのは容易なことではない。ＩＴ企業や金融機関がその手法を進んで開示しれくれたとしても、理解するのが難しいのである。従業員の生産性、ウェブサイトの関連性、投資の魅力などに関わって彼らが出した結論は、多数のエンジニアが導出した公式によるものであり、法律家たちによって守られている。
本書において私たちは、ブラックボックスを閉じておくための主要な三つの戦略について探求する。その三つとは、「実際の」秘密、法的な秘密、そして「不明瞭さ」である。「実際の秘密」は、隠れたコンテンツと、それへの承認されないアクセスとの間に、障壁を建てる。私たちがドアに鍵を掛けたり、メールをパスワードで保護したりするのと同じである。法的な秘密とは、ある種の情報を秘密にしておく法律上の義務がある事柄である。（･･･）「不明瞭さ」とは、秘密が明かされねばならない時に、それを何とか誤魔化そうとする試みに関わる。」

（「第５章　観察者を観察する（そして改良する）」より）

「ネット企業と金融機関は、私たちの情報経済の基準を定めている。これまで彼らはその力を、商業世界を詳しく理解することに使ってきた。グーグル設立者の一人でありセルゲイ・ブリンはかつて、「完全な検索エンジンは神の心に誓い」と述べた。グーグルが地図、電話ソフト、ひいてはホーム・マネジメントに投資するにつれ、グーグルの見る、聞く、追跡する、感知するといった力は成長する。データ業者も同様のゲームを行っており、私たちについての情報を束ねている。取引パターンを即自に、包括的に知りたいフラッシュ・トレーダーから、戦略的に重要企業のハブに位置する「専門家ネットワーク」まで、ウォール街の「知りたいという欲望」も空前だ。ライバルより多くを知ること、あるいは、ライバルよりただ早く知ることが、巨大な収益を生むカギになる。
しかしもし、経済上での成功が「情報の優位」よりも、「生来の生産性」に基づいていたとしたらどうであろうか？　何を生産する「べきか」という実質的な判断から離れ、ウォール街やシリコンバレーが財やサービスに対して置く神秘的な価値付けに、私たちは導かれてきた。しかし、中立で客観的とされる彼らのアルゴリズム・メソッドは、富と注目に関するある種のヒエラルキーを強化する方に、予想通り偏っている。」

（「第６章　知的な社会に向けて」より）

「依然として秘密を尊重する風潮の中で、悪い情報が良い情報として通用したり、その結果として不公正で、ひどい場合には破壊的な予測がなされたりする。だからこそブラックボックスによるモデル化を広く利用することは、たとえそれがモデルを操る内部者によっては利益が上がるとしても、社会全体にとっては危険なのだ。無実の人が傷つけられることがある。抗弁できない。あるいは知らされることさえないかもしれない不正確な情報によって、何も悪くない人が「安全への脅威」「給与泥棒」「信用リスクあり」といったレッテルを貼られる可能性がある。不公正もしくは不適切な思考がアルゴリズムの力と結びついて失敗すると、モデル化は一層悪い影響をもたらす。」

「テクノロジーのオープンな利用は、公約としては難しい。米国政府は監視テクノロジーを市民に向けるのではなく。私たちのために、企業の貪欲や浪費をモニターする用途に使うことができるはずだ。テクノロジーや金融において人々の選択肢が広がることは、私たちの社会をより公正に、より分かりやすくするだろう。「真に人間的な目的を欠いた、非人間的な経済」に自分を合わせるのではなく。いかにして組織を、株主の価値の最大化かた、より高次の目的へと変えることができるかを問うてみよう。確かに威厳やデュープロセス、社会的正義を求めることには議論が付きまとう。既得権益を他人に分け与えたくない人々もいるだろう。にもかかわらず、金融や通信のインフラについての重要な意思決定は独立した評価者の目に晒すべきだと、私たち市民は要求する時である。さらに、一年なり一〇年なりしかるべき時が過ぎた際には、市民全員が見ることのできる公的な記録として残すべきである。
ブラックボックス化したサービスは、驚異的に見える。しかしブラックボックス社会は、危険なほどに、不安定、不公正、非生産的なものだ。ニューヨークのクオンツも、カリフォルニアのエンジニアも、堅実な経済や安全な社会を築くことはできない。それは市民の仕事である。市民はそこで賭けられているものを理解してはじめて、この仕事を遂行することができるのである。」

（「訳者あとがき」より）

「著者が本書で問題にするのは「ブラックボックス化」、すなわち、一般人には中を見通せない秘密の意思決定やアルゴリズムが、金融機関やネット企業で多用され、普通の人々の人生に大きな影響を与えてしまっているという事態だ。原書の出版は七年前で、内容も基本的には米国が対象だけれど、日本においても禁輸資本やＧＡＦＡの支配は同じように強く、日本でも多くの人に是非読んでもらいたい内容である。
巨大金融機関の幹部は、儲かればボーナスや株式などで多額の報酬を手に入れ、金融危機に陥っても政府資金で救済され、役員個人は退職金を奪って逃げてしまう。彼らはどちらに転んでも損はない。その陰で、住宅ローンが払えなくなり露頭に迷う庶民が続出した。「邪悪になるな」という理想を掲げていたグーグルがライバルになり得る企業の検索順位を落としつつロビー活動に精を出し、人々をつなぐことを理想としていたフェイスブックが人新を操ったり、権力の手先になったりする。アップルはアプリを承認するかどうかの詳細な基準を明かさないし、アマゾンの「おすすめ」アルゴリズムも謎に包まれている。ブラックボックスの内部で行われている悪業に対して、それを何とか明るみに出すための制度を築き上げようとする著者の努力に、私も大いに共感している。」

☆mediopos-2898　　2022.10.24

フロイトの精神分析では
とくにその草創期においては
エディプス・コンプレックス論のように
男性が主体(=能動)で女性が客体(=受動)である
という構図で理論化がなされていたが

とくにフェミニズムにおいては
それに対立するかたちで
男性中心主義が批判されてきた

そしてそこに「ジェンダーの戦争」が
展開されることにもなったのだが

本書の著者ジェシカ・ベンジャミンは
「好戦的フェミニスト」とは根本的に異なっている

「私は、ジェンダー対立という
フェミニズム批評のやり方を採用しつつも、
フェミニズムが批判している二元論を、時として
フェミニズム批評自身が強化することにもなっていると、
はっきり認識している」というのである

男性と女性の位置を逆転させても
それは相手に成り代わろうとして
あらたな戦いを呼び込むだけで
基本的な構図が変わるわけではなく
不毛な戦いが続くばかりである

しかもどちらの論戦も
「男は○○」「女は○○」というように
対する性をきわめて類型化していることも多い
そのことはみずからが属していると思っている性をも
類型化してしまっていることになる

男–女というだけではなく
さまざまな性的傾向をもっている場合でも
そうした類型化された「戦争」は終結することはない

極論をいえばある種の傾向性はあったとしても
性はひとの数だけあるともいえる
「私」の性的傾向は常に類型化を逸脱している
私が男性であり女性に対する性的指向があったとしても
すべての女性にその指向を持つわけではなく
ほとんど限られたかたちでしかその指向は成立しない
つまり「あなただから私はあなたを愛する」のである

ジェンダー論にかぎらず
重要なのは「他者」のとっている立ち位置に対して
否定的になるのではなく
「他者をわれわれの内に持つ」ことだろう
「他者」を頑なに否定し差別・迫害するのは
みずからの内に「他者」を持ちえないからだ

多くの場合「戦争」は
「他者」をみずからと
「同一化」させようとすることから起こる
「同一化」させようとしないとき
「他者」はそこにいるが
みずからの「影」のような
「私」に敵対する脅威の存在ではない

「他者をわれわれの内に持つ」とき
その「他者」はすでに「私」を害する存在ではない
「戦争」するとすれば外的な「他者」とではなく
みずからの内なる「他者」との戦争となる

常に闘争的な人は
みずからの「影」を「他者」に投影し
その「影」と闘わざるをえない存在なのだ

▪ジェシカ・ベンジャミン（北村婦美訳）
『他者の影――ジェンダーの戦争はなぜ終わらないのか』
（みすず書房　2018/11）

▪ジェシカ・ベンジャミン（北村婦美訳）
『他者の影――ジェンダーの戦争はなぜ終わらないのか』
（みすず書房　2018/11）

「さまざまに異なる声たちが、競い合いながらも発話の主体という立場に登りつめると、それは自己を汚染したり再び呑み込もうとする脅威的なアブジェクトになるよりもむしろ、外部の他者という立ち位置をとれるようになる。
　こうした形の包摂を受け入れることは、どんな声であれ（たとえそれがかつて排除されていた他者の声であれ）それを絶対化しようとしたり、あるいは他者を（たとえその他者自身が相手を黙らせようとする者であっても）黙らせようとしたりするような、全体主義的強要をはばむための前提条件だ。このことはまさに主体としての自己が、内なる他者の声も含めて、みずからのすべての声たちに発言を許すことができ、また実際に許しもする状態を意味する。他者をわれわれの内に持つことは、外なる他者の脅威を小さくする。だから外界の異人はもはや、われわれの内なる異質なるものと同一ではなくなる――――それはもうわれわれ自身の影でも、われわれにおおいかぶさる影でもなく、別個の他者だ。その人自身の影が光の中で、はっきりと識別できるような。他者なのである。」

（北村婦美「解説」より）

「本書は、米国の精神分析家ジェシカ・ベンジャミンによるShadow of the Other:Intersubjectivity and gender in Psychoanarysis(Routledge,New York,　1998）の全訳である。副題からもわかるとおり、本書はいわゆる「ジェンダー論」の一つであるには違いないのだが、訳者が本書をぜひ日本語で紹介したいと考えたのは、それがこれまでとはまったく異なるスタンスで書かれていた本だからであった。
　私たちはいま男性であること、女性であること、あるいはそういう従来的な枠組みに完全にあてはまらないと感じることを含めて、望むと望まざるとにかかわらず、男女という枠組みをめぐる困惑や疑問や競争と無縁に生きてはいない。けれども多分私たちの多くは、そうした困惑や疑問は論争とできれば無縁に生きたいと思っている。なぜならそれらと無縁でないということは、私たちのもっとも身近で個人的な、ささやかな生活圏が乱され、平和でなくなるということを意味しているからだ。
　女性たちは、女性の権利を拡張するために闘わなければならないのだろうか？　男性たちは、それに対してすでに所有している諸々のものを守るために、当然反撃に出なければならないのだろうか？　そうしてまた、既成の男女の枠組みに完全にはあてはまらないと感じている人たちも、自分たちの存在にある名誉を与え、その名を名乗り出て権利の拡張に努力しなければならないのだろうか？
　こうした権利拡張の要求どうしがぶつかりあう状況をもし「ジェンダーの戦争」と呼ぶなら、ベンジャミンが本書で試みていたのは、その戦いに参加していかに効率的に敵陣を論破するかということではなく、この戦いの状況自体に光を当て、なぜそれが終わりのない応酬に陥ってしまうのかを冷静に考察することであった。」

「ベンジャミンが（好戦的フェミニストと）根本的に違うのは、そうしたこれまでの論法では問題の解決にはならないことを、はっきりと明言していることである。
　彼女は最初の代表的著作『愛の拘束』の冒頭で、次のように述べている。

　　従来の精神分析学の思想に挑戦するというのは、フェミニズとたちの一部が信じているように、フロイト派の性的ステレオタイプや「偏向」は、社会的に構築されたものだと主張すれば済むということではない。同時に、男と違って女は「穏やかな生きものだ」と主張することで、フロイトの人間本性観に反論すれば良いという問題でもない。私は、ジェンダー対立というフェミニズム批評のやり方を採用しつつも、フェミニズムが批判している二元論を、時としてフェミニズム批評自身が強化することにもなっていると、はっきり認識している。

　男性性をおとしめ女性性や母性を持ち上げるような主張（男性と違って「女性は自然、平和」だといった主張）をしたり、男性中心主義を打開するために女権拡張を訴えても、それはこれまでの上下関係を転覆し逆転させようとする働きかけにすぎず、上下関係という構造そのものは変わらない。それはまたバックラッシュを呼び込み、それに対するあらたな戦いを呼び込んでしまう。つまり互いに「どちらが上に立つか」という基本的姿勢そのものは変わらず、あるときは味方側が、あるときは敵側が上に立つというシーソー・ゲームをしているにすぎないというのである。

　　私たちがなさねばならないのは、どちらかの味方をすることではなく、二元的構造自体にずっと焦点を当て続けることである。（前掲書）

　転移–逆転移関係の中で精神分析家が患者との情緒の波に巻き込まれたとき、分析治療者は患者と自分とのそれぞれに心の中で身を置きながら、二人を巻き込んでいる波の正体を見極めようとする。分析家ベンジャミンはそれを、男性と女性という「ジェンダーの戦争」においても行おうとしているのである。
　ひとの成熟が最終的にどうしても必要とする「相互承認」の力こそが、「ジェンダーの戦争」を終わらせるためにも必要であるとするこのベンジャミンのスタンスは。従来の女性運動に存在していた一方的、好戦的な戦略とははっきりと異なっている。それはより冷静かつ緻密に、生じている状況そのもののより深い次元に目をこらし、対立を乗り越える共通の基盤を切り開くものだ。」

☆mediopos-2899　　2022.10.25

千利休は大永二年（一五二二年）生まれ
今年二〇二二年は生誕五〇〇年にあたる
その記念として本書『利休の黒』は出版されている

利休にとって「黒」とは何か
利休の考えを知るための史料は乏しいが
著者の尼ヶ崎彬はその真意に迫ろうとする

利休は一五八七年
博多から来た神谷宗湛にこう語っている
「赤は雑なるこころ也、黒は古きこころ也」

そしてその「黒」を
長次郎の黒楽茶碗に見出すことになる

赤は変わりゆく「随縁」の心であり
黒は「こび」ない
そして「偽善」のない「不変」の心

利休は珠光や紹鷗の
核心にあるものを明らめようとし
「偽善」である「軽薄」を排除しようとした

無論「偽善」とは倫理的な有り様だが
それを感性的な美的なもののなかで
「こび」（媚び）の要素をなくすことによって
表そうとしたのだろう

そこには中世の日本における
仏教思想の影響がある

茶の湯という日常世界から脱した
「脱俗」の空間において
色眼鏡を外した覚醒した眼で
世界の真実を見ようとしたのだ

しかもそれを
俗につながる倫理的なもののなかではなく
非日常としての脱俗的な場において
感性的な美を通じて表現した

それは「精神における自由」を
「感性における自由」「美における自由」
へと展開させているとでもいえるだろうか

▪尼ヶ﨑 彬『利休の黒 美の思想史』
(尼ヶ崎彬セレクション 花鳥社 2022/7)

▪尼ヶ﨑 彬『利休の黒 美の思想史』
(尼ヶ崎彬セレクション 花鳥社 2022/7）

（「第10章 利休の黒」〜「4 「こび」と「異風」」より）

「ここからは私の推測を含めた仮説を語ることにする。
　利休は革命をやろうとしたわけではなかった。茶の湯の歴史を溯れば、華麗な道具ショーとは異なる一筋の道があるように見えた。知覚は紹鷗が、遠くは珠光がしていたと思われるやり方である。利休はその後継者であろうとした。そのために、それまで漠然としていた珠光や紹鷗の核心にあるものを利休は明確にしようとした。いや、再発見しようとしたのだと言った方が近いかもしれない。
　利休は「軽薄」を排除しようとした。それはロドリゲスのいうように一種の「偽善」であるからだ。だが「偽善」がよくないという判断は人の行為についての倫理的判断であって美的判断ではない。だから「軽薄」か否かという判断を茶室の設計や道具の選択の場面に適用するとき、それを美意識による判断に変換しなければならない。そして倫理的な言葉を感性的な言葉へと翻訳しなければならない。当時、その美的特徴を表す言葉の一つが「こび」（媚び）であった。」

（「第10章 利休の黒」〜「5　利休の理想」より）

「茶の湯において「こび」とは道具について言われる言葉だったようだが、利休は茶会のあらゆる要素から「こび」をなくそうとした。大名たちの社交あるいは権勢誇示のための茶会は仕方ないとして、「数寄」の茶会からは「こび」や「偽善」の要素をなくそうとしたようである。それは客をうわめだけの豪華さや精神を眠らせる快楽で喜ばせることはしないという形であらわれた。」

「そもそも日本の遊宴の歴史は、日常からの脱出のための仕組みを積み重ねたものだった。まず冒頭の式三献の儀礼からして、これは「ハレ」の時間であって、日常とは違うものだという意識をもたらす。だから衣装もこの日のための特別に誂えたりする。合間には主人と客との間で高価な贈物が交換され、能や相撲などの余興があり、いよいよ勝負事などのメインプログラムがあり、その後場所を代えて酒宴となる。酔って日常の秩序を踏み破っても許され、「無礼講」という言葉さえ生まれる。「乱酔乱舞」は遊宴の最後を記述する決まり文句となる。宗教行事としての祝祭の日が「聖」なる時間として「俗」なる世界の秩序から解放される風習は世界的に見られるが、遊宴とはいわば小さな祝祭なのだと言えるだろう。
　けれども中世の日本には、日常世界から脱出するもう一つの方法が提唱された。それは酔うこととは反対に、いわば醒めた眼で世界を見ようというものである。しかも市中にあってふだんは俗世界を生きつつも、私的な時間には「脱俗」の空間にこもり、醒めた眼で世界の真実を見ようというものである。
　この背後には仏教思想がある。それによれば、私たちはふだん色眼鏡で世界を見ており、真の世界を見ていない。色眼鏡とは、私たちが生まれてこのかた頭と身体にたたき込まれてきた世界観である。それは世間を渡る道具としてとても便利であるものの、ほんとうの世界のあり方を見ないで生きてしまうことになる。もし私たちが色眼鏡を外して人や自然や事物を見たらどうなるのか。それは覚醒した眼で世界を見直すということなのだが、そのとき見える世界（真如実相）はじつに感動的なのだそうだ。
　おそらく利休がやろうとしたことは、全ての人と物から肩書や「こび」や「偽善」などの表皮を剥ぎ取って、ありのままの姿となった人や物とあらためて出会ってみるということだったのではないか。そのために「もの」からは由緒といった意味や、感情を操作する要素を排除し、人からもまた貴賤の未分や職業などの付随的意味を排除して、いわば裸の個人として、ただ互いに敬意をいだきつつ相対することを理想としたのではないか。それは日常の社交の場では不可能になことだ。なぜなら日本の伝統では、社交の場では常に相手との身分差を考慮して対応しなければならないから。ただ茶の湯という場だけは特別だ。その短い時間と空間だけは非日常であることが許される。そこでは誰もが日常の「我」を脱ぎ捨てることができる。」

「なぜ利休は黒という色にこだわったのだろう。そのヒントになりそうなのは一五八七年に博多から来た神谷宗湛に語った「赤は雑なるこころ也、黒は古きこころ也」という言葉である。赤はさまざまな心を表し、黒は昔からある心を表すというこの対比は、まさに紹鷗の章で述べた「随縁」と「不変」にあたるだろう。私たちは世の中に花だの波だの多様な色と形を見いだして愉しむ。しかしそれらはすぐに消えてゆく仮の現象であり、その根底には色をもたない存在が常にある。とすれば究極の道具はつい人の眼を捉えるような「こび」た色を持ってはならない。不変の「古きこころ」は黒くある他はない。マットで光を反射しない長次郎の黒楽茶碗はまさにそのような物質であった。利休は紹鷗を偲びつつ、こう思ったのかもしれない。五四歳で死んだ紹鷗が手に入れられなかった「ただ一つの道具」を自分はついに手に入れた、と。」

《目次》

序 「生の術」としての茶道
第1章 日本の奇妙な文化 宣教師の見た「茶の湯」
第2章 「茶の湯」前史 遊宴と貴賤
第3章 婆娑羅と闘茶 「雅」から「数寄」へ
第4章 『山上宗二記』のストーリー 秘伝と禅
第5章 珠光の美意識 「雲間の月」と「藁屋に名馬」
第6章 都市の隠者 「侘び」と「中隠」
第7章 紹鷗の開眼 「不変」と「随縁」
第8章 秀吉のかき回し 茶の湯と政治
第9章 茶道具の誕生と変容 「飾り」と「見立て」
第10章 利休の黒
終章 その後とこれから
/引用文献/参考文献/登場人物略記

☆mediopos-2900　　2022.10.26

高橋睦郎は一九三七年生まれの八十四歳
谷川俊太郎は一九三一年生まれの九十歳
この二人からはずいぶんと栄養をもらってきた

とくにここで最近では
塚本邦雄とおなじくらい
高橋睦郎の作品の追っかけをしている

塚本邦雄も高橋睦郎も
谷川俊太郎ほど読みやすいわけではないが
年を経ることで少しばかり言葉の深みに開かれてくると
はじめてその言葉の滋味を味わうことができる

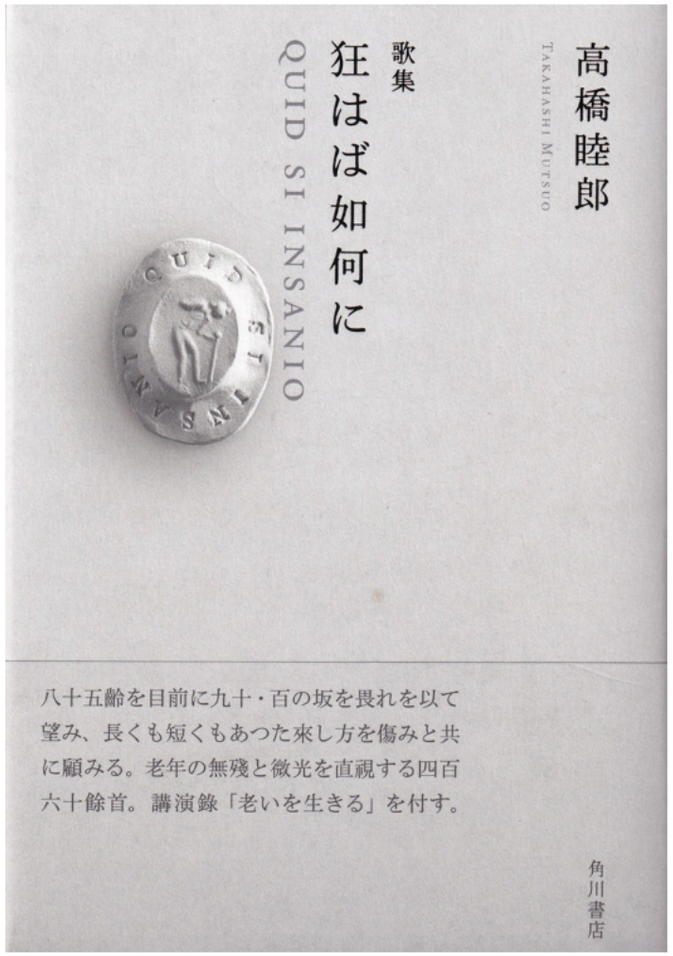
高橋睦郎の歌集も最近になって
古書店で見つけたりもしているが本書は最新歌集
二〇一四年以降の年四六〇余首が纏められている
なんと『歌集 狂はば如何に』である

「狂ふ」といえば
昨今の世の中を見ていると
スーフィーの逸話をよく思い出す

あるとき水の性質が変わり
その水を飲むことで人びとは狂ってしまった
ひとりの男だけが賢者の警告に従って
狂気の水を飲まないで正気でいられたのだが
人びとはその男を狂人だと見なした
それにたえられず男はみんなと同じ水を飲む
すると人びとは男のことを
「狂気から奇跡的に回復した男」と呼んだ

ある意味で
この世で生きることの多くは
人を狂わせる水だらけだが
このスーフィーの逸話をさらに進めてみると
その水を飲んで
みんなと同じようになりながら
別の意味での狂人となって
醒めているということはできないだろうか

▪高橋 睦郎『歌集 狂はば如何に』
（KADOKAWA 2022/10）




じぶんだけが
狂気の世界から離れているということは
それはそれで貴重なことだが
狂気の世界にありながら
なおも醒めていることのほうが難しい

「狂はば如何に」とみずからに問い
世に棲みながら「はざま」を生きる
ひょっとしたらじぶんは
すでに狂人ではないのかと問うこと

シュタイナーは社会論のなかで
じぶんだけが指をしゃぶってきれいでいようとする
そんなありようを批判している
悪とともに生きながら醒めていること
そのことこそが現代を生きるということなのだから

重要なのはその醒め方だろう
自分は狂人ではないのか
「狂はば如何に」
そう問い続けることだ

高橋睦郎のような年齢になっても
みずからに問い続けることができますように

■高橋 睦郎『歌集 狂はば如何に』
（KADOKAWA 2022/10）

（「狂はば如何に」より）

「日日に見る鏡の中の我はこれまことの我に非ず何者？

この肉體（からだ）いづちゆか來しそこここの微塵集まり成りし虚器（うつは）か

偶（たまたま）に成りし肉體に入り棲みし靈魂（たましひ）てふも微塵集成

偶體に棲まふ偶魂彼もなほ生きてしあれば狂ふことあり

鞭打たるる驚馬の號泣街上に狂を發せりフリドリヒ・ニイチェ

鞭打たるる驚馬やあるいはpoesieの世紀末的假現なりけむ

狂はざる時の諸作にいや勝る深き詩として狂へるニイチェ

ヘルダアリン　ニイチェ　トラアクル　ぬばたまの黑深森が三愛兒（みたりめぐしご）

ゲエテ狂はず『ファウスト』を成しリルケまた狂はず『ドゥイノの悲歌』を遺せる

佛界を捨て魔界にぞ分け入るや狂雲子一休彼ぞ眞詩家（うたびと）

「肉體は靈魂の獄　狂すとも破獄せよ」然（しか）古き智慧告（の）る

わが靈魂この肉體に獄せられ七十餘年いまは狂はず

七十餘年狂はず在るは現身（うつそみ）われ贋（にせ）うたびとの證（あかし）ならずや

八十路はた九十路越え百とせの峠路に立ち狂はば如何に」

（講演録「老いを生きる　跋に代へて」より）

「これから「老いを生きる」といふ演題でお話するわけですが、このお集まりの事務局長でいらっしゃる新村先生からご依頼を賜った時點では、正直のところ、もう一つ實感がございませんでした。たしか一昨年、平成二十九年の夏の終はりか秋の初めのことで、當時の私はまだ七十歳代でありました。七十歳代と申しましても、そのどんづまりの七十九歳だったのですが、七十九歳と八十歳とでは當事者にとつて大違ひなのですね。
　古来、六十歳を還暦と言ひならわし、私の少年時代の大人たちは、六十の聲を聞くと、世間の期待どほり身心ともに衰へて見えたものです。（･･･）いまはこれが八十、九十になつてゐるやうで、先日も元東京大學總長有馬朗人先生に、「高橋さん、八十の坂の後に八十五の坂があるんだよ、これを越えるのが大變でね」と言はれたばかりです。」

「現在では洋の東西を問わず、四十歳などでは一人前とは認められない。その意味では男の大厄、つまりどんづまりの厄年も八十歳とすべきではないかと、ここで提案しておきたい。さて私は八十歳を過ぎて衰へを日日實感してゐると申しましたが、それはとりあへず元氣だといふことでもあります。元氣でなくなつたら、衰へを日日實感などと暢氣なことは言つてゐられない。とりあへず元氣であることを、兩親か神様に感謝しなければなりません。」

「かつては落語に登場する横町のご隠居のやうに、老人といふ存在が煙たがられつつも、重寶されてゐました。何かわからないことが生じると、あの年寄りのところに行けばわかるんぢやないかとお伺ひに行つたものです。（･･･）現在はそんなことがめっきり減つたのではないでせうか。老人に聞くよりコンピュータに聞いたはうが早い、といふわけです。
　しかし、コンピュータはコンピュータにすぎず。人から教はることには敵はないのではないでせうか。私たちが若いときに老人のところに行つたのは、いまは若い自分もそのうちかならず老人になるのだといふ思ひが、意識的か無意識的かは別にして、どこかにあつたからではないでせうか。かつて若いとき老人に會つて直接教はつたことだけでなく、見るろもなく見えてゐた老人の立居振舞が、自分が老人になつた現在、ずいぶん役に立ってゐます。その意味では今日の若い人たちには、自分たちがそのうち老人になるといふ想像力が缺けてゐるように思はれてなりません。」